明治三十一年七月二十五日發兌

# 女鑑

第百六十一號

東京國光社

# 女鑑第百六拾一號

## 目録


**女鑑**
心な明瞭にすべし……一

**論説**
家庭の衛生と婦人の注意……鹿山……四

**史談**
孝女高青が母……鷲井福子……七
孝女やゝ女……白鷺庵主人……一一

**家政**
折形……有住斉……一二
茶の湯……関菜雄……一四
女禮……有住常子……一六
たちぬひ……西山たい子……一八
だいどころ……一九
洗濯……二〇

**學園**
秀歌集（廿六）……鷲井正男……二一
源氏物語講義（七）……下田義天類……二四
漢文學講義（十）……大林弘一郎……二九

**叢録**
神宮御炎上小史（二）……安藤正次……三八
主從心得草（續）……諏訪忠元……四〇
最明寺教訓百首（四）……福原董子……四三
梅雨のたびの記（續）……佐々豐水……四六
戒めぐさ……三浦千春……五〇
井蛙小録……井上頼文……五一
執心（三）……蓬生屋女史……五二
蘇小妹三難新郎（四）……湘玉女史節譯……五五
書きあつめ（二）……草の屋主人……五八
茨子笑談集……金津常十郎……五九
梅の下風（五）……白魚女史……六一

**文林**
歌……東久世通禧……鍋島直大……六五
仝……高崎正風……前田利嗣……六五
仝……竹屋光昭……長谷信成……六五
仝……諏訪忠元……宮地嚴夫……六五
仝……北郷久政……鎌田正夫……六五
仝……大口鯛二……岩崎勝從……六六
仝……小出粲……下田義天類……六六
仝……大畑弘國……三浦千春……六六
仝……三輪義方……藤井行麿……六六
仝……草野隆道……足立正枝……六六
仝……後藤春藏……木庭芳香……六六
仝……伊藤純三……坂本泰造……六七
仝……安齋篤敬……伊東祐賢……六七
仝……近衞貞子……前田郁子……六七
仝……西四辻茂子……柳原愛子……六七
仝……南部柳子……保科節子……六七
仝……小池道子……三島竹子……六七
仝……三宅龍子……河村重子……六八
仝……土岐幾子……安東菊子……六八
仝……清水菊子……高橋美代子……六八

**雜報**
皇后陛下……六八
宮中御歌題……六八
米澤高等女學校……六九
京都高等女學校……六九
學校生徒の服裝……七〇
心得ぬこと……七〇
このごろ聞くに……七〇
孝子……七一
又孝女……七二
至情……七三
孝子……七三
死諫……七三
これも死諫……七四
貞婦……七六
篤志……七六
風俗矯正……七六
下さま……七六
婦徳會……七七
女備前の檄文……七九
老勇……七九
女生徒の日射病……八〇
發育の最盛期……八〇
癩病患者新治療法……八〇
牛肉の貯へ方……八〇
攜便攜帶食料……八一
食用米の不足……八二
新民法の講釋……八二
外人養子入夫法……八二
新戸籍法の實施……八二
看護婦講習生募集……八三
新刊しなさだめ……八三

**敎の庭**
兼題歌數百首
文數十章
ほかくさぐさ

口繪……高橋松亭

孝女萬吉が母



## 心を明瞭にすべし

芙蓉の眸、如何に明なりとも、心くらくば何かはせむ、人は見目よりも心にこそ。容色如何に玉のごとくかゞやきほこるとも、心土塊たらば何かはせむ。形貌如何にあやにしきとり重ねて、あたりまばゆくつくり立つるも、心あらたへのあらくば何かはせむ。げに、容色、形貌の美は春のあわゆきよりもはかなく、やがてはむら消の下の黑土あらはれて、見悪しとも見にくかるべし。されば、容色を盛にせんとならば、心をまづ玉にすべし。金銀を身に飾らんよりは、むしろ心を金銀にすべし。容色の玉は砕け安し、心の玉はうばふべからず。人はたゞ心を月の如く明瞭にし、雪のごとく清朗にし、水の如く潔白にし、心に一點の隈なからしめ、目にふるゝもの耳にふるゝもの、口にふるゝもの、身体にふるゝものゝ、浄、不浄、正、邪、善、悪

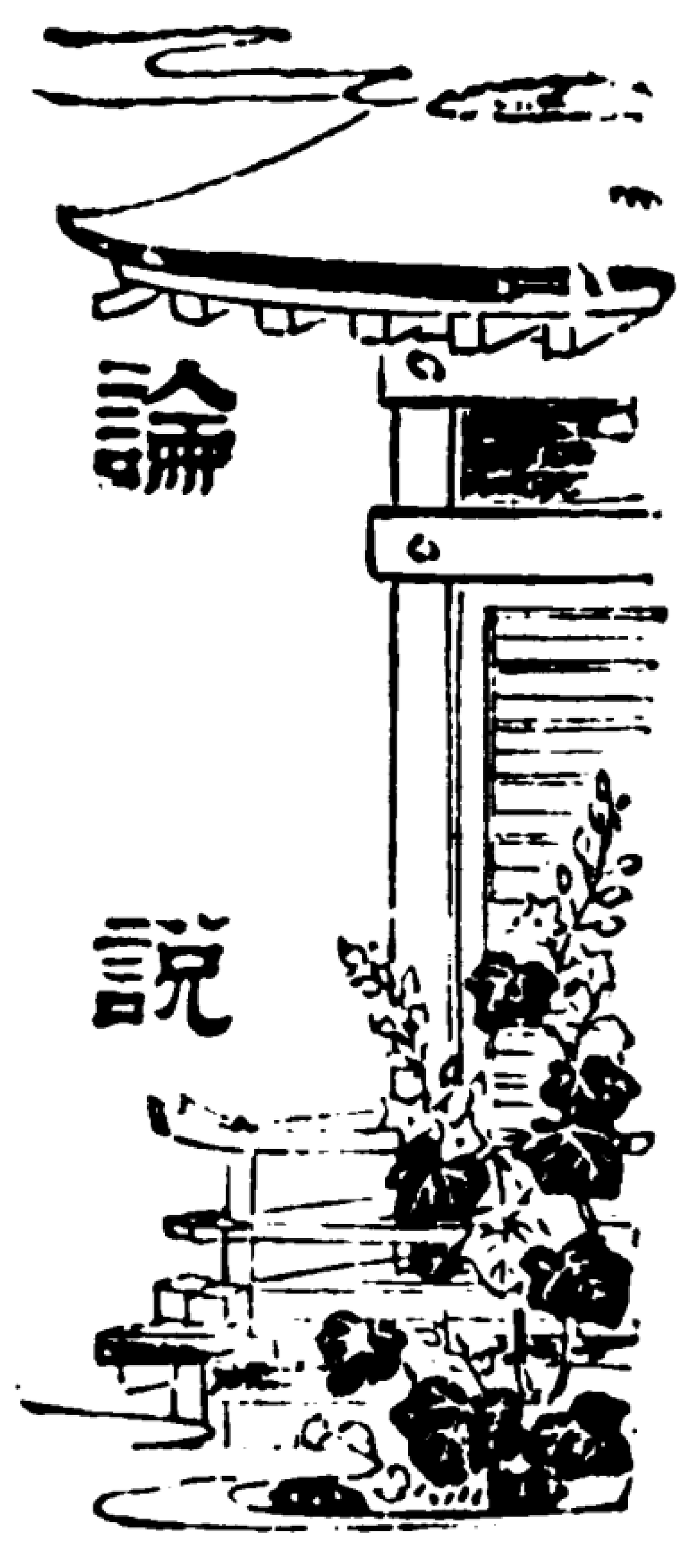
をよく分明ならしめ、また、よく、心を日光の如くにし、四季の如く宜にし、風の如く快智あらしめて、淨、不淨、仁、不仁、善、不善、宜、不宜をよく撰び、よく行はしめば、賢よりも賢にうつりて、やがては暗中の燭火、夜光の玉もたゞならず輝き亘りて、世の寳となる事多かるべし。

心を明にせむ事、男子も元よりのことながら、女子は殊に性陰にして、心暗きものなれば、尤も心を明瞭にせむ事、必要の尤も必要たるものなり。然るに、婦人、その容色をつくり、衣裳を薫せざるものは、殆どあらぬ如くなれど、心を明瞭に、美玉にせんずるもの少きぞなげかはしき。

必竟、婦人に嫉妬の心多きも、心明瞭ならぬ故にして、たゞ已ある事を知り、已をのみ用ゐんとして、人の善をねたみ能をそねむなり。心明ならば、善はよく、已之に則り、能はよく已之に習ひ、就て以て玉の光を増す、よろこぶこと事こそあれ、そねむことを何ぞ要せん。又妻として、夫、他の女に迷ふを妬する、そは夫もと不善なればにて、女性の情とは云へど、不善はたゞ諫め、たゞさとして、寵を奪はれ

じとするは情なれど、之を怨み、之をそねみ、自ら不善におちいるは、心もと明瞭ならねばなり。又、女子多く愚痴なるも、心明ならず、潔白よく事を處理するを知らねばなり。何にもせよ、婦人心明瞭ならずしては、家に在りて、親、兄、姉のよき教を容るゝ事能はず、悪しき友や婢が言退ぐる事能はず、嫁して舅姑が諫をきく能はず、夫に善をすゝめて、世を稗益する事能はず、母となりてよく子が善をすゝめ、不善を誡め、賢より賢たらしむる能はざるなり。流石明治の御世、女子教を受け、志を高尚ならしめではとて、高等の教育、女子の師範たる學校さへ設けられて、子が教を受けむとて、日々教の庭に行きかふ人々の多きぞうれしけれど、またたゞ華奢を高等と心得、學問を明教と思ひ、たゞ衣服を華にし、用具を盛にし、身のみ重くして、心は輕々しく、學問を鼻にかけ、能をほこりて、長者をも敬せず、男とも性を分たず、たゞ驕り、たゞ逸、之を以て高等教育をうけしとし、師範たるものと心得るは、大なる過にして、もと心明ならねど、露を玉と思ひなせる過なり。男子にてもしかれど、婦女が學問をなすは、もと其の能をほこらむとにはあらず、

心を明瞭にするにあり、心を善玉にするにあり、瑳けよや婦人、磨げや女子、とぎてよく正邪を分ち、瑳きてよく事を明瞭にし、實に白妙のはちすの上の露の間も、あきらけく潔よからむ事を祈るべし。




## 家庭の衛生と婦人の注意

鹿山

家庭の衛生とは何事ぞ、精密に之を説くときは、其の種類頗る多く、専門家にあらざればば之を詳知することと難し、故に余は通俗に之を解釈し、讀者諸子の耳に入り易きを務むべし。先づ簡易に之を區別するも、家庭に於ける衛生中には、飲食の節制、選擇等あるべく、衣服の適否あるべく、疾病の豫備、療養等あるべく、運動起臥の時間、過不及あるべく、讀書、執務、睡眠の長短、勞逸あるべく、家屋、房室、邸園、器物の新陳、廣狹、清汚等あるべく、空氣、用水等の流通、清濁もあるべし。其の範圍や廣く、其種類

や多し。余は今此等の事物に對する婦人の衛生的任務を叙せんとす。社會公衆に對する衛生問題は、警察に屬し、衛生官吏に屬し、爰に之を論ずるの限りに非ず、唯本題に於ては家庭に於ける婦人の衛生的注意を促すのみ。

家庭に於ける警察官、檢疫吏は何人ぞと問はゞ、余は直に嚴正なる婦人と答へんと欲す、婦人は家庭に在ては實に風俗、飲食、疾病等凡て衛生的の事務に當るべき位置に立つ。婦人にして若し家庭衛生の事務を忽にし、其家族僕婢の爲すが儘に放任せんか、一家忽ち散漫腐亂して濟ふべからざるに至らん。古來聖賢俊傑を產せる家庭には、必ず嚴正貞實の婦人あり、家制井然として紊れず、溫厚玉の如き君子、猛氣虎の如き英傑、皆此の間より蔚興し來るを見る、故に婢僕を使ふ貴婦人たると躬ら家政に任ずる中等以下の婦人たるとを問はず、苟も其家政の整理を期し、家族の健全を望み、子孫の賢良壯康を希ふ以上は、決して家庭の衛生を等閑に附すべからざるなり。之を近年の統計に徵するに、我が邦少年男女の近視眼、肺患等は歲を逐ふて增加するものゝ如し、是れ豈大に怖るべきの內憂に非ずや。

啻に近視眼、肺疾等の增加するのみならず、我邦年少子弟の身長體力等も亦逐年矮弱に赴くの弊害を發せり。余は前號論說欄に於て時弊矯正に對する婦人の覺悟と題し其一斑

を示せりと雖も、今や家庭に於ける婦人の衛生的事務は漸く複雜緊切に赴くの時候に際したるを以て、特に婦人の注意を促さゞるを得ず、蓋し一國の文野は種々の點に現はれ、隨つて種々の點より之を觀測し得るものにして、假令へば家庭及社會の衛生思想及衛生機關の進度如何を撿せば、吾人は其國民の文明の程度を測定することを得るものとす。看よ、日本人の、支那、朝鮮、西比利亞等に到るものは、皆其道路、家屋、衣服、器物の不潔陋穢なるを罵るも、之に反して英佛獨米に行きたるものは、齊しく其壯麗偉觀に驚くを以て之を卜知すべきなり。

抑も家庭に於ける衛生的智識の缺乏と發達とは、延て社會の衛生上、風俗上、經濟上に其影響を及ぼし、一國の文明富强を增進する要素の一原子たるが故に、之を輕忽にするものは、是れ則ち國家の文明富强を拋棄するものと謂はざるべからず。我が賢良なる姉妹諸子は果して家庭衛生の爾かく貴重なるを知るか、苟も之を知らば、少年子弟の飲酒喫煙の如きは、諸子の第一着手に之を禁制し、以て滔々たる時弊を未甚に截斷すべき責任の懸る所に非ずや。家底に於ける衛生上の惡習陋慣や多し、然れども喫煙飲酒は最も直接にして且廣大なる弊害に屬す、家を愛し國を憂ふる婦人、之を目擊して子弟の耽毒に罹るを回救するの意なきか。

如是偏弊の責任は教育家實に一部を擔ふ、然れども家政上婦人は其最大監督者たらざるべからず、警察官たらざるべからず。

家庭の秩序を保ち、弊害を除き、國家の文明上に堅美の要素を供給する原始の物體、之を稱して婦人と言ふ、婦人の立つ所此の如く、其負ふ所彼が如し、豈自ら顧みて自ら省ふ所なかるべけんや、由來許多惡弊の我が家庭に盤屈するは、是れ全く我が婦人諸子の智識警戒の尙甚だ低劣粗漏なるを證するものなり。

噫。



# 史談

## 孝女萬吉が母

壚井ふく子

撫子の之ぞ誠の花の露と歌ひはやされ、鈴鹿山の孝子と行きかふ人の音にふりたてられし萬吉がやさしき露のおはれを尋ぬるに、また、はゝき木の、本のしづくのかゝるふし多くぞくまれける。その母なる人名をくめとて、伊勢の國鈴鹿郡坂の下宿古町の人市右衛門の妻なり、萬吉は實に此の夫婦が間に設けたる寳なり。市右衛門家もと貧しけれど、日々街道に出でゝ旅人の荷を運び、僅の賃銀を得て世を渡れど、妻子も、また、田畑のことをとり、夫と共に勞働して、やう〳〵細き煙をたてけるが、安永八年己亥三月市右衛門ははかな

くも春風に誘はれて、遠く根に歸りぬ。此の時萬吉はやう〳〵四歳、行くも歸るもまだ知らぬ年浪ながら、天性そなはる孝心は、はやくも之をいたむ事限なく、父が屍にすがりつきて晝夜哀悼の聲たゝず、呼子鳥如何に呼ぶとも叫ぶとも歸らぬ夫、甲斐なき父を呼びかふ妻子が悲哀の聲に、軒の燕もしとしはつとさしはれてつひとまず、さながら雛たる時を耻づるが如くなり。さらでも赤貧、主人が病死吊ひ等にいよ〳〵洗ひつくして、困窮云はん方なし。時に妻まだ年若う、深山木にはあれど、花のつや未だうせざれど、寡婦にて幼兒をはぐくみ覺束なき世をれくらむよりは、後夫をいれて、世を渡るべしと、近里の人々、さまざますゝめしかど、久米は之をうけがはず、不肖をあはれみてとかくのはからひはうれしう侍れど、今此の夫が形見の子、たゞ子故、後夫を入れて、よしや身はやすうれくらるゝも、この子にうき目を見するやうの事あらむも知らず、其の時如何なるとも妻が身、爭ふ事もかなはず、よしさる事あらじとも、我は二夫を重ねん心更になし、もとより數ならぬ母子ながら、兎にも角にも此の子のみをはぐゝみて、苦のたねとも樂のたねとも致し侍らん。かまへて御心をくだかせ給はでと、貞操固き赤心、辭む色にも言葉にも深う見えけれど、人々も其の動かすべからざるを知り覺束なみ、浪よするもあれど、感ずるもありて、又すゝむる人も絶えにけるが、之より久米は心をはげまし、常に幼子を懷にし、或時は背負ひ、朝にとく星を戴きて春のあら田あらすきかへし、夕に遲くすげの小笠の月のさすまでも早苗とり、あらがねもとくる田の畔に日中も息はず夏草刈りくらし力つきて、身の熱するを知らず、夏日のながきをなほ惜むのみ。つく〴〵と夜さむ身に通る冬の夜もすがら、繩なひ、糸繰り、身こゞえて覺えず、手にするものゝ落つるにもなほ屈せず、有明の月を見ではふしどに入りしことなく、其他、麥搗き、稻こぐ業にやとはれ、晝夜身骨を碎き、げに世にありて、世になきなげきし、唯

子が成育するをたのしみに、うき世をうしともせず、いそしみ暮せど、子も亦母を思ひて、こままはし、蟬とりなどのあどなき遊びもせず、はやく母がしりへに從ひて、小さき手に草ひき、夜もまた寢さめの床、心にかけては母を呼び、はやく母が辛苦を身にしめるもいとあはれなり。

さらでも住みわづろふ中に、妻また癪の病をひき起し、僅に持てる山も林も人に讓りはて、朝夕の煙をたてむよすがもなくなりしに、久米はひとりいらだてども、辛苦にくだけし身骨遂に起ずなりぬ。萬吉時やう〳〵六つ七つ、まだ難波づのよしあしも知らぬ撫子の身に、はやく之を思ひ悲しみ、力を盡して介抱し、其の病のしどし怠る時は、近隣に行きて藥を乞ひ、あつくせんじてすゝめ、揉みつさすりつして、病の愈えん事をねんじ、又日々街道に出でゝ往來の旅客の小さき荷など持ちて、僅の賃をとれども、やうやう母が懷をはなれしのみの子が、重きものを提挈する事能はず、いさゝかの風呂敷包、或は槍長刀なんどを持ちて、鈴鹿山の嶮岨を登り下れども、得る所は三錢五錢にすぎず。されど、萬吉は、雨のふる日も曇る日も、照る日もやすまず怠らず、幾度となく上りつ下りつ、げに己が足こそ槍の如くなりて、屈むることも叶はぬ程なる勞はなはつげで、幾度も家に立ち歸りては母が病をとひ、夕には其の得る所の金錢をあつめて母に與へ、藥をすゝめ、甘美を供するに、母はたゞ泣くばかりなり。

かやうに心を碎く中に、天亦災を下して、天明三年癸卯天下飢饉して五穀のあたひ貴く、尋常の農商、餓死するもの多き中に、萬吉は力を勉まし、半合一勺の米穀を得て、日毎に母に與へ、母食はざれど一粒も己れ食はず、偏に母が飢へん事を憂ふる孝子が心の苦しみ、つたなき筆にはのべも盡し難し。

其のことやがて近隣に聞えて、譽めそやさぬものはなかりけるが、一日東都の武士石川何某鈴鹿の峠を過ぎ、萬吉がさまを見て大にあはれみ、自ら其の家に立ちよ

りしに、思ひしよりもいとゞあはれまさり、深く其の孝心に感じて、白銀など與へ、同僚のものなども又立ちよりて、引出物とらせけるに、母子大によろこび、互みに禮をのぶ。さるほどに、萬吉かの送り物を持て、傍への部屋に行き、平身して伏するに、石川氏あやしみ、彼は何をするやと尋ぬるに、亡き父が位牌に手向けて禮をいたすなりと、泣く／＼母の答へけるに、旅人はいよ／＼感じ、共音にむせびて歸りけるとなり。されど常の飲食も、己は食はず、たゞ母に與ふをたのしみ、途中、旅人の餅など買て萬吉に與ふれど、己は一つも食はず、皆持ちかへりて、母に與へけるに、見る人感せぬはなく、皆鳥目など與へ、または手習せよとて、筆硯など與へたるもの等のため一々上げなどなかなかに十指百千度屈すとも數へつくすべくもあらず。之等の至孝やがて公に達して、天明七年丁未三月奉行所にて褒美として白銀二十枚を賜はり、また母を養ふ爲め、一日に米五合づゝ永く下されしとなり。

かつて天明四年甲辰の秋なりき、東都の人三橋成烈此の所を過ぎ、萬吉が事を聞きて、いたく感じ、

尋ねずはかけても知らじはゝき木の
　木陰の露に秋をふる身と

といふ歌をよみけるに、冷泉民部卿爲泰此の歌を御覽ありて、

なでし子のこれぞまことの花の露
　かゝるもありとあはれにぞきく

と詠じ給ひしを、やがて三橋成烈、此の御歌を額にしるして萬吉が家にかゝげ、往來の人の鑑となしけるとなり。あはれ鳥の中におのづから慈烏あり、又燕鳥あり。人に曾參あり、又呉起あり。孝不孝もとおのづからなるものにて、萬吉が孝心も、もと天性なりとは云へ、慈烏代々反哺の孝あり、燕々又代々雛たる日より、はやく母に背きて高く飛ぶ、萬吉が孝心も、又其母が慈心のこりしものならむと思ふにも、世に捨てがたきは、はゝその露にこそ。

## 孝女やよ女

白鷺庵主人

やよ女は、安藝の國廣島の城下なる竹屋町とて、いと貧しき者のみ聚れるあやしき群に住居ひて、良助といふものゝ姉なり。父は田中金右衛門とて、もとは領主に仕へまつりて、何不足なく暮せし者なるが、些したる事の過ちして、遂に浪々の身となりしより、昨日にかはる飛鳥川の、ながれ〳〵て、果てはかゝるいぶせき處にこそ味氣なき世を送ることゝはなりしなれ。

かゝる中にも、やよ女はその生れつき温順にして、父母に孝心ふかく、讀書の業をさへ一入好みてけれど、暇あるごとに手習ふ草紙の乾くまもなく、天才こゝに啓發して、天晴年歯には立ち勝りけり。十三歳の比よりは近隣の子女等に手習ふ道を敎へて、覺束なくも、兩親と弟とを育ひしが、一とせ父舌疽といふ病に罹りしより、少なからぬ醫藥の料を要し、只さへ貧しき生活の、いよゝ困窮に陥入りしかど、やよ女は悵るさまを兩親に知らしめず、よろづまめやかに取まかなひ、常に父の側をはなれず、懇に介抱しけること十三年の久しきにおよびしが、その甲斐もなく、遂に黄泉の客となりけるに、やよ女の悲しみは一方ならず、天を仰で呌ぶと雖も、行く水の再び歸さんすべもなく、爾後は、只管母をいたはり、慰めかしづきけり。母も元來多病の質にて、些したることにも太く悩みしが、父の失せにしより力落ちてや、手足も叶はずなりけるに、やよ女は心も心ならず、晝夜をわかず看病して、日毎の食事も己が手してくゝめ養ひ、またある時は母の徒然を慰めむとて、近きわたりに負ひ行きなどしけり。

さる程に、母は、とくより娘に相應しき聟とりて家をも治めまほしく思ひけるより、ある時、やよ女にその由すゝめ聞えけるに、やよ女辭て言ふやう、仰はさる事なれど、他人のいり來らんには、母上の介抱も心のまゝならず、種々の心遣ひや起らむ、母上の世に在す程は、この事ゆるし給ひてよとて獨寡をれり。

斯くて寛政元年正月、母も遂に病みてうせけり。年七十。やよ女は力なく／＼も、かたの如く野邊の送りを濟し、そのまゝ己が髪を切りて、百日がほどは、風雨のいとひなく、日毎に母の御墓に詣でゝ、猶生けるに仕ふるが如くしけり。されど、この事遂に領主に聞え白銀あまた給ひて之を賞せられたりといふ。



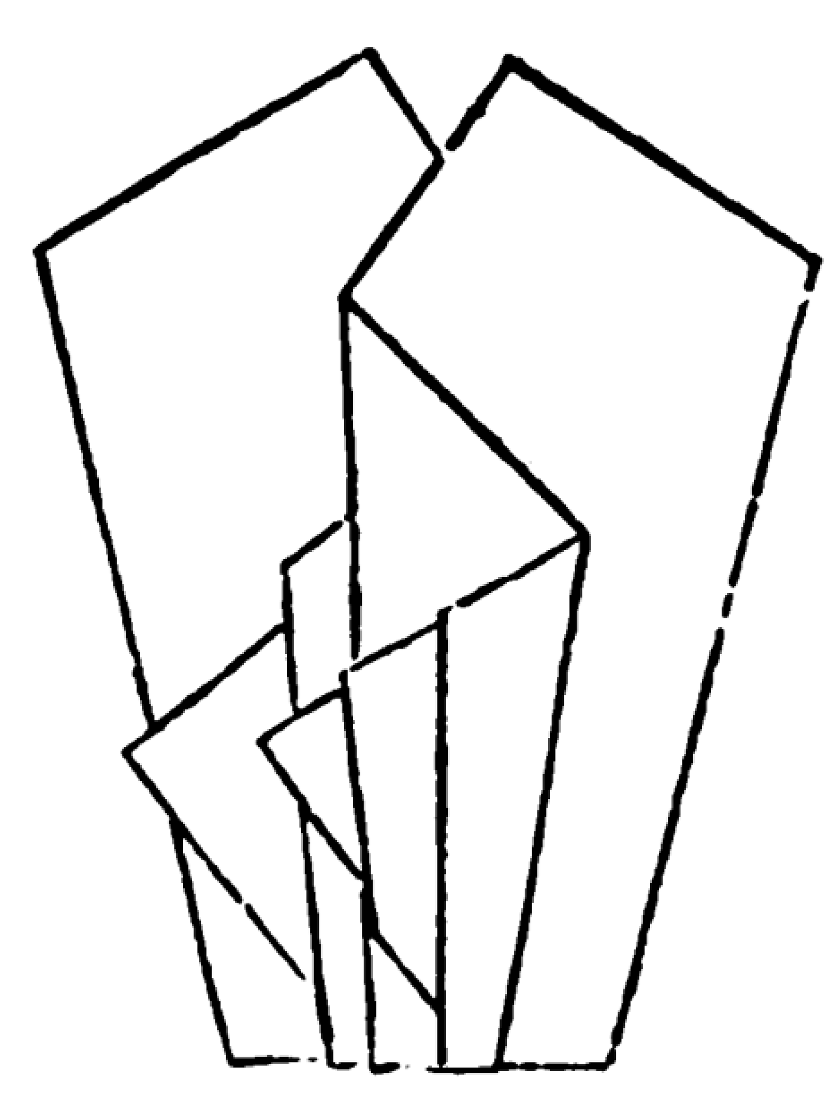
# 家政

## 折形

有住齊

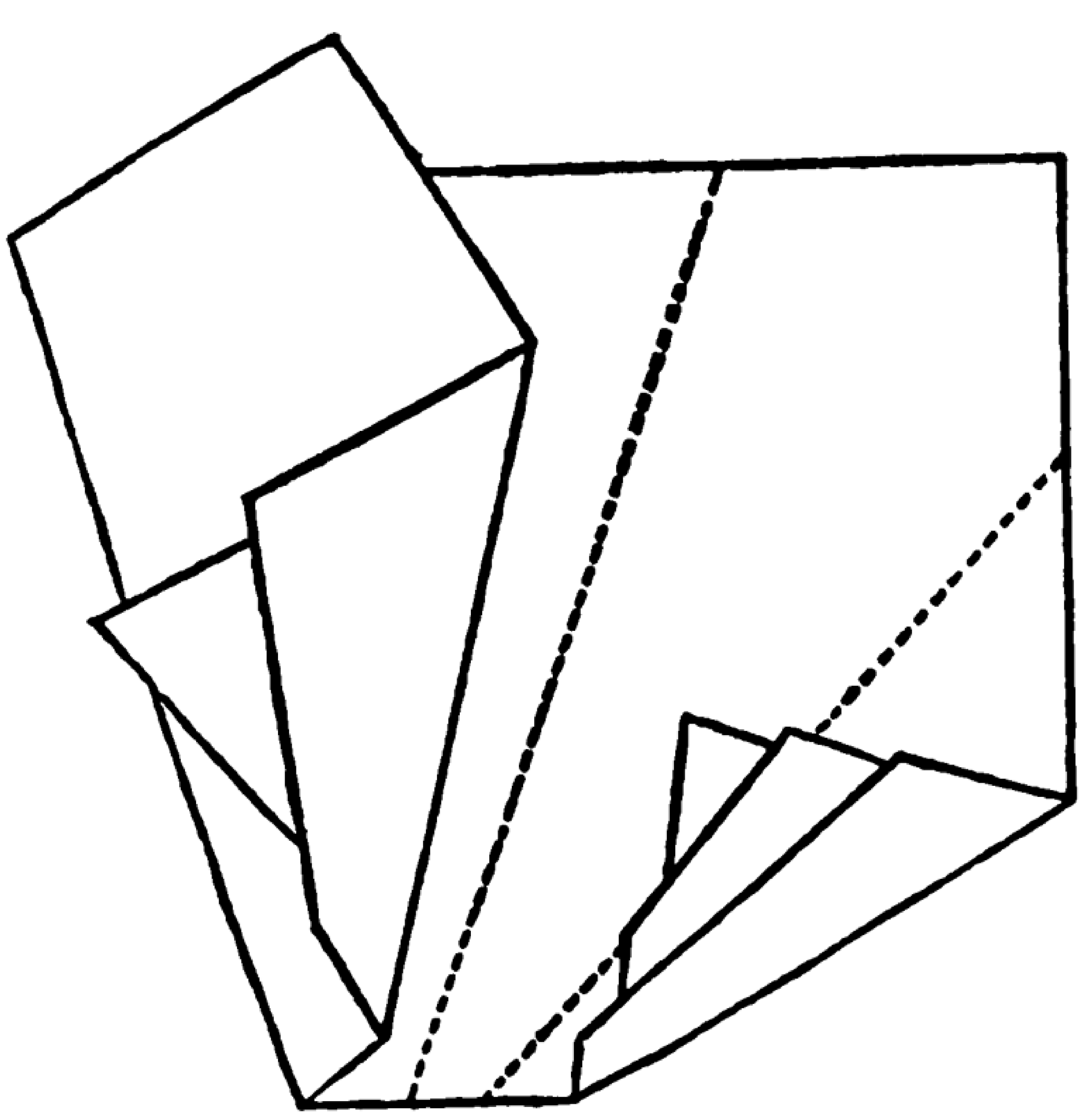
### 蓬菖蒲包

是は端午に用ゐしなり。下結をして上に水引をかくるなり。



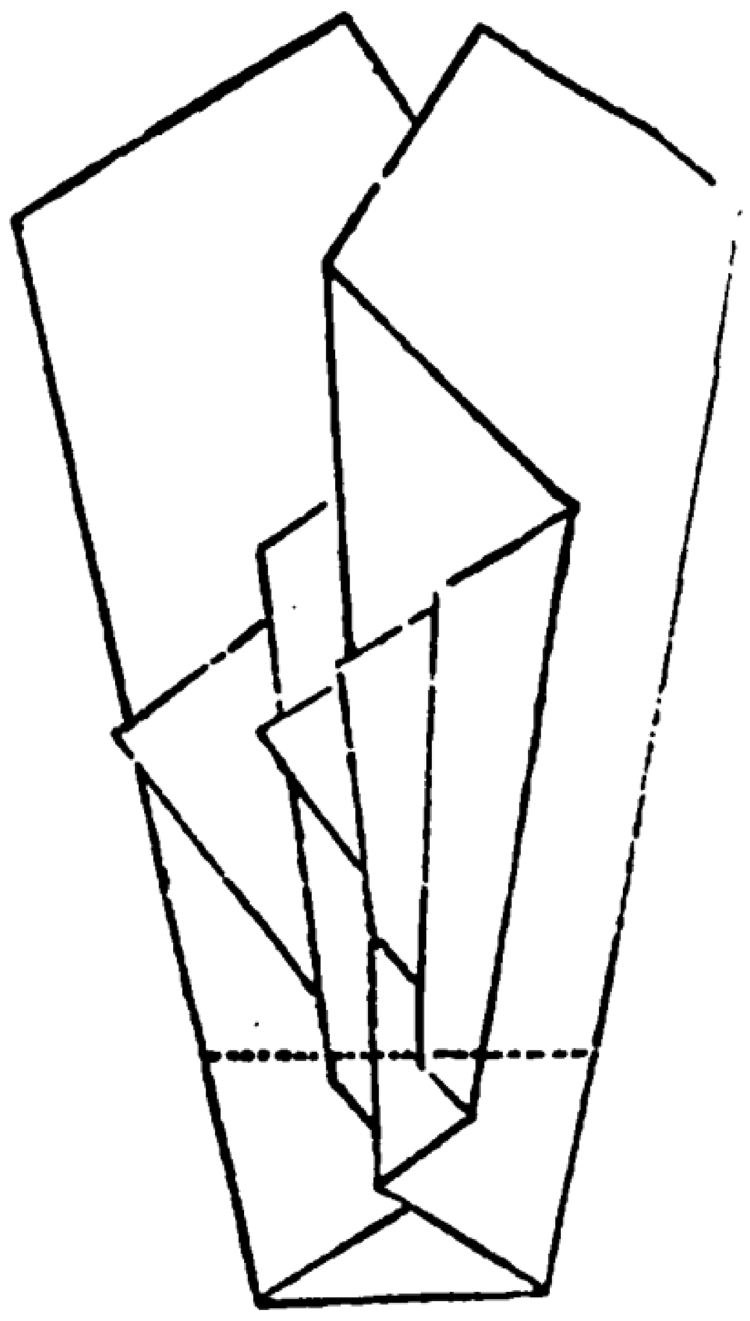
草花は總て下に向けて持行物なり。

れなじく解（一）



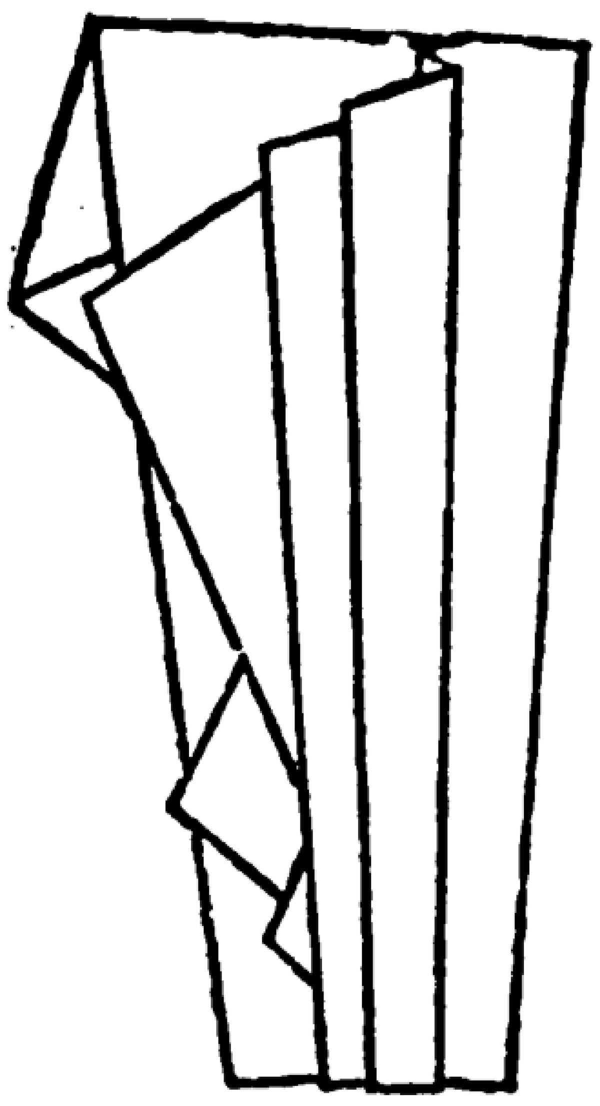
先づ斯の如く折りて、右の方に在る點線に從ひて、之を右に折り、后其の左の方の點線の處を左に折れば解（二）となる

おなじく解（二）



點線の處を裏に折り返して折上る。

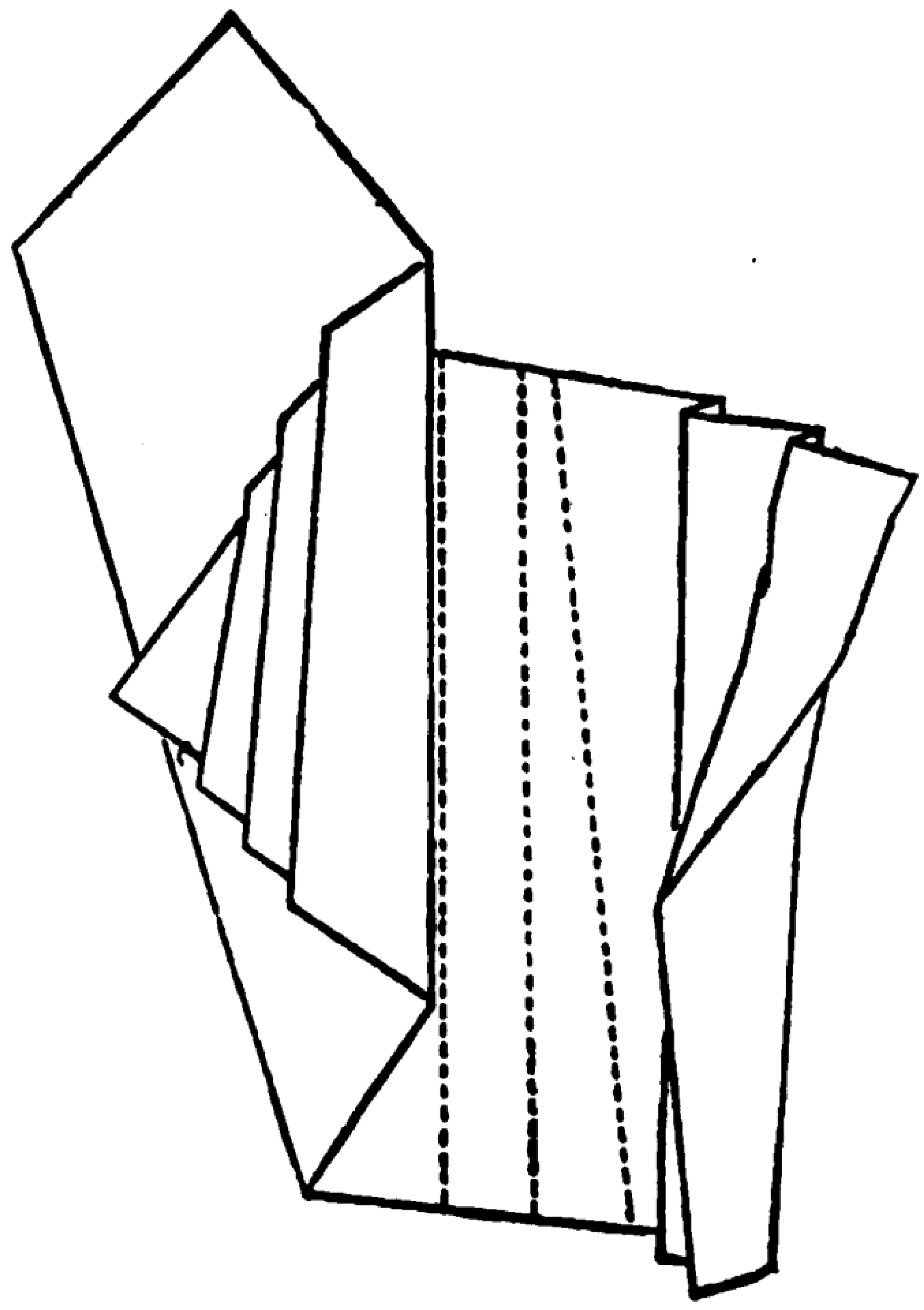
# 烏帽子形包



是は前髪を取てかくをりなして包むなり。額髪と書くべし。是は、必大高檀紙にて折るなり。水引はかけず

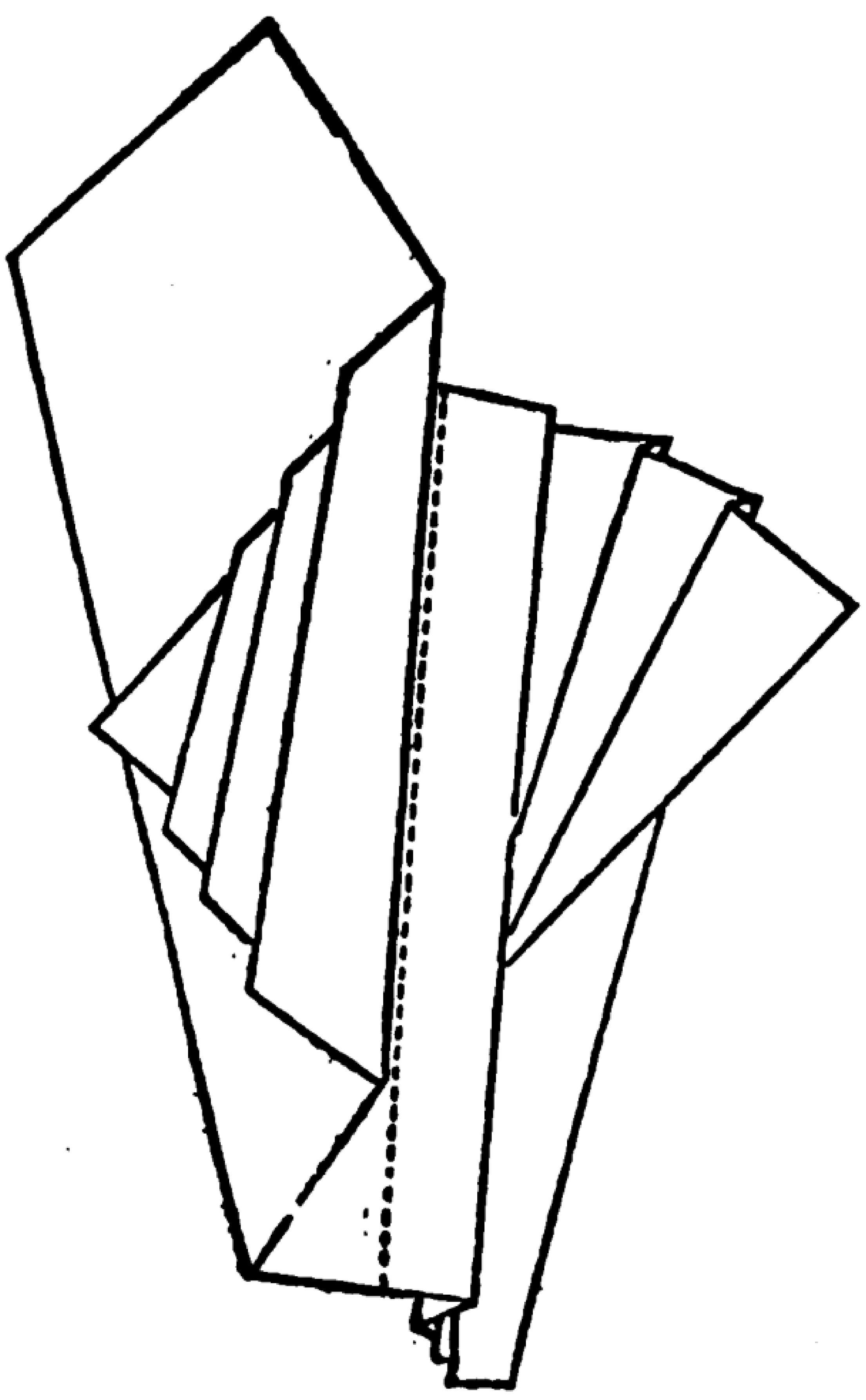
（近世用）

おなじく解の（一）



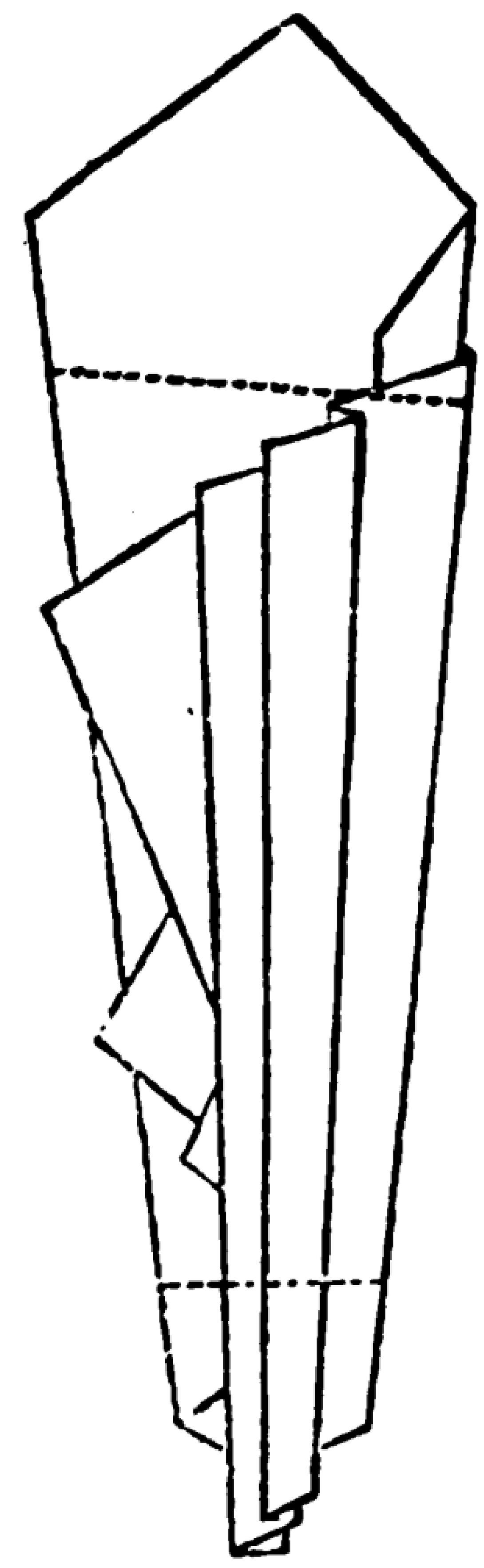
如斯折りて、此の圖の最も右に在る點線を左に折り、中央の點線を右に折り返せむ恰も次の解（二）となる。

おなじく解の（二）



此の圖の點線を左に折れだ解（三）となる。

れなしく解の（三）　此の圖の上下の點線を裏に折り返せば即烏帽子形包なり。



## 茶の湯

### 茶禮初學（前號の續）

孤峯庵不羨
關　葦雄

燒かまは、瀬戸、高取、薩摩、膳所、備前、信樂、伊賀、唐物、島物、又は棗を用る事も可レ有。是も古作樣々にて、町棗、藤重、紹阿彌、與三、記參、宗哲、道志等の内を可レ用。茶碗は高麗物、井戸、三島、判司、斗々屋、刷毛目、雲鶴、御本、堅手、伺北可レ有。和物は、樂燒、仁清、萩、薩摩、出雲、其他種類擧て難レ數程あれど、先以無事なるは、茶碗は樂家代々の内を可レ用。茶入は瀬戸棗の内、茶杓も諸流新古誰と難レ定。されども、其流儀々々の先哲可レ然歟。飜は瀬戸、高取、出雲、南蠻物樣々あれども、曲物何事もなくてよし。併、是も組合に因るべし。柄杓、茶巾は言不レ及、唯新敷清潔なるをよしとすれども、上等を言ば、柄杓は正玄、茶巾は照布友古縫を好む。茶筌は大和國の名産、添下郡、北倭村、高山、久保彦九郎氏の製するを吉とす。茶碗伊羅保、信樂等、燔腐の荒々敷ものには荒穗を可レ用、尋常は、數穗、煤竹を可レ用。水指も是と指しては難レ定けれども、先は鈎瓶形水指（但し是は角にて上に手あり、蓋は割ふた、檜にて作り、鉄釘にて打付たるもの也。利休好、能々水にて濡して用ゆ）曲物（但杉木地曲、櫻皮にて綴、

內外と二重に入子にして製し、共蓋、是も利休好、綴目を前に蓋の木目を横に遣ふ）等は柔かにて遣よきものなり。蓋置は、茶の湯には青竹を佳とす。帛紗は紫色を好む、鹽瀬織を可レ用、婦人は紅色を用ひてもよし、次に懷石の具は、先、折敷、利休好、飽目、山折敷等を佳とす。飯汁の椀は數種ある中に、黑色小丸椀は遣ひよきものなり。向付の皿は、染付吳洲、樂燒、今利、平戸、等の內、折敷と椀と並列して、位置取合よきを可レ用。兩繼は、（但し飯繼湯桶の二種を兩繼と云）普通は黑塗利休形を佳とす。是に丸盆二枚、飯杓子、湯の子取添ものなり。次に脇取盆と唱へ、飽目、かゞ綴、利休好あり。次に燒物鉢、和漢品々可レ有、見合可レ用、八寸、是は杉木地折曲也、盃、並臺、是も利休形を可レ用。吸物椀、是も種々の形有レ之、小形を好む。箸は、杉兩口、平角面取、利休形あり、可レ用。香物鉢、是も種々あるべけれども、燒物鉢に不レ同、土器小形を可レ用。次に、銚子、是も先哲の好種々の形あり。見計可レ用。菜箸は青竹を可レ用、兩口、平角面を不レ取、其他種々あるべけれども、紙數に限あれば、大略緊要の點をのみに止む。倘又勝手の具等に至ては、枚擧するに不レ遑、是も爰には畧す。

一路次樋竹、或は戸押ぶち、天井押ぶち等、所々見合、青竹に改むべし。

註釋、路次（但し路次と云は、數奇屋廻りの庭を云）。廻り垣根、所々青竹を可レ加、樋竹も同樣取繕可レ申、猿戸、天井、押緣、釣棚、釣竹、都て青竹を可レ加事。

一路次箒、內路次は蕨を用ゆ、外路次は棕櫚の葉箒を用ゆ、最棕櫚は每年青く改むべし。

註釋、路次箒、內路次は蕨にて製す、結方口傳あり、寸法あり。外路次棕櫚の箒、是は棕櫚の青葉にて結ものなり。何れも令孃諸君の玉手にては艱

難なる場合もあれど、是等は其宗匠に依頼する歟、又は荒物屋堀津長右衛門の店に言付て可レ令レ製。

一爐塗替、疊表替、茶筌、茶巾、帛紗、福瓶、炭斗等口切前に可レ改事。

註釋、爐檀、塗爐ならば、爐師へ言付て塗替べし。疊表は人にも可レ依、富貴ならば總替勿論なれども、尋常ならば見斗、所々拔替にするも一興なり、茶筌、茶巾、帛紗は既に前の序に言たり。福瓶、炭斗は、其年の新福瓶を口切に望みて可レ切事也。

一路次松葉敷樣の事、植込の下見合、所々敷也。石迄一杯に敷は不レ宜。

註釋、路次樹木植籠の下、所々に敷べし。飛石の際迄一杯に敷は不レ宜、特更に跪石の邊には注意すべし。

一松葉揚樣之事、内路次、數寄屋の前を少々大晦日に揚、春を迎へ、又正月末、或は二月へ入、其内路次を揚げ、扨又風爐に成、外路次を不レ殘揚る也。如レ斯三度に揚るなり。

此條は別に註釋を不レ要。

（以下次號）

# 女禮

## 料紙硯差上樣

禮節教授　有住常子

まづ硯筥の中を淸めて、筆墨水滴をそろへて蓋をなして、料紙の上にのせて持出るなり。料紙の折目は右の方になして持出るなり、硯は我方に順になして持出るなり、硯料紙の眞中を兩手にうけもちて、兩足をつまだてゝ、右膝頭をすこしうかめて右にすこし捻りて、眞すぐに立て左足より進みゆくべし、胸の通より高く持てゆく、さて人前三尺ほど前にとゞまりて、左の足を半足引て、左足の膝よりつきて、右膝を

次につきて、右膝をすこし引て爪先を平になし、左膝をすこし引て爪先を平になし、即ち硯を下に置べし。置様は、料紙を重ねたるまゝ左の方に置きて硯筥を右にならべ、料紙は其のまゝ置きて、硯筥のふたを両手にてとりて、右の方へと開く様にしてうら返して、両手にて右にすこしはなして置べし、次に水滴を取りて水を入るゝなり、左の手をつきて水滴は取るなり、墨をとりて、左の手をそへて持直してよき程すりて、又左の手をそへて持直して元の處に置くべし、次に筆をとりて、左の手にてさやを左の方にぬきとりて筥におき、左の手にて筆の穂さきをおしゆるめて、右の手に取直して墨をふくませて墨の右の方に、向のふちにかけて置くべし、かくる事は硯筥による事なり、中に筆架ある時はこれにかくる也。

かくして、大指をふちにかけて両手にて角の所をもちて、まづ手前の両角をおさへて、左の指を右の指の所へとふちの上をずらして大指をよせて、右の大指を向の方へとずらして、向の角をとりて、右にめぐらして、両手を手前の方へなしてとゞめ、又左の大指を右によせて右の大指を向によせて右にめぐらして両手をとゞめ、大指を手前の方に、殘りの指を左右のふちわきにかけて、おして進むべし、御右膝の前の方に進むるなり、次に料紙を、眞中を持て、右によせて我前におきて、硯筥の如くめぐらして、御前に硯にならべて進むべし、次に右に置たるふたを、我前によせて、是も右にめぐらして、おし進めて、硯筥の右の方へとならべ、三ッ並ぶ様に進むべし。

墨をすりたる時、手をつきてするべし、又時により、次の間にてすりても持出る事あるべし。

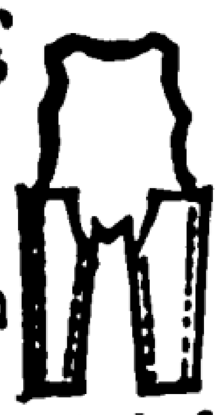
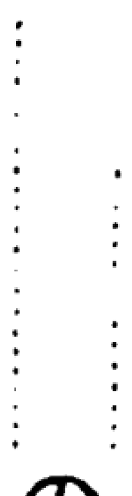
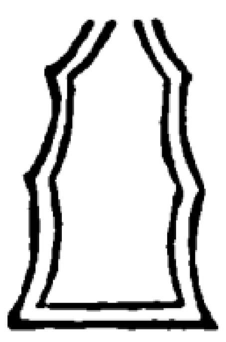
さて、すゝめをはらひ、両手を膝前にひきよせて、右膝頭をおして膝をすこし引てつまだち、左もかくしてつまだちて、又右をすこし引て、右膝頭をかゝめて、右にひねりて、たちて、右足よりあとさがりにさがりて、次に左足を引て、次に右足を、左足のあとの方へ、横

につけ、次に左足を、右足の先の方へ、たてにつけて、めぐりて、立かへるべし、兩手は膝の前におく事例の事なり。

# たちぬひ

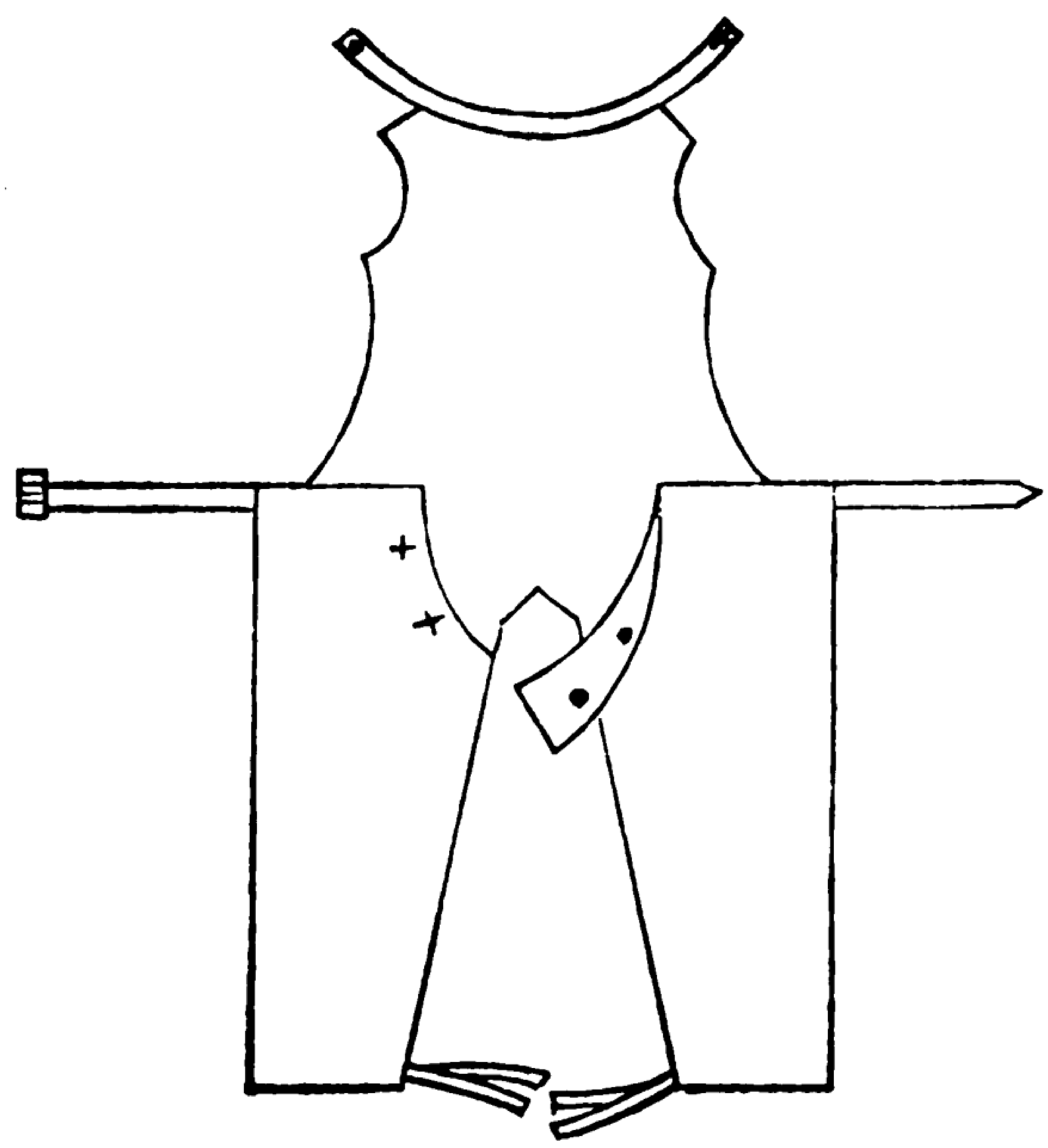
西山たい子

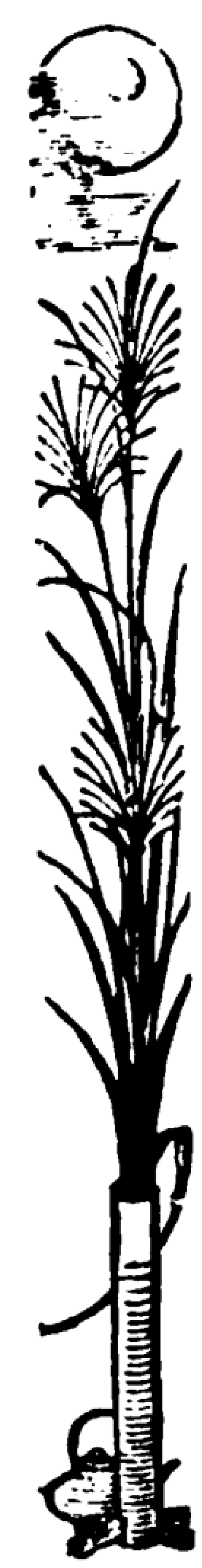
（九三）養生腹掛縫ひ方

まづ口紐を二つに折りて絎け、胴紐をも二つに折り、先の方を三角形に折り、左のはしにビヂヨウをつけおくべし。而して後に、三角形の前マチをとりて、前胴の股の間にはさみぬひ、後の股下切をとり、圖の如く前胴に合せて、の所を左右とも縫ひ、又後のゐしきの所へ、ボタンカケのの所をちゞめてつけるべし、さて引きかへして、胴まはりのはし、即ち此圖の如き所を裏へ三つ折に折りて絎け、足の口に口紐を通して絎け、胴紐の眞中を、前胴の眞中にあて、つけ、襟をもつけて絎けるべし。

仕立上の圖を見合せて縫ひ給へかし。

仕立上りの圖





# だいどころ

## 問

拜啓御多端之時分柄申上兼候得共麵包製造法本式略式兩三樣に御掲載之程偏に冀候小女は常に家政中蓬處之事に付何角心得度存居候得共殊に片田舎に居候ては麵包抔之製造法存居者無之種々聞合候得共不出來千萬人樣へ出樣之品出來不申全く製法之惡しき爲か又製法之間違か大に困入候依て貴誌だいどころ欄受持之御方へ此段御願申度御取斗下されかし、あなかしこ。

六月二十四日

香川縣多度郡吉原村

松岡花子

十二歳

## 答

麵包の燒方は本誌第百十六號に掲載せり、去し廿九年のことなれば見給はぬ方もあるべし、再び玆にそのあらましを掲げんに、上白米壹合を軟らかき飯に炊きそのさめたる處に麴壹合をかきまぜ三時間ほどねかしおきて之を發酵せしめ、さて別に鍋に水三合とホップ五匁をいれその蓋をせずして半分位につめたる處へ、メリケン粉二十匁を投してよく攪交ぜ置き又別に馬鈴薯十匁をよくゆでゝ裏漉にかけ前の二品とよくまぜあはせ一時間ほど其儘になしおきそれよりぬるま湯をさして之を浴解しよき程の瓶にいれて上より蓋をなし麻糸抔の如き強きものにて蓋のとれざる樣よくしばり六十度位の温度ある處に置くべし。さすれば右の瓶の中のものは酒氣をおこし麵包を製るの酵母は出來るなり。

玆に麵包五斤をつくらんとなれば前の酵母五勺を鉢にとりて微温湯一合をいれ鹽三匁と米利堅粉六百匁を加へて之をこれ交ぜ(かたければ適宜に微温湯をさすべし)その上に濕りたる布巾を掛け八十度位の温度ある處に二時間程をきブツ〳〵と泡立つを見て鉢よりこれをいだし再び担をほしこれをちぎり何れにても思ふまゝの形にこしらへ風のあたらぬ樣に布巾をかけ「カマド」の火氣を強くして十四五分間燒くときは麵包は出來上るなり

### 又一方

前の燒方にては酵母を作るの手數ありてかつ酵母の作り方は面倒なるものなれば更に一方をしるさんに舶來食料品を賣る家には大抵備あるものにて「イースト、パウダー」と稱する粉にて酵母に代用せらるゝもの有り、此粉一匁より一匁半位に鹽少量をいれ、之を一斤の米利堅粉に混和し、別に水五六勺にて葎卒(ホップ)五分程をざつと煮出しその微温湯となりたるを待ち之を前の粉の中に少量づゝ投れて凡そ十四五分間もかきまぜ担たるものをもて思ふまゝの形を拵へ暖爐にいれて十分間程活火にて燒くときは充分に脹れてよき麵包出來るなり。

又菓子麵包を製らんとならば右の粉のなかによき程に砂糖または

牛乳を加味して焼べし味佳き菓子麵包出來るなり。
猶他に製法知り給ふ方もあらば幸に教へ給へ。

**問**　(前文略す)さてさや御社御發行の女鑑永らく拜見いたし居候處いつも〱有益の事柄掲載せられ御隆樣にていろ〱新しき智惠を増し誠に有りがたくつれ〱次號を待たれ候樣にて御座候、つきては甚だ勝手ヶ間數事申上候樣には御座候へ共、田舍の片住居の事とて新しき家具或は厨道具などしろに便手御座なく心苦しく候へば何卒右家政の欄に御載せ下さる樣願はしく存上參せ候

紙名

**答**　御尤の御事に候、記者もおぼろげに候へば追々に取調べて掲げ申さん。讀者諸孃の中にて知り給ふもあらば投書し給ひてよ。

●此の他に猶思ひつき給ふこともあらば言ひ出でゝよ。さて知り給ふは敎へ給へや。智識交換の一端にもさてかくなん。

## 洗濯の事

一 墨の付きたるもの　は、其部分へ米飯を包み、恰も米の糊を作るが如く摺摩む時は、墨は米飯にしみ込みて片端より去るべし。

一 インキの付きたるものは、乾かざる中に、アンモニヤを以て洗へば去る。又牛乳を以て洗ふもよし。

一 油じみたるもの　半襟等の小切の油じみたる時は、揮發油にて洗へば立ち所に美しくなるは人々の知る所、絹布の油じみたる時は、水一升に鹽一合の割合にて一度沸騰せしめ、少しくさまして油じみたる所を浸し、摩まざる樣に濯ぎて洗ふべし、若し水に入れ難き品ならば、滑石を粉にし、之を油の付きたる所へ撒布し、其上に紙をしき、火斗を以て摩擦すれば除くを得べし、又た羅紗に油の付きたるは、薄きボッタースにて洗ふか、又は吸取紙をあてゝ其上に火斗を掛くるもよし、肉脂の付きたる時は、柔らかき金巾片れにて拭ひ去り、其後を布片にて幾度となく摩擦すべし。

一 黐の付きたるもの　種子油にて洗ふか、大根をおろして其絞り汁にて洗ふべし。

一 ペンキの付きたるもの　石炭油を浸したる片を以て拭ふべし。

一遊の付きたるもの　白砂糖をもみ付けて能く洗ふべし。




## 秀歌集（廿六）

塩井正男

○

櫻さく山はかすみにうつもれて
　みどりの空に殘るしら雲

○之は續拾遺集に西園寺殿が山の花をよみ給へるなり。○櫻さくは。さくらの花の咲きをる山との意なり。霞にうづもれて、霞が多く連り、其かすみに花も山も埋れて見えぬとの意なり。みどりの空に。青空の事なり、殘るしら雲、此の下に見ゆると云ふ意を加へ、花の少しなる方はちやうど青空に白雲が殘りてをるやうに見ゆるとの意なり。

○一首の意は、櫻の花の澤山咲きをるやまは、霞が一ぱい立ちふさがりて、少しなる方の櫻はちやうど青空に白雲が殘りたるやうに見ゆるとの意にて、花か霞かしら雲か、さくら花らんまんたる方は、たゞかすみのうづめたる如く、少しの方は、青空に殘る白雲の如しと云ひて、花の多き方、少き方を分けてよみたる風情おもしろく、爛熳たる花の空をおほひたらんばかりの勢ひ、げに盛なる歌なり。

○

神垣に咲きそふ花を見てもまづ
　風をさまれと世を祈るかな

○之も同集にありて賀茂久世が社頭の花をよみ給へるなり。神垣は、神の垣根の内にと云ふ意なり。風をさまれと世を祈かなかな。かなは歎息の意にてワイナーといふ位にて、即ち風靜なれと祈るワイナー

と歎息せしなり。

○一首の意は、神様の垣根の内に咲きそひをる花を見るにつけても、まづ、風をさまりて靜なれかしと世を祈るワイナーとの意にて、風吹けば花は散る、故に花ををしみて、風をさまれと云ひ、又、世のをさまるを時津風枝をならさずなど云ひて、此處にては、世に浪風のたゝず、おだやかにをさまる事と花を散らすを惜しみて、風を靜かなれと引きかけしにて、所がら歌がら共にめでたく、神もさこそは感じさせ給ひけんと押しはからるゝ歌にこそ。

○

逢ふまでと思ひしものを今更に
またをしまるゝ我が命かな

○之は嘉元御百首歌に實冬卿が初遇戀をよみ給へるなり。

○一首の意は、一めなりと逢ふまでどふか存命へてをりたい、逢はゞ死ぬともまたよけれど、日來命にかけてこがれてをりしものを、逢ふて見れば又今更に別るゝがをしく、とく捨てたる命が今更をしくなつたワイとの意にて、人情の切なるさまをよくよみ得たる歌にこそ。

○

くらべ見ば我身の方やまさりなん
同じ涙の袖のわかれぢ

○之は續千載集に爲有朝臣が、惜別戀なり○くらべ見ば、別れは何れも悲しきものなるがあなたと私と、どちらがよけい悲しからうとくらべて見たならば貴殿よりは、私の方が悲しさがまさりてあるであろうとの意なり、同じ涙の袖の別路、此下に、ながらと云ふ意を加へて見るべし、即ちどちらも同じやうに悲しく、袖に涙をつゝみて、引き分るゝ別れ路ながらと云ふ意なり。

○一首の意は、貴殿も私も同じやうに別れるは悲しく此のやうに、涙を袖に包みて、引きわかるゝをを

しむ、其の悲しき心は同じなれど、なほくらべて見れば、私の方が、貴殿の方よりも悲しみまさるであらうとの意にて、己が切なるさまを云ひたるいとおもしろきあはれの歌なり。

○

とはずともむかし忘れぬ折り〳〵の
ありぞとだにもよそにきかばや

○之は伏見殿三十首の歌に、鷹司前關白殿がよみ給へるにて。とはずとも。おとづれてくれずともとの意なり。むかし忘れぬ折り〳〵。むかし、ちぎり通ひし事を忘れず、折り〳〵は思ひ出るとの意なり。きかばや。ばやは願の意にて、聞きたいものであるとの意なり。

○一首の意は、もうどうせ、つれなく、おとづれ尋ねてくれずとも、せめて、むかしむつび通ひし時の事を忘れぬ折りも折り〳〵はあるぞよと云ふ事ばかりもせめて聞きたいものであるとの意にて、恨む中にもなほ情ありて、いと切なる歌なり。

○

たえはて丶忘れもすべき面影の
見し頃よりも心にぞそふ

○之も同じ御歌の中に、内大臣のよみ給へるなり。絶えはて丶。中が絶えはて丶しまつたと云ふ意にて、通ひし人のおとづれ絶えしを云ふなり。忘れもすべき。忘れてしまふべきとの意なり。面影、人の姿の事なり。心にぞそふ。そふはつき従ふ意にて、己が身をはなれぬを云ふなり。

○一首の意は、むかしは通ふたる人の、今は中も絶えはて丶、尋ねもせねど、もう忘れもはつべき人のおもかげの、中々に忘れぬのみか、いや一層、絶えず見てありし頃よりも目にそひてはなれず、忘れられないとの意にて、之もさきの歌と心同じく、情深く、いと切なる歌なり。

# 源氏物語講義(七)

下田義天類

はじめより、押並べてのうへ宮づかへし給ふべききはにはあらざりき。おぼえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせ給ふあまりに、さるべき御あそびの折々、何事にもゆゑある事の節々には、まづまうのぼらせ給ひ、ある時にはおほとのごもりすぐして、やがてさぶらはせ給ひなンど、あながちにおまへさらず、もてなさせ給ひし程に、おのづから輕きかたにも見えしを、此の皇子うまれ給ひて後は、いと心ことにおもほしおきてたれど、坊にもようせずば、此のみこの居給ふべきなめりと、一のみこの女御はおぼしうたがへり。

○はじめより、押並べてのうへ宮づかへし給ふべききはにはあらざりき。とは、桐壺の更衣の御事を云へるなり。○はじめより、は、更衣入内のはじめより也。○押並べて、は、尋常一樣の義なり。うへ宮づかへといふ語に冠らせて見べし。

○上宮使は、殿上の御奉公にて、後世のいはゆる御殿奉公なり。重き役からを勤めらるゝ女官は、皆夫々に御部屋などを給はりて、鄭重に取扱はれ給へど、さらぬ方々は、あるは陛下の御側にて夜ひるに働き、あるは女御更衣の御用を聞きなどして、それと定まりたる御部屋もなく、いはゆる追込の御奉公をするものもあり。此の追込の御奉公を、押並べたる上宮使とはいひしなり。源氏の君の御母君桐壺の更衣は、止むごとなき分際には非ざりしかど、さりとて按察大納言の令嬢なり。御入内の當初より、尋常一樣の上宮使などをし給ふべき御身分にてはあらざりきとなり。

○おぼえいとやむごとなく、上ずめかしけれど、とは、陛下が此の更衣を待遇し給ふさまをいへるなり。○おぼえいとやむごとなくは、陛下の御待遇が甚御鄭重にてなり。○上衆めかしけれどは、大臣家などの

姫君のやうに御厚遇あるをしたれど丶なり。上すめかすは、上臈衆のやうに取扱ふことなり。

○わりなくまつはさせ給ふあまりに云々おのづから輕きかたにも見えしを。此の一節は、上に云へるごとく、陛下にも御鄭重に御厚遇はせさせ給ひしかど、餘りに御寵愛の過ぎたる所より、外觀よりは、何となく押並べての上宮使するものなどを取扱ひ給ふやうにも見受けられたるよしをいへる所なり。○わりなくは理なくなり。‖わりはことわりのわりにて、是非善惡の取捨もなきをいふことぞなり。○まつはさせ給ふあまりは纒はらしめさせ給ふ餘りになり。即更衣をして、常に御座近く伺候せしめらるゝ餘になり。まつはるといふ語は、元來蔓草などの他の草木へ卷き付く如き作用をいふ言葉にて、まつはれ、まつはる、まつはるゝ、まつはるれ、と活く語なれど、一轉してまつはさむ、まつはし、まつはす、まつはせ、とやうに佐行四段の方へ活して使然の言葉にも用うることあり。こゝは此の佐行四段の方にて、其の得然言（即まつはさ）にせといふ敬語の助動辭を添へたるもの也。故に陛下が、桐壺の更衣を玄て常に我が御身邊に纒綿せしめさせ給ふ意に見えし。舊註どもは皆委しからず。

○さるべき御遊の折々は、然るべき御遊興の時節時節也。○何事にもゆゑあることの節々には、公私の差別なく、一ト角仔細ある時節時節なり。○まうのぼらせは、參ゐ登らせの音便語なり。湖月抄に、まうのぼらせ給ふとあるふ文字は衍字なり。こゝは小櫛の説のごとく、給ひと連用言にて云ひさしたる所也。即對句の中止法を用ゐたる所なり。○ある時には大殿でもりすぐして、やがてさぶらはせ給ひは、芙蓉帳の中、鴛鴦の床暖に眠り過ぐして、日高けて起きさせ給ひ、更衣をも御部屋に立歸らしめ給はず、やがて其の儘に御座邊に伺候せしめ給ふやうの輕々しき御取扱もありきとなり。大殿でもりは、御就

眠の古語なり。舊註に、春霄苦短日高起といふ長恨哥の句を取りて、この所を書き出したるよしに云へるは、さもあるべし。

○あながちにおまへさらずもてなさせ給ひし程には、メッタムシャウに御前を去らしめざるやうに取り扱はせ給ひし程になり。

○おのづからかろきかたにも見えしをは、右の次第にて、これまで外觀よりは自然と御待遇も鄭重ならぬやうに見えたりしをとなり。

さて、此の所續からに綾ありて初學の人には、ふと其の文意を解しかぬべき恐れもあれば、今こゝに其の綾を書き分けて、語脈の連絡を知らしむべし。

わりなく纏させ給ふ餘りに
- さるべき御遊の折々 ‖ には先まうのぼらせ給ひ
- 何事にも故あることの節々 ‖ には先まうのぼらせ給ひ
- 或時は大殿隱り過してやがてさふらはせ給ひ

などあながちにお前さらずもてなせ給ひし程に云々

釣を掛けたる所、語脈の連絡せる所なり。此の語脈をたどりて讀下し試むべし。即わりなく纏させ給ふ餘りに、さるべき御遊の折々には、先此ノ更衣ヲまうのぼらせ給ひ。わりなく纏させ給ふ餘りに、何事にも故あることの節々には、先此ノ更衣ヲまうのぼらせ給ひ。わりなく纏させ給ふ餘りに、或時は大殿ごもりすぐして、やがて此ノ更衣ヲさふらはせ給ひなど、あながちにおまへさらずもてなさせ給ひし程に云々とやうに語脈の連絡せる所なり。

○このみ子むまれ給ひてのちは、いと心ことにおもほしおきてたれば。こゝは更衣の御待遇方が一段あらたまりたるよしを言へるなり。此のみ子は源氏の君なり。○いと心ことには、陛下にもズット別段に御注意遊ばされてなり。○おもほしおきてたればは、厚く御禮遇遊ばすことに御内定になりたる故になり

○坊にもようせずば、このみこの居給ふべきなめりと一のみ子の女御はおぼしうたがへり。こゝは前段

にあらはれたる徴候によりて、謀らずも弘徽殿方の疑惑心をひき起したるよしを云へる所なり。

○坊とは東宮坊なり。皇太子殿下のおはしますべき御殿の名なり。

○ようせずば、能くせずばの音便語なり。語を更へて云へば、悪くするとの義なり。○このみこの居給ふべきなめりは、今度御誕生の若宮即光る君が東宮坊にも居給ふやうになるではあるまいかと疑ふよしなり。○一のみ子の女御は、弘徽殿の女御なり前に右大臣の女御と云ひし御方と御同人なり。かしこには右大臣を引合に出すべき必要ありて、右大臣の女御といひ、こゝには一の御子即第一の皇子を引合に出すべき必要ありて一の御子の女御といへるなり同人を所によりてかく書き分けたる作者の筆勢に注意すべし。さて、引徽殿方の人々は、前段に云へるごとく、桐壺の更衣の御待遇のしざまが俄に改まりて御鄭重になりたるを見て、疑心忽暗鬼を生じ、この様子にては、悪くすると皇太子にも、此の御腹の皇子、即今度御誕生の光君を御立て遊ばす御準備などではあるまじきかと、陛下及更衣の御擧動を怪み疑ひたりとなり。

以上の解釈をとりすべて申せば、

さて又其の御母桐壺の更衣は、いと止むごと無き際にはあらざりしかども、さすがに大納言の令孃なれば御入内のはじめより、押並たる上宮づかへなどの輕々しき御奉公をし給ふべき御身分の方にてはおはしまさゞりき。

その上に、　帝の御おぼえもいとやむごとなくおはしましけれど、恰も大臣家などの姫上のごとく、上衆めかしけれど、　帝の常にわりなくまつはさせ給ふあまりに、春の花のあした、秋の月の夕、さるべき御遊興の折々は、先此の更衣を參ゐ上らせ給ひ、あるひは公事節會をはじめ、何事にても一角仔細あることの節々には、先此の更衣を參ゐ上らせ給ひ、

又ある時には、大殿でもりすぐして、其の儘御座邊に伺候せしめ給ひなどして、あながちに御前を去らしめずもてなさせ給ひし程に、是までは御身分よりは輕々しく、自然と御心易く思食す樣子にて、恰も押並べたる上宮づかへなどする身からの輕きもの、やうに見なしを、此の度皇子御誕生につきて、俄に御改になりて、更衣の品格を輕くせむとする御擧動をも一切御愼み遊ばされ、いと心ことにたもはしたきてたれど、以前とは打ッて替りて更衣の上に重みが付きたり。されど、また、夫を見たり聞たりするに付けて、弘徽殿方の人々、女心の淺ましく嫉妬のあまりに疑惑を起して、皇太子には第一の皇子即弘徽殿の御腹の皇子の立ち給はむこと當然の事なれども、御寵愛の故を以あて、弟として兄にさきだち、大御代しろしめしたる先縱もあれた、此の樣子にては、惡くすると、坊にもこの若宮の居給ふやうにならはすまじきかと氣まづき情を其の間に起したりとなり。これ更衣と弘徽殿との間のきしろひの度を高めゆく一大原因なり、

人よりさきにまゐり給ひて、やむ事なき御思ひなべてならず。みこたちなどもおはしませど、此の御かたの御いさめをのみぞ、なほわづらはしく心ぐるしう思ひ聞えさせ給ひける、

○人よりさきにまゐり給ひて、止む事なき御思ひなべてならず。これは、弘徽殿の女御のことなり。この弘徽殿の女御、即一のみこの女御と申すは、ほかの女御更衣の方々より、いちさきに御入内なされしにて殊に威權ある右大臣の令嬢なれど、陛下の御待遇は甚厚く、また御思ひもなみ大体にてはあらざりきとなり。

○みこたちなどもおはしませど、みこたちといへるを思ふに、一のみこのみにはあらざるべし。若菜の巻に、一品にならせ給へる宮あり。また葵の巻に賀茂の齋院にならせ給へる姫宮あり。皆弘徽殿の御腹な

り。其の御誕生年月は定かならざれども、此の頃既にこれ等のみこたちもおはしましゝなるべし。されど、他の女御更衣たちよりは特別の御待遇を受くる女御なることと察するに餘あるべし。

○此の御かたの御いさめをのみぞ猶わづらはしく心ぐるしう思ひ聞えさせ給ひける とは、此の弘徽殿の御いさめばかりは憚り給ふ由なり。いさめとは、抗議をもいひ、また制止をもいふ。悋氣嫉妬の餘りに、弘徽殿方より彼是と 帝の御所業に抗議を提出する由なり。○猶わづらはしく心ぐるしう は、桐壺の更衣に對する御取扱を、爾來心ことにおもほし掟たれど、猶ヤッパり此の弘徽殿の抗議を忌憚らせ給ひて、心の儘にもし給はず、叡慮を惱ましましたりとなり。さるは、陛下の叡慮には、更衣の官位をも進めて、せめて女御になりとも取立てむと思食し給ふこと甚切なれど、弘徽殿の女御、及其の父右大臣の威權を憚りて、それさへ決行し給はざれど、右に左に御心をくるしめ賜ふ由なり。評釋に、坊にもようせずばと云ふ下、源氏君の方と御中のよかるまじき事を顯はしたる序に、帝も弘徽殿をも憚らせ賜へる事を擧げて、弘徽殿方の御威勢の爭ひ難きさまをあらはせり。此の脈やう〳〵にすゝみ行く文勢に心を付くべし。と云へるは、さる事なりかし。

## 漢文學講義（十）

大林弘一郎

余がこの講義をものして、諸孃に便せんとせしは、去年のことなりき。その六月の頃より、事のしげきまゝに、筆とる暇だになくて、あたら月日を過ぐしつるうち、身は、靜岡の里にさまよふことゝなりて、はや一年をぞ過ぐしける。かくて、思ふやう、さきに、讀者に約し置きつることの條々を

つきぐに説き明さずぞ、却りて、言を食むとの譏をも免れ難く、且、この雑誌の躰裁にもかゝること多ければ、かくて止まんよりは、時日は過ぎつれど、なほ、續稿をものして、終を全うせんには如かじとて、また、諸孃の一讀を煩はさんとは企てつるなり。讀者、また、余が緒言に於いて期し置きける數項を記臆して、この學の必要をさとり、この講義によりて、向ふべき針路をあやまらずして、勉め勵み給はゞ、余が望む所も、また、庶幾くは効あらんかし。

三十一年七月十五日　志るす

## 八、時賴擧藤綱　　青山延于

延于、字は子世、通稱を量助といへり。拙齋、又は、雲龍などの號あり。常陸の青山瑤溪先生の子にして、水戸藩に仕へ、天保十四年、年六十八にて没したり。藤田東湖先生の父なる幽谷先生の門人なり。

著書は、十數種ありて世に行れたり。こゝに掲ぐるは、皇朝史略の中なる一節なり。史畧は、正續にて十七卷、八册あり。敍事簡明にして、有用の書なり。

時賴銳意圖治。一日詣鶴岡祠。夢神告之曰。汝欲致治。須用青砥藤綱。既覺。明日召藤綱。給以食邑。藤綱怪問。時賴告以夢兆。藤綱辭曰。君今以夢用僕。他日又以夢斬僕耶。夫無功受賞。是謂國賊。臣未有微效。不敢當此賞。時賴益敬異之。奏授左衛門尉。爲引付衆。

この一段は、北條時賴が藤綱を登用せし時、藤綱が其の辭の不當なりしを難じたる有樣を記したるなり。

時賴政治に心を用ゐ、いかにもして、世の安寧をは

からんと心をはげましけるが、ある日、鶴岡八幡宮に詣でしに、夢に、神の告げありて「汝世の安寧を致さんと思はゞ、青砥藤綱を用ゐるべし」。と諭されたりと覺ゑて、はや夢は覺めたりけり。かくて、明けの日に至りて、時頼は、藤綱を召し出し、食邑、即、領地を給與したり。藤綱は、不意にかゝる命をうけたることなれば、心にふかく怪みつゝ、その故をたづねたりしに、時頼は、昨日の夢の告の事を語り出でたり。兆とは、前兆、兆候、朕兆などつゞけて用ゆる文字にしてキザシ、又は、シルシなどの譯あり。こゝにては、シルシの意味なり。

さて、藤綱は、上總の人にして、當時の人物としては、頗、英才にして、學力もありし人なれど、かゝる曖昧なることをもて、登用せられんことは、本意にもあらず。且、時頼の目に、己が才識智畧のいかばかりなるかを見得たるか否をもたしかめざれど、任務をうけたるとて、己が意見の通に行ふことを得ざることもあるべく、又、信用の如何によりては、みだりに、命をうくべきに非ざれば、これ等のことをたしかめんとて、先、この事を辭みていへるやう、君今夢の告ありたりとて、僕を用ゐられむ、後日、また、夢の告あらば、僕を斬らんや。それ、さしたる手柄もなくて、恩賞を受くるものは、これを國の賊と謂ふべし。いま臣が如きものは、未、すこしの手柄をも立てざるに、かゝる重き恩賞を受けんは、甚、心ならぬことなれば、敢てこの賞を受けじと申しければ、時頼は、益、藤綱の言の道理あるに感じ、之を敬ひて、他の人よりも殊に之を重んじたり。よりて朝廷に奏聞して、左衞門尉の官を授任し、引付衆となせり。鎌倉幕府の職制を見るに、引付衆は、訟獄、其の他の公事を掌り、評定衆の補佐をなし、又、諸奉行の事をも攝することある職なり。引付頭人、引付衆の區別ありて、頭は長官の地位にして、衆は、屬官なり、この職は當時、重任とせし所なり。

（かゝろ職官につきての考證は、參考に供すべき良書いさゝし）

さて、この文は、もと太平記をもとゝして、大日本史の列傳第百二十八、將軍家臣傳十一、北條時賴の附傳として、載せられたるを、皇朝史略は、こをもとゝして、取捨してかけるものなれど、左に、太平記の原文をもつぎ〳〵に掲げて、彼と此との文を比へて、譯し方をも知らん便とす。

（參考太平記卷第三十五、北野通夜物語附青砥左衛門の事の條）

或時、相模守、鶴岡八幡宮ニ通夜シ給ヒケル曉、夢ニ衣冠正シクシタル老翁一人、枕ニ立テ、政道ヲ直クシテ、世ヲ久シク保タント思ハヾ、心私ナク、理ニ暗カラザル、青砥左衛門ヲ賞翫スベシト、慥ニ示サルヽト覺テ、夢忽ニ覺テケリ。相模守夙ニ歸リ、近國ノ大莊八箇所、自筆ニ補任ヲ書テ、青砥左衛門ニゾ賜タリケル。青砥左衛門補任ヲ披キ見テ、大ニ驚テ、是ハ今何事ニ三萬貫ニ及ブ大莊給リ候ヤラント、問奉リケレバ、夢想ニ依テ、先、姑ク充行ナリト答ヘ給フ、青砥左衛門顏ヲ掉テ、サテハ一所ヲモエコソ賜リ候マジケレ、且ハ、御意ノ通モ歎入テ存候、物ノ定相ナキ喩ニモ、如夢幻泡影如露亦如電、トコソ、金剛經ニモ說レテ候ヘ。若、某ガ首ヲ刎ヨト云夢ヲ御覽ゼラレ候ハヾ、咎ナクトモ、夢ノ如ク行ハレ候ハンズルカ、報國ノ忠薄シテ超涯ノ賞ヲ蒙ラン事、是ニ過タル國賊ヤ候ベキトテ、則補任ヲゾ返シ進ラセケル。

有公文所與德宗領爭田者。其有辭證。時賴處決。以田屬德宗領。藤綱復議其事。以田還本主。田主喜。以錢三百緡密置其庭內。而去。藤綱怒曰。斷訟持平。豈特爲汝耶。實恐主君招寃枉之譏。苟我處決得當。則主君宜見賞獎。汝之貨。焉得汙我乎。以錢還其家。

この一段は、藤綱が訟を決するに、公平をむねとして、いかなる情實をも、かへりみず、理の正しき所を見て決斷し、且、自身を持すること廉直にして、故なき財寶は、少しも受くることなき、まことに潔白なる良吏なることを顯さんとて記したるなり。
ある時、公文所の民、德宗領の民と田地の爭を生じて、裁判をうくべきこととなりしに、公文所の方の申し立てたる所は、十分に辭正しくして、理あることと明なり。具にとは十分にといふ意なり。されど、時賴は、之を處分し判決して、德宗領の勝となし、その田地を、德宗領の方に與へたりき。初、北條氏は、家督の所領として、田地數多を宗家に付し置きけるを德宗領とへり。即時賴の領なり。その領內の民より出でたる訴訟なれど、役人等は、みな、時賴を憚り恐れて、公文所の民を曲となせるなり。公文所とは、もと鎌倉幕府の初に置かれたる役所。(幕府の公文下文を取扱ふ所)なりしも、時賴の頃は、政所に改められてありしが、この時、訴を起したる民は、以前よりの關係ありし故、かく記したるものか、地下の公文などとかきたるもあり。又、單に、人あり田を爭ふなど、曖昧にかきたるものもありて、詳に知り難けれど、要するに、當時、北條の盛なる時なれど、本家の領民が威を振ひて、無理なる爭をなしたることは、明なり。
か丶る不公なる裁判にてありしかど、藤綱は、快からぬ事に思ひ、天下の爲、また北條氏の爲、公平なる處置をせんものと、その裁判を、再、評議して、遂に、田地を本主に還し與へたり。覆議とは、反覆して議することにて、再度の審議をなすをいふなり。かく、一旦は敗訴となりしことの、再、勝訴となりしことなれど、本主の喜は、この上もなく、錢三百貫を苞に入れて、藤綱に謝禮せんとて、夜密に其の庭に投げ入れたり。緡とは、錢を貫く繩をいふなり。古は、錢一千文を繩に貫き、之を一貫文といひしを

支那風に緡の字を用ゐて、三百緡とかきたるなり。されど、三百貫文のことなり。藤綱の如き、廉潔正直なる人の、かゝる賄賂をうけて、いかで、そのまゝにしてあるべき、藤綱は、之を見て、忽、怒りていひけるやう「吾、訟を斷ずるに公平の心を持して處分するは、豈、特り汝等の爲にすることならんや。實に、主君相摸殿が、人に寃罪をかけ、理を枉げて事を處分したりとの譏を招きうけんことを恐れてなり。かりそめにも、我が處分その當を得て、正しくぞ、主君よりして、宜しく賞を贈りて奬め勵まさるべし。汝の貨財もて、いかで、我が行を汙すことを得んや」とて、その錢を、田主の家へ還しやりきとぞ。

太平記の文に、

或時、德宗領に沙汰出來テ、地下ノ公文ト、相摸守ト、訴諫ニ番フ事アリ、理非懸隔シテ、公文ガ申處道理ナリケレドモ、奉行頭人、評定衆、皆、德宗領ニ憚リテ、公文ヲ負ニシケルヲ、青砥左衞門、只一人、權門ニモ恐レズ、理ノ當ル處ヲ具ニ申立テ、遂ニ相摸守ヲゾ負シケル、公文、不慮ニ得利シテ、所帶ニ安堵シタリケルガ、其ノ恩ヲ報ゼントヤ思ヒケン、錢ヲ三百貫俵ニ裹テ。後ノ山ヨリ、潛ニ青砥左衞門ガ坪ノ内ヘゾ入レタリケル、青砥左衞門是ヲ見テ、大ニ忿リ、沙汰ノ理非ヲ申ツルヲ、相模殿ヲ思ヒ奉ル故ナリ。全ク地下ノ公文ヲ引ニ非ズ。若、引出物ヲ取ベクバ、上ノ御惡名ヲ申止メヌレバ、相模殿ヨリコソ、悦ヲバシ給フベケレ。沙汰ニ勝タル公文ガ、引出物ヲスベキ様ナシトテ、一錢ヲモ、遂ニ用ズ。遙ニ遠キ田舍マデ持送セテゾ返シケル。

昔行過滑河。誤墜錢十文於水。藤綱乃出錢五十文。買炬僱夫照水搜索。竟獲之。或笑其得不償失。藤綱曰。不爾。十錢雖小。失則永損世實。五十錢布在民間。彼此六十

錢。雖ニ不レ失ハ二一錢ヲ一、其ノ利不ニ亦大ナラ一乎。聞ク者歎服ス。

藤綱、また、ある時、鎌倉の西なる滑川を過ぎける

**時、錢十文を川の中に落しけるに、五十文出して**

松明を買ひ、之を拾はせたることあり。この一段は、

その事を記したるものなり。

藤綱、僅に十文の錢を拾はん爲、五十文の松明を買ひ、人を雇ひて水中の錢を拾はしめたりしかど、或る人は、その失ひたる錢の方多くして、得ること少きを笑ひしに、藤綱いへるやう「さにあらず、十文は少き錢なれど、水中に失ひたらんには、永く世の中の寶を失ふ理なり。五十文は我失ひたりとも、人之を得て、世間に流通すれど、世の用をなすべし。彼と此と六十文の錢、皆世の用を爲して、一文も失せずぞ、その利は、また大なるにあらずや。」と。聞くもの皆歎じて其の理に服しけり。藤綱が識見の大なること思ひ見るべし。

太平記の原文にいはく、

又或時、此青砥左衛門、夜ニ入テ出仕シケルニ、イツモ燧袋ニ入テ持タル錢ヲ十文、取ハツシテ、滑河ヘゾ落シ入レタリケルヲ、少事ノ物ナレバ、ヨシサモアレカシトテコソ行過グベカリシガ、以外ニ周章テ、其邊ノ町屋ヘ人ヲ走ラカシ、錢五十文ヲ以テ、松明ヲ十把買テ、則是ヲ燃シテ、遂ニ十文ノ錢ヲゾ求得タリケル。後日ニ、是ヲ聞テ十文ノ錢ヲ求メントテ、五十ニテ續松ヲ買テ、トボシタルハ、小利大損カナト笑ケレバ、青砥左衛門眉ヲ顰テ、サレバコソ御邊達ハ、愚ニテ世ノ費ヲモ知ズ、民ヲ惠ム心ナキ人ナレ、錢十文ハ、只今求ズバ、滑河ノ底ニ沈テ、永失ヌベシ、某ガ續松ヲ買セツル五十ノ錢ハ、商人ノ家ニ留リテ、永ク失フベカラズ、我ガ損ハ商人ノ利ナリ。彼ト我ト、何ノ差別カアル。彼此六十文ノ錢、一ツヲモ失ハズ、豈天下ノ利ニ非ズヤ、ト、爪彈ヲシテ申ケレバ、難ジテ笑ツル傍ノ人々、舌ヲ棹テゾ感ジケル。

宝鳩巣名は直清が駿臺雜話にも、右の一條を評論して、青砥が續松と題せる一章をかゝげたり。近來、普通の國文讀本などに、この書を引用するものも多ければ、その文をも、こゝにわげて、參考の一つに供へんとす。

さいつころ、太平記を兒童のよむを聞侍るに、北野通夜物語に、むかし青砥左衛門夜に出て出仕しけるに、いつも燧袋に入て持たる錢を十文、誤て滑川へ落したりけるを、よしさてもわれかしとてこそ行過べかりしを、其邊の人家へ人を走らかし、錢五十文を出して續松を十把買て、是を燃しつゝ、川を淡へて、終に十文の錢を求め得たりける。さていひける十文の錢は、たゞ今求めずむ、水底に沈てながく失ぬべし。五十文の錢は、商人の手に渉りてながく失せず、彼と我となにの差別かあるべき。彼此六十文の錢をうしなはず、豈天下の利にあらずやといひしとぞ。五十文の錢を費して、十文の錢を求るは、常人の思案にていはゞ、勝手にはきはめてせぬをよしとする事なれど、道理にれいてすべき所を考へて、かくするにこそ。いはゞ輕き事のやうなれども、拔群の見識なくてはなるまじき事ぞかし。云々。

藤綱性好二施與一。所レ入俸祿。悉賑二貧困一。自奉甚薄。衣無二縑帛一。其在レ職。廉潔剛直。不レ憚二權貴一。於レ是奸吏斂レ迹。人々自飭。風俗頓革。

この一段には、藤綱の性質と、平生の心がけとを述べたるなり。

藤綱は、もと、家も富みたりしが、天性、人に物を施し與ふることを好みて、年々の收入なる俸祿は、悉く貧困なるものに與へて救ひ賑し、自その身の用度をむ、極めて節儉にして、衣服などにも、絹物をむ用ゐることなかりき。其の職にありし間にも、無欲にして潔白に、まことに、正直にして、少しも、權勢ある人に恐れ憚る所なく、諂ひ媚びたることなく、

正道を守りて、政治を佐けたり。されど、當時、幕府の政よく治まり、奸惡なる官吏なども、みな、畏れ憚りて、跡をかくし、人々みな自その行を警めつゝしみて、風俗とみに改まりて善良となりき。

この條も太平記の

青砥左衛門ト云者アリ、數十箇所ノ所領ヲ知行シテ、財寶豊ナリケレ共、衣裳ニハ細布ノ直垂、布ノ大口、飯ノ菜ニハ、燒タル鹽、干タル魚一ツヨリ外ハセザリケリ。云々。加樣ニ我身ノ爲ニハ、聊モ過差ナル事ヲセズシテ、公方ノ事ニハ、千金萬金ヲモ惜マズ、又飢タル乞食、疲レタル訴訟人ナドヲ見テハ、分ニ隨ヒ品ニ依テ、米錢絹布ノ類ヲ與ヘケレバ、佛菩薩ノ悲願ニ均シキ慈悲ニテゾ有ケル。

又、

自餘ノ奉行共ガ、加樣ノ事ヲ聞テ、己ヲ恥シ間、是迄ノ賢才ハナカリシカ共、聊モ理ヲ背、賄賂ニ耽事ヲセズ、是ヲ以テ平氏相州八代迄、天下を保し者なり。

などの意を取りて文をなしたるなり。

この外にも、日本外史の北條記にも、時頼が佛事を營みける時の諷諫、その他の面白き話もあれど、本文以外にわたることなれど、またの時、別にものすることあるべし。

（つゞく）





# 漫録

## 神宮御炎上小史（二）

安藤正次

### 第一 火災豫防

抑火災なるものは、すべておもひの外なるものにて、愼重に愼重を加へ注意に注意を加へても猶事はいでくるものぞかし。されど、かしこき神の宮居にありても、はじめより深くこの事はおもひはかられたるなれど、猶幾度の不祥ありしこそあさましけれ。その始 垂仁天皇の御世、五十鈴川上に御鎮座ありし頃は、人烟きはめて稀少にして、たゞ幽邃なる深山たるにすぎざりしかど、火災の大宮に及ぶなどの事は、ゆめにもおもひかけぬ事なりしなるべし。然るに、仕へ奉る神官禰宜内人等の宿館なども、漸く數多くたち連り、さては百姓などの家居も饒ひゆくにしたがひ、をり〳〵は火のあやまちなどもいでくるに至りしなるべし。されどその神垣に及びたる事は、猶きこえざりしを、寶龜延暦の頃、始めてその不祥をみるに至りぬ。されど、此の頃より、はやく火災の豫防等の事は講ぜられたるなるべけれども、載籍つたはらず、その悉しき由を知るに由なし。されど、そのものにみえたる一つ二つを以ちて他を類推しうべきのみ。

其の最古くものにみえたるは、神宮雜例集なる延長四年四月（醍醐天皇御宇）の官符是なり。

神祇官符二伊勢太神宮司一

可レ定二置豐受太神宮四至一事

〇上略 此宮四至未レ被二定置一但去寛平五年十一月二十七日司符偁宮近居住百姓之宅有二火失事一殆及レ宮内一自今以後任二格條一自レ宮四方各卅丈之内居

住人宅一切禁斷若不二撿出一科二違勅罪一見任解却曾不二寛宥一自レ爾以來爲二近四至一也

即ち宇多天皇の寛平五年、宮域四十丈以内に居住することを禁ぜられ、これにたがふものは違勅の罪を科し、現に官に在るものは、その官を免ぜられ、毫も寛宥することなからしめたる由なり。次に二條天皇の長寛三年には、外宮の近隣に出火ありしかど、その近邊の人家を壞退せしめたる事ありき。これも同じく神宮雜例集にみえたり。

左辨官下二伊勢太神宮司一
應下早令三壞二退太神宮司言上豊受太神宮近邊人屋等上事
右得二太神宮司今月十五日解狀一偁豊受太神宮禰宜同月四日注文偁内人重松之住宅從神宮大垣之外戌亥方去二町余許也今月三日巳時許不慮之外燒亡已畢而彼時北風頻吹之間其炎不レ及二神宮一哉抑去年十二月權神主兼輔住宅燒亡之時其炎殆依レ可レ及二神宮一凡任二祭主先日下知一可三壞二退神宮御所近邊人宅一之由召二仰住人等一且注二進其由一先畢而于今未二壞退之間一又有二此火事一彌以二其恐不レ少仍爲レ恐二後日慮外事一重注進如件仍相副言上如レ件者大納言源雅通奉レ勅宜レ令下二知神宮一壞退上者官宜二承知一依レ宣行レ之
長寛三年二月十八日

かくの如く、屢制符を下さるゝことありしを以てみれば、當路者も頗これに注意せられしとおぼゆ、然れども此の制度は、常に永くは行はれざりしもの丶如く、かしこくも往々の御炎上は、多く近傍民家よりいでしものに係れり。

かくてこの明治の御世に至りては、近く神苑會の如き美擧のおこるあり、以て神域の清淨をつとめ、併せて然る不虞のなからむことをはかられしが、あはれ天の災厄はまた奈何ともすべからず、事はおもはざるにおこりて今回の不祥あり。

因に神廷紀年にみえたる外宮救火夫（今の消防夫なるべし）といへるものゝ定員をかゝげた左の如し。但是は、靈元天皇の延寶元年にさだめられたるものなり。

正殿、故殿、東西寶殿　河崎船江夫八十人
瑞垣門、玉串門　濱五郷六十人
御饌殿、外幣殿、　中河原三十人
子良館　長屋村三十人
北御門　高向村三十人
月讀宮　王中島十五人
儲夫　大湊三十人、二見三郷三十人

以上は外宮のさだむる所なり。内宮にはかゝる制度のありしや否や、今詳ならず、すべて中世以降にありては、内宮外宮各その制を異にし、軋轢甚しく、遂にはその神官の相闘爭する程なりしかば、その制度のごときも異ること多かりしなり。

## 主從心得草（上編續）

諏訪　忠元　寄贈

又脇坂先生の撫育草に、丁稚教訓廿八首といふものあり、爰に志るして披露するなり。因にいふ、子を養育心得には、此の撫育草上下二卷、又手島先生の前訓抔見て、孝悌忠信の道を教へ、子孫長久にいたるの根源をなすべし。

丁稚教訓二十八首

奉公に來た日の心いつまでも
　わすれず念をいれてつかへよ

御主人の仰があらば早速に
　返事よくしして御用つとめよ

口上をいひちがへなよ使ひには
　道草をせずひまをいれるな

喧嘩すな角力もとるな餘所の子を
　せぶらかすなよ仕かへしもすな

うそつかず影日向なく目ついたて見ず

はねれしみせず身をばはたらけ
大口と女れだてとませたこと
するをこれらが野良のはじめじゃ
かちまけをあらそふ業と川あそび
小錢あつかひかくしぐひすな
居眠りてあたら夜毎を過さずに
目あきてはげめ手跡そろばん
つかふどに物をばいふなれとなしく
下女といさかひ中わるふすな
御主人の内の事をばそとへ出て
よしあしともにいふなかたるな
傍輩は中むつまじく我よりも
下なるものをあわれみてやれ
ひまあらば在所の父母へ狀やりて
無事でつとめる事を去らせよ
らく書やいぬかみあはせみそなぶり
使ひわすれてものをれとすな

我親の門は通ろと用なくば
よらぬがよるにまさる奉公
藪入にゆかばとまらずかへれたゞ
永居は兎角れそれあるべし
我ひとりつとめはたらけ傍輩の
あちらこちらとゆすりあはずに
食事をばなすたびごとに味ふて
見れば主人のみな御恩なり
やいとすへ食事愼み達者なが
御主人忠義親へ孝行
はき掃除禮義配膳何事も
じだらくにせず淸くとゝのへ
辛抱とかんにんするが何よりも
よくを仕遂る傳授なりけり
利口ぶり言葉多きと片意地と
短氣不律義うそにてもすな
用事をばかいで芝居を見るのみか

正直と柔和にすれば御主人も
戻りて主にうそと間似合

商賈をよく覺ゆるが金よりも
傍輩中もかはゆかるなり
宿へ這入の元手とぞしれ

出世をせんと思はゞ身をつめて
よき事にのみこゝろうつせよ

手代にはにくまれやふと内證の
使ひはかたくことわりをいへ

何事も人がたのもと御主人へ
かくす事ならかたくいたすな

奉公を大事とするが何よりも
我親たちに孝行としれ

以上二十八首終

あまり入用の歌ゆへ十三首をつらぬ。

主親は無理いふものと心得て
うらみもするな言葉かへすな

傍輩の麁相は主へとりなせよ
よきをそねむなつげ口をすな

人の身によき事あらぞれのれまた
たよぞぬまでもまなぶへきなり

人の身のよきはいふともあしきをぞ
いわぬが人のまことなりけり

われだにも心すなほに持ならぞ
人のよしあしかたるべからず

十六盤と讀書事を精出せよ
奉公すともかみにたつなり

只居せず稽古事をぞせい出せよ
すぐに其身のくすりなりけり

あたにのみ今日を遊ぶな隙あらぞ
れしへをかきしかな文を見よ

麁相ゆへけがあやまちも出來るぞと
志りて志づかに物ごとをなせ

短氣ゆへ身をほろぼすと愼んで

かんしやく氣隨氣儘れこすな
あやまちがあらばたちまち改めて
ことわりいへよまけれしみすな●
れのが身のつとむる事はいひかくし
すこしも人のよきをほむべし
傍輩の上をば兄とうやまひて
下は弟とれもひあはれめ

## 最明寺殿教訓百首（四）

福原董子　寄贈

子をれもふれやはど親を思ひなど
世にありがたき人といはれん

されど古人の詞にも、父母の心を以て心とする時は孝なりといへり。又諺にも、子をもちて後親の恩を知るといへり。親の子を思ふ程に親を思ふ人は、其心を以て君に仕ふる時は忠となり、人と交はる時は信となる、聖人といへどもこれに加へざるべし。

よの中のはかなきことを見きくにも
はげみ〳〵て親につかへよ

老少不定のならひ、有るはなくなきは數そふと詠みしもことわりにて、此ことわりを我も人も知らざるにはあらねども、驚き恐るものなきは、豫じめ知れ難き故なるべし、父母ともに存命ならば、三つの樂みの第一にて、此樂みは天下に王たりともあづかり存せず、と孟子に見えたり、然れども人の命程頼まれぬものはなく、あすをも期せぬものなれば、忽ち思ひの外なる事に至り、此樂みを空しくしなば、其時悔なげくとも益あるべからず、只速かに志を勵まし、今日ばかりつかふる日ありと思ひとるべしとぞ。

兄弟の中もたがひに仇となる
欲ははげしき劒なりけり

兄弟は骨肉同胞天性のしたしみにして、餘の人倫の、義をもちて合たるたぐひにあらねば、離るべきやうなし、然るに世の人の、兄弟は他人のはじまり」といふて誹

るは、かく親しき兄弟の間にても、欲得のあらそひにて不和を生じ、終には怨敵の思ひをなすに至る、淺猿き事いふばかりなし。兄弟の中をもさく欲は、鋭き劍にもまされり、恐るべし〳〵。

　世にこゑてあまりに人のしたしきは
　終にぞ中のたがはぬはなし

「うすきこそ中々人はそひよけれこきは紅葉のちらぬものかはと」いふ古歌の心也。親子兄弟にもあらずして、餘りに親しみ深きは、やがてさむる事疑ひなし。禮記に云ふ、君子の交りは淡くして水の如し、小人の交りは甘くして醴の如しと。よき人の交りは、禮義を亂さず、義理をちがへず、互ひに氣づかひ遠慮ありていんぎんなるにより、云ひそこなひ爲そこなひなくして、初め終り一の如くかはらざれば、末長く懇切なり、よからぬ人の交りは、何の遠慮もなく、初對面より馴々しく打くつろぎて、無禮不行義なるによりて、時により慮外緩怠をとがめあひて中あしくなり、甚だしければ喧嘩口論に及びて、にが〳〵しき事いふ許りなし、これ親しき中に、禮あることを知らざるにこそ。

　たくひなくいかに親しき中とても
　男なからん家になゆきそ

瓜田に沓を入れず、李下に冠を正さずといへる古語は、瓜畑の傍を通る時は手をさげて沓をいらふべからず、瓜を採かと疑はれ。李の木の下を通る時は、手を揚て冠をなほすべからず、李を摘かと怪しまれんとなり。日頃はいか程心やすき間なりとも、夫の不在ならん所には行べからず、己れはいか程正しくとも、行べからざる所に行けば、疑ひ怪しまるゝとも、云ひ解によしなければなり。

　なれ〳〵ていかに親しき中とても
　心は常に禮義わするな

凡そ人はいか程親しき中なりとも、禮義を忘れざる時は、つり合よければ、慇懃なるも互に氣づかひて作法をたがはず。されば、親しく心安き中にては、兎角禮義

を忘れて、氣をゆるし慎しまざるによりて禍の出來るなり。男女なるは、殊に禮義を重んせずんば有不可。

へだてなくうちとけてあそぶ其中に
まじりて背くふりぞ見にくき

人と交はらんには常に愛敬を欠くべからず、さるを人人の心よく打くつろぎて語らひ遊ぶなかに、己獨りそこなひやはらがざるは、心のひがみとやいはん氣隨者とやいはん、たしなむべき事なり。心の合はぬ友と知らば、初めより交はらざるにしかざるなり。

人はいかにはらを立つゝいかるとも
我は靜かにことわりを云へ

氣はやなる人は己が心にさかふ事あれば、忽ち怒りて惡口す、それ故に身をはたし禍をうく、此の如き人に出合ひなば、心を鎭め詞を和らげ道理をいひ解くべし。然れば如何なる馬鹿者も、道理にふくして鎭まるものなり。もし彼の惡口にのりて此方も怒れば、互ひに惡口雜言して、共に耻を求め、世の口ずさみとなる、口惜き次第ならずや。

角あれば物にさはりてむづかしや
こゝろよこゝろまろ〳〵にせよ

凡そ物に綾節あれば、萬の物に障りていとむづかし、人の心も意地惡くひがめば、さはるもの出で來てわづらはし。只心をたひらかにまろ〳〵ともてば、何の障りもとがめなくて、至つて安穩なり、心の丸きといふは、たゞすなはなるをいふなるべし。

人のたゞまけじと思ふこゝろこそ
やがて我身のあだとなるなれ

物事に人をさきにして己を後にし、己へり下りて人にゆづるは禮なり。然るを人にまけじれとらじ、勝ん優らんと相あらそふは、我慢邪心にして禮にあらず、必ず人の憎を得、恨みをとるものなり。これ我が身の仇にあらずや。古語にも、已れを曲るものは能く衆に居、勝ことをこのむは敵にあふとなり。

# 梅雨の旅の記（續）

佐々豊水　寄贈

五月朔日　今日は伏見へかへるべきよしまをし置きし日なれど、南禪寺天授庵へ行、玄旨公の御靈屋を拜み、いさゝか手向の心を、

およびなきこゝろばかりの手向ぐさ
　つゆのめぐみのかゝれとぞおもふ

かくて行道なれど双林寺へ立より、西行法師の像などみて、四條通へかゝり、御影堂のまへを行、東本願寺へ立よりて一見しける、すべて都は土地淸く、社寺の有さまは尊とくみゑてきゝしにもまされり、墨染櫻をみて暮近きころ伏見の御館につく。

二日　辰に過るころ伏見の里を立出、御香宮へ參詣しぬ、朝山も此所までおくり來て名殘をしむ、それより豊後橋へ行道なれど、橋損じて舟渡のよしなれど、ひまとりなんもいかゞなれど、宇治へかゝりてゆけと、案内する人のいふにまかせてゆく、平等院など去年見のこし侍りければ、幸なることゝおもひ、それにしたがひて宇治へかゝりて行、橋をわたり扇芝、平等院へも參りて寶物品々みるに、賴政の武功すぐれしことなどみぬ、いにしへもしのばれて袖をぬらしぬ、橋姫宮のほとりにて休み、長池にて晝のかれ飯をくう、井手の玉水へも立よりてみる、此所の蛙をもてきぬれど、外の蛙は聲をいださぬよしいかなるゆゑか、蛙の石碑などあり、井手の玉川近き所といへど行てみるに、少の流あり、駒とめてといへることの葉此所にてやあらんとたづねしに、玉川の末流のよし、水上は山吹もあるよしなれど、一里ばかりもさきときけど、立よらんも物うくて、此所の山吹の葉をたづねもとめていさゝかとりてかへりぬ、木津に止宿と定しかど、此やどさゝはりあるよしゆゑ奈良まで行、日も暮ぬれど道もわきがたし、流に螢の飛かふところあり、是なん佐保川にてありしかと後におもひしられぬ、子刻ばかりに奈良のやどりにたどりつく。

三日　辰に過るころ宿を出で、まづ猿澤池近き所なればぞ行てみる、釆女宮、衣かけ柳などあり、興福寺をみる、薪の能てゝの芝原にてあるよし、此所の七堂はすぎしころ燒失し、わづかに一所ばかりのこりてみゆる、ここかしこに櫻の木あり、ならのみやこのといへる伊勢大輔のことの葉もおもひいでられて、青葉を一葉二葉とりてかへる。雲井坂、とゞろきの橋などむかふにみゆると案内する者の敎へけるに、橋まで行てみんと、二丁ばかりも行けるに、今は橋柱さへも見えず、いづくにかあらんとおもふに、少の溝川に板を渡してあり、是ぞ轟橋といふ、いと興ざめてまことにとゞろきの橋にてありけりと人々笑ふ、此所の池はみぞろが池とて、古は大蛇のすみし所ときくに、今は水草生しげりて、わづかにのこる、大佛二月堂へも詣てこゝかしこみる、此所へ行道はしげひらのきられたまひたる所の跡のよし、すゞき生いでゝあり、手向山、若草山など歩行をゆくしばし、休てみれば、むかふは、三笠山、高圓山といへば、心覺のために

手向やまわかくさやまにきてみれば
みかさたかまとのやまもつゞきて

若草山の坂の半ころに、朝いなまんぢうとてあきなふものあり、かくて春日山へゆく、御社へ詣て侍り、

春日やまかみのみまへのともし火の
かずはよむともいかでつくさん

鹿の數と燈籠の數は緣記にものせざるよしいふ、鹿あまたこゝかしこに徘徊し、人をおそれざるありさまなり、春日野もむかしはひろき野にて今はさもなければ、芝青く生てあり、今は飛火の野守出てみよといへる古ごとも此所にやとしのばるれば歩行をゆく、飛火野はいづこかとたづぬるに、右のかたこそ飛火野なれといふ、名にたかき野邊ともみえず、十三鐘を左にみて行、ひはときにて休む、それより在原寺へ行てみる、業平井筒姫の繪像、しのぶすりの狩衣初冠、蔦の細道の硯などをも見る、堂の右のかたに井筒にかけしといへ

る井のよしいふも、今は汲人あらぬ井ばかりあり、立よりてみるに妹みざるまにとといひしも此所のことにてぞあらん、行きゆけば布留の社も左にみゆれば、とまりをいそぐ心あれば、

夕つく日くれぬうちにといそのかみ
ふるのやしろもよそにみてゆく

此日は三輪の山本を止宿と定しが、おもひしよりもはやくつきしかば、まづ社へ詣でぬ、此宮居まことに神神しく心もすめるかしこさ伏拜みぬ。此所にてある人の杉のをだ卷をおくりければ、たゞにみんも心なきやうにおもはれて、

くりかへしむかしをしのぶ神かきや
その名にたてるすぎのをだまき

四日　巳にはやきころ宿を出で、初瀬へ詣で、こゝかしこみめぐり、舞臺廻廊など美しく、櫻も數多あり、花のをりならばとみるに、すぎにし春もゆかしくぞおもふ、山路へかゝりてゆく、萩原にて晝のかれ飯くふ、みろく佛の石にきざみつけてあるよし、是をみんとてゆく、此所の流清く、鮎など水底にひれふりあそぶもみゆる、すこしかちを行て、暮かゝるころ名張につく、

五日　今日は端午の節句なれば、旅ながらもちまきなど祝て辰に過るころ宿を出る、松山を行、終日のぼりくだりの坂路、山川の流もあり、すべて此邊は旅人の往來もまれなり、伊勢參宮の人ならではかよふ人もなしとみえて、ひなびたることのみおほし、川のながれに石をつみて竹にて丸くあみ、二間三間ほど間をおきて五六寸ばかりのはその板をわたしてあり、所の長などのかよふたすけにしたるならんとおもふに、この橋をわたるいとあやふく侍りしも、あやまちなく打わたりて行に、心落つきぬ、暮近きほど垣内驛につく、こゝも節句とてあやめふくこと今日はひなも都もおなじならひとおもふ。

軒ならびしづがゝりふくあやめぐさ
われはかりねのまくらにぞしく

と口すさびて草の枕をかるに宿も所せばくいぶせさかぎりなし、一夜をあかさんも物うきことゝおもへど、旅のならひなれどとおもふのみ。

六日　辰刻ばかりに出立、今日行は坂路もすこしあれど、左右うちはれて水の流も所々にあり、行ゆくに河原もひろく、むかふは山ありてゑもいはれぬ風景、嵐山もおもひいでらるゝけしきなり。むかしの人の歌枕にせし名所といへど、みおとりする所もあり、又さのみ名高き所にしもあらねど、此所などはすぐれたる眺望なり。遠近の山々をみわたし、芝生の原四五丁もつゞきて、松のむら立こゝかしこにありて見所あり。此野邊はなにといへるときゝければ、うれし野の原といふよしこたふ、紅の花のみゆれど、いさゝかとらせて、

咲つゞくいろはなにぞと手にふれて
すゑつむはなをみるもめづらし

申刻ばかりに松坂驛につく。

七日　己に近きころ出立、雨降出けるに、櫛田川の橋をわたりて行、晝にてもあらんとおもふころ空はれて今日は道もちかければ、日たかく小畑につく。

八日　辰時ばかりに宿を出る、宮川舟渡あり、河原にて清めをしつゝ、まづ外宮へ参詣拝をしけるうち左右に鷄の雌雄ゐける神の心にかなひたるにやとおもひ侍りぬ。末社所々拝み又駕にのりて内宮へ行道にあひの山あり、物もらひの非人の十四五歳の女子のをかしき衣類着かざりて小き家に三味線こきうひき小うたうたひて居る幼きもありて、踊などし、老たるは座して往來の人にものを乞ふゆき／＼て御手洗川あり、ここにて又内宮へ参る清めしける、此前宇治川橋をわたりて行に、川の中に何やらんうけ持て物を乞ふ、五十鈴川流清し、風宮橋といふをわたりて内宮へ行、内陣までもとはりてこゝろしづかにふし拝ぬ、此所にては大ぬさ、神酒洗米などいたゞかせぬ、

天てらすめぐみは世ゝにますかゞみ
くもらぬかげをあふぐかしこさ

とこゝろばかりの手向して、末社ことごとく拜み廻り小き茶店に休らひ、歸るさ又小畑にて晝のかれ飯くうれなじ道をかへる、雨少降出けれど、さのみ笠をとるほどにもあらで、暮過ころ松坂につく、

九日　辰の刻ばかりに出立少歩行にて行、六軒屋にて休む、雲津川をわたり、津にて晝やすみし侍りぬ、今日行道は目もはるかなる野べなり、名を尋ぬれど知人なし。しばし行ば岩田川あり、此所にて又休む、からのあみだ近所ときけば、立寄拜む、白子觀音も此邊にありと聞立寄て拜し、江戸兩姉のやすからんことをきせいし、戌に近きころ神戸の宿につく。

十日　辰に過るころ出立、小雨降出て、鈴鹿川橋をわたり、野路をゆく、たつた川歩行わたりあり、追分にてやすみ、しばしゆきて四日市へ出る、こゝにて晝の休をし侍る、晝過るころより雨もやみて、桑名の松原かちを行て申の時ばかりに濱の宿につく、

十一日　卯過るころ川舟に乘、舟中處せくもありける少雨降けれど、午時前より空晴て、さやの宿にて晝のかれ飯くう、甚目寺へも立寄て休む、此所の本尊は日本に三躰の黄金佛の由聞に、たふとく思ひてふし拜み寺中こゝかしこみるに、仁王門は古へ梶原景時奉行にて出來し侍るよし、いとめづらしく立寄てみる、未過るころ清須につく。

十二日　今日も辰の刻ばかりに宿を出、起にてやすみ、れこし川舟渡あり、遠かたに鳴神の音して雨つよくあらねど降くる、いかにあらんと思ふうち、雲もはれゆく、わき道を行て加納の宿にくれ近きころつく。

## 戒めぐさ

今の世ふみよみ手かく婦人たちのいと多きが中に、ともすれば、眞名がちに四角なりたる文字はしりがきなどするも見ゆめるは、何となくその人がらもれとりて口をしかりぬべし。左の一くだりは、故人齋藤彦麿翁の隨筆に見えたるを、爰に抄出して、むか

しの人の用意のほどを今の貴嬢たちに紹介し參らすになむ。

三浦千春

當時世に名高き或る書家の女、或る高貴の御室の御側に仕へぬるを、其御館に早くより我をめして、御歌の添削れはせ給ふなべにその女も歌よみ出したるをいぶかりしに、傍に御局ありていはく、この女の父の、むすめに云るには、御館にて和様文字かく人にたよりて手習ひすべし。歌よむ人あらむ隨ひてよみ習ふべし。少女の漢様文字かき詩文章作るは、かたはらよりつらにく、思ふものなり。和様文字かきて歌よむ女はゆかしくなつかしく思はる丶ものなりといましめしよし語れり。からぶりの書家にはめづらしき大先生なり。故ありて御館をも先生の名をもあらはしがたけれど、大かたは人もおしはかりしるべし。

# 井蛙小錄

井上頼文

和不流齋逸人は歌よむことを好み、酒のむことを好む人なり、歌よむ時はかならず酒のみ。酒のむ時はかならず歌よむ、酒たけなはに歌成る時は机を打ちて高吟す、音吐高壯戸障ふるひ、うつばりの塵も舞ひ出ぬべし。ある冬のことなりとか、例の歌よみつ丶酒のみ、酒のみつ丶歌よみて、夜のふけゆくをも覺えず、曉つぐる鷄が音に驚かされ、宿酊の頭いまだ重かるをしのびて、起き出れど、目さむるばかりの雪なりけり。おもしろさに堪へず、あらたにつくれるかたはらのふすまに墨くろ〴〵と

雪見つ丶いさもろともに歌よまん
　みやびの友よ酒もちきたれ

と筆ぶとに書きたりける。をりしも此の家を管理する人、このありさまを見てうちおどろき、このふすまは

よき畫だくみにゑがゝしめんと思ひしに、そもこの落畫は何事ぞと腹だちて、そのつくのひをども求めたり名歌よみてわびたりとも感ずべき人物にもあらねど、さすがの逸人もふくろの底をはらひて、やうやくつくのひきとぞ、つねに逸人は書にたくみなるを以て、ものかけど報酬を受るがさだまりなるに、ものかきてつくのひをはたられしは此のたびが始てなりとて、いたくぞよみになりきとぞ。さる滑脱のさがなれど、歌も文もことやうに勝れたるがいと多かり、ある夕、足を十もじにふみつゝ、おのれが寓居に來りて病を訪はれしついでに、ふところよりひとひらの詠草とりいでゝ、この中よりよしと思はるゝをつまじるし丟てよとありけれど、例のわらはに拔きいでしめつ。

和不流齋主人　徳三

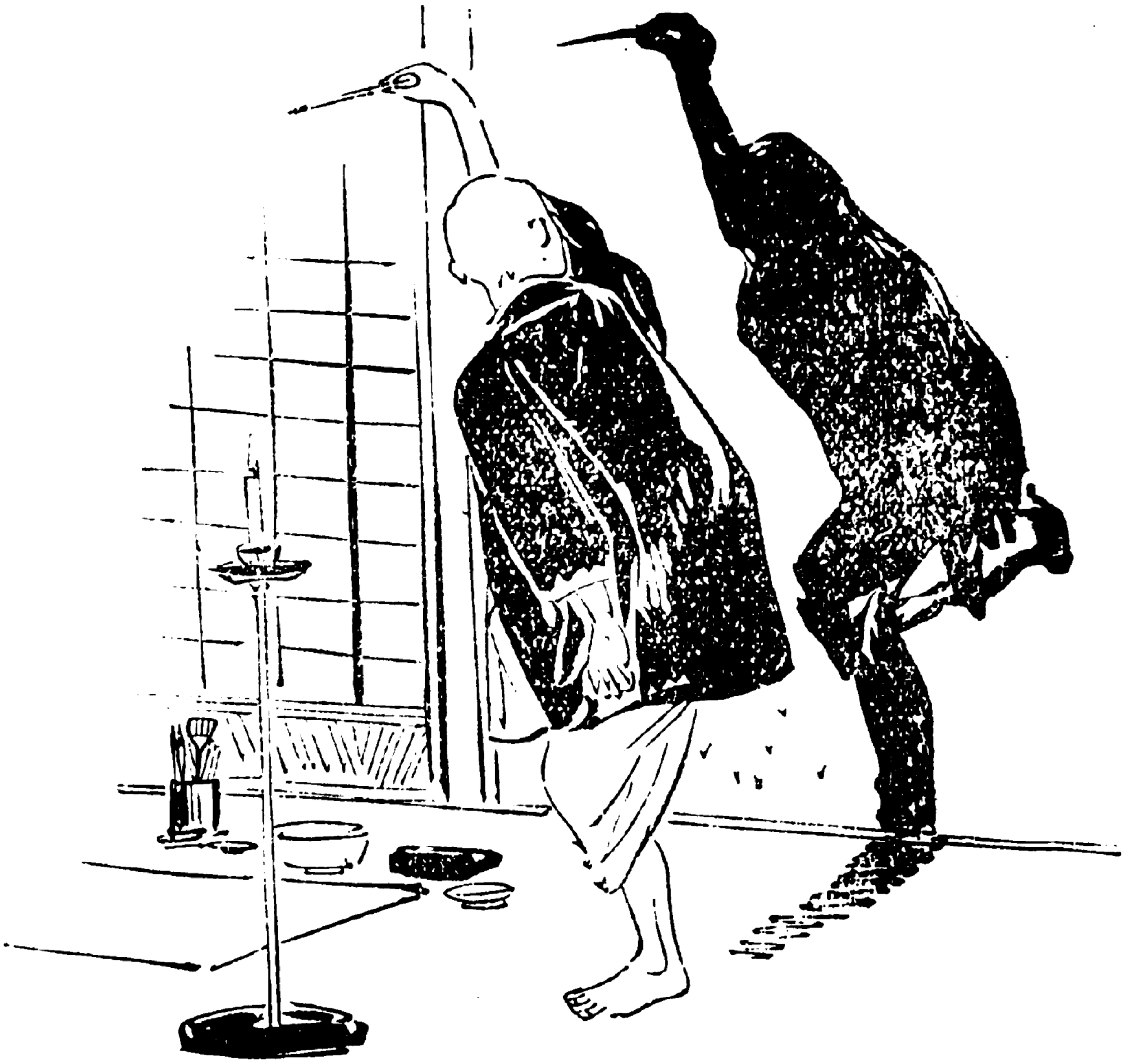
こゝはよしかしてはわしとのひちゝみ
　ある世なりけりふしのまなれど
ゆふまくれつまこひさかを越ゐくれは
　おのれもふ身と人や見るらん
煙こそ今はたゑたれふしのねの
　すかたはかりは昔なりけり
赤阪の御園のもみちいろをふかみ
　したゆく水も匂ひあひにけり
けふあすとうつれはかはる世の中の
　人のこゝろのふち瀬かなしも

## 執心（三）

蓬生屋女史

狩野法眼元信の事

狩野法眼元信と云ふは、名にし負ふ畫師なるが、そのむかし、元信、諸國をさまよひありき、泉州左海なる一國寺と云ふ寺に身を寄せ、三年ばかりすみけるが、畫師とは名に聞きたるのみにて、三年が間筆硯とりし事は更になく、日毎夜毎碁をのみ圍み、石の黒白を爭ひ興じ、或は何處を問ふにや、何を見るにや、こゝ彼所



さまよひ遊べど、曾て丹精をこらす事はさて、筆硯だもとり出しゝためし一日もなく、三年の月日空しく遊びくらせしは、如何にも心得ぬものかなと住持思ふものから、一日、法眼に打ち向ひ、其許は畫を以て一家をなせりと聞き候ひしに、三とせわが房にあるほど、未だ筆を取りたることもなく、圍碁にのみ年月を過さるゝは如何。我れ衣食を惜しみてかやうに申すには候はねど、何處へなりと遊びたまへ、愚老も所用ござれど、近々京へ上り、殊によりては一年も在京せむも計りがたけれどといふに、そはいと名殘り惜しき事にてそ候へ、左あらば年來の恩謝に何をか書き殘し候べしとて、心がまへのみにて、又四五日空しうふるに、住持は何をか書くらんとはやく見たくて、今日は、明日は書くらんと待ちに待てど、元信はいつかな筆をとらず、如何はせしものといぶかり思ふ小夜ふかく、小坊主、住持が居間へ入り來り、和尚の耳に口よせて、彼所に行き給ひて、そと畫師がありさまを見たまへとさ

ゝやき示すに、やがて小坊主がいざのふまゝ、畫師が居間を伺ふに、元信はふす間に目ありともつゆ知らぬさまにて、明り障子の腰板に身をよせ、起きて見つ、寐て見つ、さま〴〵の姿して影をうつし居るに、住持そつと小坊主をひき寄せ、こよかし、のぞくべからず、はやく臥せよとて其の身も寢屋に入りたるは、元信が見んを憚かりてにやあらん。

あくれど畫師はまだきに起き出でゝ一間障子に畫くを見れど、皆臥したる鶴なり、筆勢非凡にして、丹青の妙云ふばかりなし、夜に入りて今宵は如何にとまたそつと起きて居間を覗くに、畫師前夜のごとくいねずして、足をのべ、首をかゞめなどし、わけなどかくや畫かむ、かうやあらましなど、ひとり言の葉さへもらして、そのまゝ臥しけり、かくすること十日ばかり、其の鶴凡そ二十四五羽を畫きたり、住持は知らぬ顔、またや夜深くそつと覗き見るに、此度は肘をはり、足をのべ手を口にあてつゝ、鶴のふしたるさまをうつし見て臥しけるが、夜あけて、住持とく畫師のもとに來り、今日ゑがき給ふ鶴の姿はかうやうにやと、よべ覗き見たる姿のさまして見せけるに、法眼うちおどろき、さても〳〵、我が今朝畫がゝんと思ひかまへしこゝろ禪師には如何でそをはやく知ろし召されしやと問ふに、さればなり、昨夜其許のやうすをそと伺ひて知りたりと云ふに、法眼また鶴は畫かずして、杉戸に檜木一樹をかき、そのまゝ東國へ行くとて別れをつげ出で行きしかど、日を經て再び歸り來にたり、住持之を見て大におどろき、其許は東國へゆき給ふと聞きしに、亦もや來られしは如何なる事にやと問ふに、さきに畫きたる檜の木の枝足らぬ所あり、心ならず出でけるが、今箱根の山中にて意に叶ひたる枝を得たれど、ものし足さむとてわざ〳〵立ち戻りたりとて、一枝畫きそへ、いとまでひして出で去りしとぞ。此の樹誠におのづから自立せるものゝ如く、鶴また生けるものゝ如しとぞ。

# 蘇小妹三難新郎（四）

湘玉女史 節譯

この夜は、月明にして、眞眞の如くなりしが、少游は前廳にありて、祝賀の筵宴も已に畢りたれど、いでや房に進まんとて、房の前に到りしに、只見れど、房門は緊しく閉ちて、庭中に極めて小さき一張の卓兒を擺著け、其上に紙墨筆硯と、三個の封兒と、三個の盞兒とを位置よく排列べあり、其三個の盞は、一個は玉の盞、一個は銀の盞、一個は瓦の盞なり、青き衣著たる一人の小鬟房の門の邊を守り居れり、少游はこのものに向ひて、面倒ながら小姐に傳へられよ、新郎の來りしに何故門を開き玉はざるやと、丁鬟答て、妾は小姐の命を奉して官人を待てり、こゝに三個の題目あり、三たび試みて皆式に中りたまはゞ、其時こそこの房門内に入ることを准しまゐらせめ、此處にある三個の紙封兒は便ち題目なり、少游三個の盞を指して道ふ、是又何の意思なるや、丁鬟道ふ、那の三の盞の內、玉の盞は酒を盛り、銀の盞は茶を盛り、瓦の盞は寡水を盛るなり。三試ともに中りたまはゞ、玉の盞に美酒を盛りて三杯を勸め、夫より房の內に誘ひまゐらせん、兩試中りて一試中りたまはずは銀の盞に清茶を汲み、渴を解き來宵を待ちて再び試驗するなり、又一試中りて兩試中り玉はずは、この瓦の盞に盛りたる淡水を一口呷み、且落第の罰として外廂に在りて三個月の間書を讀みたまふなりと說明しければ、少游は聞訖りて微く冷笑ひて道ふやう、別個の秀才は、擧に應る時、問題の容易ならんことを望むなれど、下官は曾て吏部の試驗に應過せしことあり、故に問題を解くは青錢を擇ふが如く、萬錢を撰べど萬錢中るなり、何ぞ三個の題目と言はん、就ち是三百個の題目ありとするも、我何ぞ懼れんやと。丁鬟道ふ、小姐の選びたまひし題目は尋常の盲試官の手になりしとは比べものにならず、尤一個の故事に應する而已なれども、其題目は好だ難き

ものなる哩、先第一句は、絶句一首にて、新郎も亦一首を作り、夫と言はずして其題目の意味の自然に分かるやうにすれど式に中るなり。次に第二題は、四句の詩にて、其中に四個の古人を藏著めあれど、是を一個も差はざるやう猜著たまはゞ方に中式と爲すなり。第三題に至りては實に容易なり、七字一句の題目なれど、此一句に對兒を做すのみなり、其對句が好く出來れど、夫にて試驗も畢りとし、美酒を飲み香房に進みたまふべし。少游道ふ、先つ第一題をわたしたまへ了鬟は第一個の封紙を拆開きていざ覽給へと遞與しけれど、少游手に取りて看るに、花箋一幅に四句の詩を寫せり。

銅鐵投二洪冶一　螻蟻上二粉牆一
陰陽無二二義一　天地我中央

此意は化緣道人の四字を四句に分ちたるなり、銅鐵を鍜治の爐に投ずれど溶解る是化なり、螻や蟻か白壁の塀に上るは是緣なり、陰中陽あり陽中陰あり、相合して即ち道となる、又天地の間に在るは人なり。

少游は想道ふ、這の題目は別人にては定猜難からん、是は我先日、雲游道人に打扮て岳廟に在りて化緣し、蘇小姐を相たる時の事を言ふ者にて、此四句の中に化緣道人と云ふ四字を含ませ、明に我を嘲りたるなりとて、遂に月下に筆を取り、詩一首を題後に寫して云ふ、

化工何意把レ春催。緣到二名園一花自開。
道是東風原有レ主。人々不三敢上二花臺一

此意は、化工は造化なり、造物主はいかなる意にて春の陽氣を催すやらむ、其陽氣か名園に到れど、それが緣となりて花も自ら開くなり、されど、原來此東風の爲に開く花には定りたる主あれど、其主の外は、誰にても花の臺に上ることはならぬとなり。此詩毎句の頂上に化緣道人の四字を藏し、且小姐を娶め、其小姐の主は我たることをも示せしなり。

了鬟は詩の完るを見て、第一幅の花箋を將て三疊に疊做し、窓の隙間より差出し、新郎第一場の文卷完りしと呼ぶ、小妹は内より受取りて其詩を覽るに、毎句頂

上の一字を合すれど化緑道人の四字となるゆゑ微笑たり、此方には少游又第二封を開きて之を看るに、此花戔一幅も亦詩四句を題せり、

强爺勝レ祖有ニ施爲一　鑿レ壁偷レ光夜讀レ書
縺線路中常憶レ母　老翁終日倚ニ門閭一

少游は此詩を見て少しも思を凝らす樣もなく、一々句の下に注明たり、第一は孫權、第二句は孔明、第三句は子思、第四句は太公望と、了鬟窓の隙間より小妲に遞進しけり、この時少游口には、語らざれども、心下想道ふ、今や兩個の題目は我を難倒せるものあらざりし、第三題は對句とか聞く、對句は我五六歲の時より能く會得せしことなれど、固より難しとするに足らずとやがて、第三幅の花箋を拆開きたるに、內に對を出して云ふ、

閉レ門推出窓前月

此句初看し時は容易きやうに覺ねしが、仔細に想ひ來れど極めて巧に出來居れり、若し對を作りても平常にては我が本事を示すに足らずと、左思右量ても好き對を得ざる內、はや城の譙樓にては三更の太皷を打ち、夜も次第に闌け行くにぞ、愈心慌て胸迫り、いかんともしがたし此時東坡は尙睡りに就かず、且妹夫の消息を聽かんと來かゝりたるに、少游は庭の中に在り、團々步みながら、口裏に、閉門推出窓前月の七字を幾度となく吟哦ながら、右手にて窓を推す勢を倣し居たり、東坡はこれを望み見て、想ふに、是小妹が此句の對を求めて難儀させ、少游は其れが爲めに困められ居るならん、我この急場の圍を解き遣らざれど、誰れか撮合を附けやるものあらんと、急に其對を考へたれども、東坡とても直くには好き對を得ざりけれど、思案の折柄ふと、見れど、庭中に一隻の花缸ありて、これに滿々的に淸き水を貯著へたり、少游は一回り步みてふとこの缸に倚りて水を看居たり、東坡はこの樣を望み見て、靈機を動し、好き趣向の浮びたれど對を敎へ遣らんと欲ひたれども、小妹に知覺られなど妹

夫を連累し、他の體面にもかゝることとゆゑ、如何はせんと先つ少游と遠く隔りたる處に跕著み、咳嗽して我が居ることを少游に知らしめ、足下にありたる小き磚片を拾取りて、缸中に向ひ投入けれど、那缸中の水は磚片のために激せられて躍起り、其幾點は少游の面上を撲ち、而して水中に在りし天の光月の影は、紛々として淆亂れたり、當下少游は忽其意を曉りけれど、遂に筆を援きて對して云ふ、

投石沖開水底天

やがて了鬟は第三遍の試卷を小姐に交付たるに、間もなく呀的と云ふ聲と共に房の門は大に開かれ、房の内よりは一個の侍兒の走せ出來り、手には銀の壺を捧げて美酒を玉の盞の内に斟み、新郎に獻上し、頻に才子と稱へ、十分に三杯を過したまへ、こは權に時糾の勞を賞しまゐらするなりと云へり。少游此花意氣揚々、連けて三杯を飲み、了鬟に擁られて香房に入れり這の一夜は佳人才子好だ意に稱へり。

（未完）

## 書あつめ（一）

草の屋主人

ある都の人、天さかる鄙の長路を越えゆきて、何處の國にやありけん、忘れたるが、人里はなれし山奥に入り、ゆけどもゆけども、山また山重なりて、人家もなく、尋ぬる人もあらぬに、日ははや傾き、梟は聲すさまじう梢に鳴き、何處にか鳴る瀧の音すごく虎のうそぶく如くなるに、流石おそろしう何方へ宿らんものとうち困じつゝ、なほ何處にや道あるやとおどろ分けつゝ行くに、ふと見ゆる燈火にたよりを得て近よれど、山かつか何どの住家にや、いと小さき小屋なり。案内して路を問へど、此處より二里もあらんと云ふ。ひねもす上りつ、下りつ、おどろかきわけてやう／＼來たるなれど、さらでも勞れたるに、二里とて平地ならねど五里にも當るべしと思ふに、俄かに腰ぬけてどつとどかり腰すゆるに、主人は此のさまを見て、いたく氣の毒がり、むさくとも宜しくど此處に一夜をあかして明

朝立ち給へなど云はるゝに、いよいよ腰ぬけて、さらど頼まんとて誘はるゝまゝ家に入れど、家も屋根もあらゝかに、雨風もたまらぬばかりの住家、かくても住む人ありけるよと、つく〴〵忍びつゝ、主人が容貌伺へど、もとより山がつの色くろくつらむくつけきに、語る聲音もあらゝかなり。かくても人かとおもふに、ゆゝしう身もふるはるゝばかりなり。床もせんべいのうすきに、あらき風は絶えずすきをもれて、夜半ふくるまでねぶれざりけり、主人は嫗一人、外に男二人ぞかりと夜もすがら笑ひつ語りつゝ言葉も大かた通ぜぬ中にふと聞ゑたるは、今日に珍客のものされたれど、明朝はとく起きて、はんごろしせんと云ふ。話の旅人の耳に入りてふとおどろけど、おどろくまゝおそろしう、さては、此の屋は山賊の住家にて、われを殺して金錢を奪はんとにや、おそろし〳〵と思へど、いよ〳〵ねぶれず、如何せんと思案をこむるほどに、嫗ははや起き出でたり。さては我を半殺にせんとの期とく起き出でたるにや、嫗ひとりならば、わが腕ひしぐもやすけれど、外にあら男三人もあるを、如何でわれ一人の手に答ふるを得ん、ひきやうなれど、今はたゞ三十六計走らんにしかじと思ひ定め、そつと厠にゆくさまして厠口より外へ出で、息をもつかず、おどろをもかやをもふみしだき走りに走り、やう〳〵市に出で、とある旅宿へ立ちより、よべ盗賊の住家に入り、すんでの事半ごろしにされんの所あやふかりきと物語けるが、その地方にては萩の餅を、はん殺と云ふなりとのちに聞きて大に笑ひしとなり。

## 笠子笑談集

金津常十郎

### 定命を知る事

釋尊笑ふて降伏魔尊者にのたまはく、汝物の定命を知れりや、尊者敬て答て曰、わが定命すら知らずいかでか物の定命をしらん、爰に於て、釋迦、妙な

る聲にて示してのたまはく、夫一度形を受たる者は終に滅せざるの理なし、各々その滅する期を定命といふ、汝の定命も左様に心得よ、それゆゑ、皆死した日ほどたしかな定命はないぞ、其死ぬ時に成て、もちつと生て居たいと思ひても、生延る事もならず、然れど、よろづの物が死んだ日こそたしかな定命と知るべし。

註に曰、人皆自然の命數有て量り難きことを知らずして只歳の多少に拘りて、あの人は夭死でありたの、此人は長生で仕合なのと、とかく長生をうらやみ米の札もらひて戴きたり、元日になれど、年のゆくことも知りながら、若年を御迎へなされましたなどと心にもあらぬ口先を云たり、或は鯛の死骸を二つに括り合せて目出たいと云たり、又は「ちとせふる」とも歌によまるゝ、松を千年の事は扨をき、三年程で根元からふつゝり切られて、罪人のさらしもの見るやうに、門口にたてならべて、是がなんの目出たいことゝは見ゑず、長生を羨む人々に似合ぬ仕事なり。しかし、世上に交りて居る時には、やはり昔から目出たいとしてあることは、人並に目出たいと云て置ねど交りはならぬなり。是はこれ理をも知らずして、めつた無正に物忌する人の眼が開かん爲のたとへなり。なんぼ長生がしたうて、米の札戴きたとて、命が一日延もせず、それゆゑ、又夭死がしたいとて羨みても、命が一日縮みもせず、萬の物の死する時が、即各々受取まへの自然の命數の盡る所なり。もし物が皆千年萬年生て居たなら、後世になる程、居る處がたらいで、やり方がなかるべし、夫ゆゑ生死の術でよい加減に拵へたものじやほどに、よく〱得心して見たなら、忌物する程の迷ひはやむべし。

傳來の秘書

養由基は聞ゑたる弓術の名人なり。自身弓術の奥儀を書殘す。其子養由成その書を秘藏して是を見る事日夜

なれども、敢て弓術に通せず。基の弟子に陣章といふ者、ある時ひそかに其書を見るそれより陣章が弓術天下にかくれなし。

註に曰、諺に云、寶の持ぐさりにて、其人にあらざれど寶も寶にあらず、諸道相同じ、各其位に至らずして何を傳受しても、所謂猫に小判にて、何の役にもたゝざるなり。それゆゑ、なんぼ養由の子でも、藝の位至らずては、其道に通じがたし、陣章は已に名人の位に至るの所ゆゑ、其秘書を見て忽ち弓射の道を明らめしものなり。

## 梅の下風（五）

白魚女史

なげきそと云ひしとて、孝子、如何で母が最期をなげかでをらるべき、をしみぞと云ふも、孝子、如何でかなしまさるべき。傳吉は母が最期の言葉、つくづくと慈みの露の、いよいよ身に染みて身もよも知らず去づみ入りしが、なほ如何にもして引きかへさまし、引きかへさむと思ふ心の一筋に氣も力も出で、呼ぶ聲もゆすぶる力もやつれしすがたに似ずいと高うも強うもありけるが、母が氣息全く絶えて、強直の期の至るや、力もとみにうせて、とひとぶらふ人々へも何の答もなく、玉の涙のみたゞあられとたどしるもあはれなり。日來至孝の身、なげかるゝは道理、さこそと押しはからるれど、なげきしとてもはやかへられぬものを、あきらめられよなど、近隣の人々ときさとして、何かと世話して、湯棺も人々してつかはせ、棺にも納れしに傳吉はなほいとほしさやる方なく、釘打ちし棺、三度四度あけては玉の緒のかへらん萬一を祈るも愚かなれど、孝子が心さこそいたましけれ。やがて野邊の送りも、人々にはげまされて、行ひたる後は、力なくなく鉦をうち鳴らすのみ。飲食も口にせず、涙にかきこもれど、死手の山路の露もさこそはひまなかるべし。やがて四十九日もたちしかど、傳吉はなほ母をいたむ



心やます、毎年は刈り急ぐわさ田、中田、奥田、今年は刈らむ力もなく、たゞ茫然、空をうちながめては一去きりかきくらすのみ、さりとては傳吉殿、あまりなる思ひ入り方、さやかに泣きのみ居られては、三途の川の水のみまさりて、亡き人はさこそ渡りなやまむかへらぬ事はすてゝ、早う稲刈の助してなど、近隣のもの日毎にそゝのかすに、強ひて心をはげまし、田畠をも早うかへして、家名をもとりもどし、亡き父が草葉のかげの御心をも休め、伯母をもさぐり出して、母が墓へも共に詣でんなど思ど、行方は何處去ら雲のさぐらむ術なきを否神心をつくして神佛に祈、さぐり求めば、如何で尋ね得ぬ事やはあるべきと、近里の者にわざとたのまれ、飛脚となりて所々に行き、それと心をくだきぬるに、一年江戸へゆく道にて、やつれたる母子の乞食にあひたり。誰とは知らねど、すゞろあはれ催し、錢などとらせ、一言二言物かはす言葉に、何となう、越後なまりの聞ゆるもなつかしう、國許など問ひたゞすに、越後高田の者にて名をはやと呼び、此處なるは我が子なるが、先年夫にはすてられ、たづきなさに、母子かくは食を所々に乞ふなりと云ふに、故郷も故郷、殊に其の名のれはやといふは、もしや尋ぬる人にはあらずやと思ひ、その許には、寶田村の農、代々傳吉とて、庄屋役をも勤めたる者をも若しは知りてにはあらずやと問ふに、乞食は驚き、そはわが姉い嫁ぎし家、和君は如何してそを知ろしめさるゝといぶかしさに恥かしき面ふりたてゝの問ひに、傳吉はいたくよろこび、さては伯母御なりしよ、己こそは御身の甥の傳吉にて、伯母御があるよし母が最期に聞きたれど、日來尋ねをりしかど、顔も所も分かず、中々に求むる道も分かざりしを、此處に不思儀にめぐりあふは、神佛のれひき合せとよろこべど、流石乞食のちぎれし袂に涙を包み、恥かしきいろさへ見えぬ。何はともあれ、もろともに家に來られよ、父も母もなく、以前とは生計もかはれど、なは雨露を凌ぐばかりの屋はあり、急ぎ歸りてこし方の言互

みに語りあはさんといふに、伯母もよろこび、何の異議なく傳吉に伴はれて、其家に至れど、げにむかしとはことかはり、姉兄もなきに、流石乞食も懐舊の情を催せど、傳吉はなほ更ら涙に家の事、父の事、母の事、かたりつげ、母が生前にかく逢はましかばとて、またもね堪へぬ涙、疊を叩く音去げし。伯母もまた母に聞きしむかし男と走りし事を物語り、面目なげなるに、傳吉も深うは問はず、それよりは伯母をたゞ母とおもひ、娘をは妹として、いよ／＼日毎の家業に出精して、伯母、母子を養へど、傳吉が家業を助けむため、夕におそく糸くる事もあれど、綿うつこともあり。心よりむかし後悔せしさま去はらしう、一家睦びくらせど、近隣のものまでよき人にめぐりあひしを祝ひ、且つ今年は傳吉殿もはや二十三歳、娘子花子どのも十八歳、年ころもよし、知りあふ中は水いらず、一層夫婦とされてはと、村の世話やきとたてられし權兵衛の媒に、母親もげによろこび、傳吉、花にも問ひあはすれど、之もまた異議なく、はては今の庄屋、傳吉が伯父にも告げ知らせ、片ばかりの酒肴とゝのへて、三々九度の盃もめでたくすみ、時津風平かにをさまりしが、一旦傾きし軒、中々に田舍にて如何に稼ぐとも、もりかへさむ道は覺束なければ、名にしおふ花の都に出でゝ、十年が間何處へか奉公して、その給料もて祖先の家を起さんものと伯母にも妻にもはかりしに、二度三度ひきとめしかど、さりとて、父がうらみはらさぬも、不幸と說き諭すに、母子もげにもとて、やがて旅立ちの用意にとかゝりぬ。此のお早母子こそ、かの森田屋の後妻なれとは、ひめたちも推し給ひしならむ。



# 文林



夕郭公　東久世通禧

燈をしはしまつまのはしゐして
れもはす聞つやまほとゝきす

夜梅雨　鍋島直大

夜更れは青葉にそゝくさみたれの
れともますます高くなりけり

曉夏月　高崎正風

蚊遣火のけふりのすゑに殘りけり
みすてゝいねし夏の夜のつき

晴後遊郭　前田利嗣

浮くもにかくれしをちの山のはも
いまあらはれて雨はれにけり

海邊郭公　竹屋光昭

波かせの音志つまれる海はらの
つきの出汐になくほとゝきす

夏草花　長谷信成

いふせくも志けるかきねの夏草に
交りてさけりひるかほのはな

郭公驚夢　諏訪忠元

さらぬたに別れまをしききぬ〳〵の
夢れとろかし鳴くほとゝきす

夏露　宮地嚴夫

志けりあふ垣根の草につゆみちて
秋遠からすなりにけるかな

樹陰水　北郷久政

ふつたみつ杉のふるはは浮なから
木かけの清水すみわたるかな

夏月　鎌田正夫

蜩のこゑまたのこるこすゑより
さしのほりけりなつの夜の月

田上螢　大口鯛二
梅雨に小田のあせみちつちくして
ゆかれぬ方にとふほたるかな

田家夏月　岩崎勝従
植はてし田面の早苗つゆみして
すゝしく出るやまのはのつき

行路夕立　小出粲
ひとはとくかへりし野路の夕立に
牛かひはかりぬれてこそゆけ

卯花　下田義天類
ゆふへ〳〵さみたるゝ夜の月かけは
卯の花かきのひかりなりけり

扇　大畑弘國
あふきみれはたもと涼しき扇かな
ふしの雪をやたゝみこめけん

螢　三浦千春
ひかりある身ともはやなれ夏毎に
ほたるれふ子よほたる集めて

對鏡　三輪義方
照るつきによそへて見れはます鏡
我かれも影そくまとなりぬる

螢照洲芦徹月後　藤井行麿
夕月のいりにしのちの木したやみ
ときしかほにもとふほたる哉

海邊梅雨　草野隆道
さみたれの雲こそわたれ松浦かた
もろこしかけてふり出にけり

山郭公　足立正枝
くらけ山夕こしくれは木の間より
月かけもりて鳴くほとゝきす

寄花懐舊　後藤春藏
ひとり來て花のこかけに休らへは
ともに見し世の人そこひしき

夏月透竹　木庭芳香

月みよと日もくれ竹のしけりあふ
わかはをわけて風わたるなり

橘　　伊藤純三

もゝしきのふるき都そしのはるゝ
はなたちはなに風かをるころ

妻にわかれけるとき　　織本泰造

子を思ふ親はとれやをれもひてし
君かこゝろそいまはかなしき

壇浦懐古　　安齋篤敬

いにしへのふみの林にわけいれは
八島のうらにあきかせそふく

養老瀧　　伊東祐賢

そこひなき親のめくみもしら糸の
ふかき瀧つせくみてこそしれ

遠時鳥　　近衛貞子

遠けれと紛れさりけりまちつけて
きゝしさつきの山ほとゝきす

岸上藤　　前田朗子

水の上をはらふはかりに咲にけり
はなふさなかききしの藤なみ

朝梅雨　　西四辻茂子

梅雨のあめまたけさもはれやらて
くものゆききそ低く見えける

山新樹　　柳原愛子

白雲のあはたのやまのわかみとり
すゝしくみえて夏はきにけり

待客聞時鳥　　南郷柳子

ほとときすさやかになきし一聲を
我まつひとにきかせてしかな

船納涼　　保科節子

夏川にあつさなかしてすゝみとる
ふねのうちにもいるほたる哉

市中梅雨　　小池道子

梅雨のあめをやみなくふるまゝに

かさうる家そいそかしけなる

雨後新樹　三島竹子

繁りあふ若葉のかけはさみたれの
はれにしのちも乾かさりけり

夏雲　三宅龍子

たゞならぬ雲とみし間に夕たちの
雨ははやくもてはれきにけり

池杜若　河村重子

燕とふ池のみきはのかきつはた
ふちよりのちのなかめなり鳧

里時鳥　土岐幾子

一聲はゆめかうつゝかわかねとも
ねさめの里にほとゝきすなく

女學校　安東菊子

ひらけゆく文のはやしに學び得て
よき實をむすべはなのをとめ子

月前卯花　清水菊子

月きよみかきねにさける卯の花の
枝もたわゝにかゝるしらゆき

山新樹　高橋美代子

野も山も庭もひとつのふかみとり
いつれ櫻のこすゑなりけむ



## 雜報

●皇后陛下には、去し十八日、華族女學校に行啓せさせ給へり。

●宮中御兼題は、「檜垣嫗」にて、去し五日、例の如く、詠進せしものは、左の如し。

行處ほかにあらしといひやりし心はせこそゆかしかりけれ　正風
今もなほよになかれけり白河の水はくむなる老かことのは　延遼
年へてもにこらさりけんしら河の水の心そくみてしらるゝ　直大
昔のはのはなのすかたは白河の水はくみても老せさりけり　豐頴
みつはくむ老となりても白河のことはの花はよゝに匂へり　利嗣

くみてこそよにしられけれ老か身のふかき心もしら河の水　承昭
水はくむ老かすかたにしら河のしらぬ昔もしのはるゝかな　詮
訪れてゝ窶れはてたるやれひ垣忍ぶ隆なき身をいかにせん　通善
白河の水の流れはたゆぬとも汲しそのなはよゝにつきせし　光昭
みつはくむおいの姿もことのはの花に昔のいろはみえけり　利恩
白河の水とゝもにもくまゝるはきみかむかしの心なりけり　忠敬
今もなほよにしられけり白河の水はくみけんきみか言のは　清
白河の水はくみけん言のはは千歳をへてもよにくまれけり　美稻
くみあくるみつにうつろふ白河の白髮の影や悲しかるらん　通治
白河のみつはくみけんそのひとの言葉の花はよに殘りけり　隆元
みつはくむことはのしらへくりかへし涙くまるゝ白河の水　愛子
おもかけはみるかけもなくなりぬれと心は清ししら河の水　任子
くむ水のふかき心はしら河の流れてよゝにきこえけるかな　文子
今もよにきこえけるかな白河の水はくむてふ高きしらへは　祥子
其名のみ高くきこえて徒にくちしひかきのをしくもある哉　敦子
濁江にたゝよひなからしら河のみつに心やすましはてけむ　道子
白河の水くむたひに老のなみよりにし影をみるもはつかし　衆子
白河の水の流になかれたるなはちとせまてのこりけるかな　好子
清かりし姿やいつかさしをへて老のなみよるしら河の水　廷子
昔なしのひてそてやぬらすらんそのくろかみもしら河の水　伊佐雄
昔のそのおもかけもしら河のなかれの末にくみしられけり　三枝
衰へしそのおもかけを白河の水のかゝみにうつしてやみし　愛
水はくむ老となりてもよむうたの姿はかりはふりぬきみ哉　眞頼

思ひきやさし波よりて白河の水くむまてになりはてんとは　恩夫
白河に何をたれとてうき草の言葉の花はさきいてにけむ　正臣
いかにすみいかになかれしすゑならん其水上もしら河の水　秋香
いまもなほはすのうてなに言のはの玉のあさゝふ白河の水　傑
言のはの花こそ匂へ白河はなかれはたえてひさしけれとも　有經
くみあけし水に昔や忍ふらんなかれわたりしうきくさの花　殿雄
水はくむ老とはなれと言のはの道にかしこき君そたふとき　重嶺
くみあけしその昔の面影もいまなほうかふしら河の水　行久
なまめきし色にもうせて白波のみきはにたてる女郎花かな　正夫
君かその言葉の數に入しよりやこしの山もよにしられけん　胤明
今も猶つゝみかたきの言のはの調たかくもよにきこえけり　英一
秋風にふかれくて白河のきしにやせたるなみなへし哉　義濟
白河の水くむかけは老たれと言葉の花はなほかれすして　久子

●米澤高等女學校にては、このたび、女生徒の小説を讀むことを禁めたりといふ。いとよきことなり。これしなべては、いふべからぬども、當世小説といふもの多くは、たわけたる男女のならひをうつせるなり。學校生徒には、ゆうもなきことなり。

●京都高等女學校の生徒の一人なる東本願寺伯爵の令嬢某は、日ごとに通學するに、人力車にうち

のりて、學校の玄關に横附にすといふ。さて學校のおきては、生徒はみな、門外にて下車すべきさだめなるに、さりとは、あまりにはしいまゝにないがしろなるわざかなとて、他の生徒の父兄は、河原校長につきてたゞさんとすときく。さもあるべきことなり。おきてを犯すは、あるまじきわざなり。

●學校生徒の服装　を華美に流れしむるが、よからぬは、さきにしば〴〵いへり。前號にも、新潟市長が之をいましめしを記せり。今、又、栃木縣知事なる千頭清臣氏は、左の訓令を、郡市役所、縣立學校、町村役場、市町村立學校へ發せられたり。いづこもかくあらまほし。

學校生徒にして華美に流れ特に女生徒の盛装を爲すが如きは啻に勤儉の美徳を損するのみならず、延て一般の就學者を妨ぐること尠しとせず、就ては自今生徒の服装には一層注意を加へ、平日は勿論儀式施行の日と雖も質素を旨とし、絹布の如きは着用せしめざる様取計ふべし。

●心得ぬことかな。奥州、仙臺市の教育會にてはこたび、生徒の名を呼ぶに、その呼棄の可否を討議せり。さて、結局、男生徒は、呼棄にし、女生徒は呼棄にせずと一決せしといふ。その何が故なるを知らず。願くは、會員諸氏、なほ一考を重ねて、再、會議に附ては如何。

●このごろ聞くに　東京府下の私立小學校の財政のゆたかならぬを見すまして、キリスト教徒等、一計を案出し、かの外國教會の補助をうけて設立せし櫻井、曉星、泰西、頌榮、喜音等の學校長を中におきて、いよ〳〵其の手をおしひろむといふ。こは、その生徒等をそゝのかして、日曜毎に、最寄の教會堂にかよはしめ、日曜學校（ヤソ教者の設立）の課程を修めしむるを名とし、父兄の、さりとも心づかざるほどに、かのようもなきキリスト教主義に感染せしむるなりときく。さてこの日曜學校出席の生徒一名につきて、金五錢、或は金十錢づゝを教會より私立小學校主に仕拂ふにて、たとへど、五十名の生徒を一ヶ月日曜毎に、出席せしむ

れど、十圓、或は、二十四五圓を得べきを以て、この波にとらるゝもの、いよ〳〵多しとは、きくだにうたてきことならずや。抑、わが國、古來、忠孝仁義の道たゞしく、ことに、　今上天皇陛下、教育勅語を下し給ひて、向ふ所を示し給ふ。何のかげたる所ありてか、他邦の異端邪説を交ふべき。ことに、キリスト主義は、大にわが國風にたがひ、かつ、勅語のみむねにもそむけるをや。放蕩無頼のものを導くといはゞ、まづとかくはいはじ。天眞瀾漫たる、小學兒童をけがすに至りては、そのキリスト教者と、之に與する小學校長との罪かろからず。當局の人、またこゝに施すところあるべきなり。キリスト教は、かのこれによらでは、慈善心を發揮すべからざる外國にこそ必要なるべけれ。我か國にとりては、害はありとも、益はあるべからず。何を苦にやみてか、かゝる汚策を講するならん。そのキリスト信者も、をそらくぞ、日本の神洲に生れ、萬世一系の　天皇の洪恩に沾ひ、はた日本の粟をはみて、生くるものなるべし。かの小學校主も亦、之にはもれじ。これにそむきて、かれにつく、順逆をあやまれるも甚しといふべし。なはいはまほしきことはあれど、さぞかりはとて、れきつ。

●孝女　家まづしく、親病みて、すべもなきにも、子たるもの身をかへり見ず、孝養をつくすは、我か國、祖先の遺風にして、これまた親子の至情なり。家もまづしからず、親の愛にあまへて、わがまゝなるもの、これを見て、そのあやまちをさとれ。當時、東京本所區入江町卅一番地に住める中村源七といへるは、ことし五十歳になれるが、長女によねとて、十六歳になれるがあり。もとは、京都市、下京區、四條通、大和小路にすみて、憂き事もしらで、世をおくりけるが、ふと商業かけちがひて、すくなからぬ損失を生じ、そこにも住みうしとて、妻と、二女ひさとて、今十三歳になれるとをつれて、四人とも〳〵、東京に上りしは、今より五年以前なり。さて、この地にて再興をはからん

とおもへども、心にもまかせずして、諸會社の人足などにやとはれ、二女ひさは、人のもとに、下婢をつとめ、長女よねは、のこりゐて、日毎に、寸燐工場にかよひて、金十錢づゝを得て、之をたすけつゝ、辛くも、その日をおくりけるが去し五月の末つかたより、母（まつとて四十四歳）は脚氣症をわづらひて、おきふしも心にまかせず、かてゝ、六月の末よりは、父もまた腦病をやみて、うちふせるに、いとゞ貧しくなれり。こゝによね女は、心たゆまず、工場よりかへりきては、身をやすむるいとまもなく、父母の枕邊にありて、みとりに怠りなく、夜はよもすがらおきゐて、蚊をやり、なでさするなど、夜毎、おろそかならぬを、近所合壁、感ぜざるはなく、差配人なる同區、緑町五丁目に住める齋藤龜吉氏も、これをきゝて、自、ゆきて、そのありさまを見、あはれと思ひて、金若干をめぐみ、なほ、蚊帳をも、質うけして、つかはせり。又、同區、小泉町の醫師朝倉良佐氏も、之に感じて二人の病人を施療すといふ。かれこれいづれも感ずべし。德孤ならず、必、隣あり。孝女よ。孝女よ。意をつよくせよ。

●又、孝女　これもいと感ずべし。鹿兒島縣出水郡、阿久根村、波留五百三十八番戸平民、春田千代助が孫に、いゑ女とて、ことし十五年四ヶ月になれるがあり。祖父千代助は、名にちなみて、今、八十餘歳の齡を重ね、祖母たみ女も七十歳ぢかりなり。なほ義の妹くるとて、七歳なると、一家合せて、四人なり。家もとよりゆたかならず。漁をして、魚をひさぐを家業とせり。いゑ女、生れて、幾程もなくて、父を失ひ、母もまた、後夫をむかへて、くる女を産みしが、ほどなくうせたり。その後夫、また他より妻をめとりて三人まで兒を擧げたるに、親子五人離縁して去れり。のこれるは、老いさらばひたる祖父母と、幼き妹のみなるに、いゑ女十歳ぢかりの折より、雨にも雪にも、日毎に、魚をひさぎて、いさゝかながらもその代にて、一家四口をやしなひ、たちゐもまゝならぬ老祖父母の介抱怠りな

しといふ。さきに母の失せし折、なほをさなかりけるが、野邊のおくりにたちまじりて、そのなきがらを葬りしに、今一度、母のおもても見せしめよとて、なき口說きしこともありきと語らふ人もあり。近鄕、その行狀に感動せざるはなく、去し五月の末つがた、その臨時村會にては、これに賞金をおくるべきことを議決し、直に左の狀に添へて、贈れりといふ。いゑ女の感ずべきは、更にもいはず、村長も亦、いとよくせられたりといふべし。一鄕のみかは、これ天下の好龜鑑たり。

出水郡河久根村波留五百三十五番戸
平民　春田いゑ

資性至孝幼にして親を喪ひ善く祖父母に仕へ纖弱可憐の身を以て一荷の魚籠を肩にし孜々營々六年の久しき未一日渝ることあらず一家四人倚つて以て纔に口に糊するを得洵に奇特の行一鄕の龜鑑たるべきものなり仍て本村會の議決を經て玆に金十圓を賞與す

明治三十一年六月二十一日
出水郡阿久根村長　末田實

●至情　いたむに堪へたり。佐賀縣、某地の村役場にては、書記某、公金を費消せしに、村長、これを陪償すべきにて、その子、姉妹三人袖をつらねて、娼妓となりて、父の難を救へりといふ。親たり子たる眞情、果して如何ならん。察するに堪へたり。さるにても、この潔白なる節義の女子をして、汚泥に穢れしむるに忍びず。呼嗚この可憐の姉妹を如何せん。

●孝子　宮城縣に伊藤某といへるがあり。家いと貧しきに、二男文治といへるは、今年十一歲なるが、學校よりかへりて後、行商して、家計をたすくるに、見るもの感ぜざるはなしといふ。

●死諫　は至情なれども、思ひせまりて、あせるはよろしからず。横濱、戸太町にすめる英木富吉といへるは、土方を職とするなるが、妻のかよ女は、ことし廿四歲なり。去し十日、午前二時頃に家出して、平沼橋より身を投げて死なんとしけるを、折しも、巡査にひきとめられて、命を助かれり。こは、夫富吉が、妻子

をもかへり見ず、まして今、臨月にむかへるに、日夜賭博をのみ事とすれど、しば〳〵諫むれども、うけひかざるに、せめては、死してなりとも、夫の放蕩を諫めんとてなりとぞ。志やよし。事やよからず。今の御代にうまれ合ひて、死なでも、道はあるべきを。かくては、かへりて、夫の不身持を世にあらすに似たりや。つゝしむべし。

●これも死諫　妻ある人の、遊里に耽るは、もとよりよろしからず。然れども、多くは、一旦の迷にして、終には、かの浮薄にあきれて、心をとりなほすが如し。妻たるもの、これを思ひせまりて、命をかろくするは、烈はもとより烈にして、また至情なれども、つゝしまずば、親にもなげきをかくることあるべし。それ一國の爲にし、あるは、君の爲にして、事情やむなくば、さてもあるべし。今日、聖代の御代に生れて、こらへなば、こらふべきに、はたまた、すべもあるべきに、かろ〴〵しく命をほろぼし、身を棄つるは、おそらくは、君の御心にもかなはじ。且は親の心にもそむくべし。身を捨てし心もちにて、親につかへ夫を諫めなば、またうれしきこともあるべきなり。こゝに、東京市、麹町區、六丁目十番地に荒物をひさぎ、かねて、大工を職とする柳生重太郎といへるあり。妻の貞女はことし廿三歳にて、もと、赤坂新町、一丁目一番地に住める疊職近藤利三郎が妹なりけるが、去し二十八年、こゝに嫁げるなり。重太郎が父は鎌吉とて、六十四歳になり、母は、みねとて六十一歳なり。初のほどは、夫婦のなからひもむつましく、ともに孝養をつくしゝが、昨年九月ごろより、重太郎ふと遊里にふみまよひ、親のいさめはいふも更にて、妻もしば〳〵諫むれども、きかずして、うたてかりけれど、妻は、これもと、わが身の不束よりおこれるなり、われ、もしなからんには、身持もなほるべしと、思ひせまりて、去し二日、何げもなく、夫を出しやりて後、洗濯などのこるくまなくして、ふと家を出で、途より遺書二通を郵便に托し、

何時ともなく、府下西多摩郡、神代村の河中に身を投げてうせたり、七日になりて、夫之をきゝて、いきて見れど、正しくわが妻なるに、あきるゝばかりにて、翌八日、四谷の西念寺に葬れりとぞ。あはれなることをしてけるかな。さるにても、死なずとも、すべもあるべかりしを、心はもとより清し、しかしながら、二となき身を失ひしは、はやまれり。これも女のはかなさなり。さはいへ、重太郎も、これより悔く改めて、せめては、妻の至情に報いよ。さて、輕々しく身をすつるは、かへす〳〵もよからず、されども、この婦の貞實の志、掬すべきものあり。その遺書（原文のまゝ）

一筆かきのこしまいらせ此度は是非とも冥土へ參らればならぬ次第と相成りわたくしとてもあなたに色々お話し致しましても少しもお聞いれ下されず夫れにつけても〇〇〇〇〇〇〇〇〇故あなたが御母樣にも邪けんに成されいつそ妾が參らればよろしく一度でも約束いたした事がある故に妾が日頃それ許りくよ〳〵と致し居ります故わたくしが死んだなら宜しくと思ひ一つにはあなたの爲なり家の爲め又赤阪の事もみんな妾が惡い故おわびは草葉の影にて致して居ります お許し下され度候さぞ〳〵情愛のない女と思ひ成され候へどもこれまでの因縁とおんあきらめ被下候あなたも心入替へて下さるなれば嬉しく存じ候今朝ほど起してお役所へお出でなして下され〳〵と度々申上ても御聞入れならず又妾が何か申せば御母樣の肩を持つとおこりなされ妾もあなたに申度事山々御座候へどもモウ手が振へて書けません

さだより

重太郎さま

これは緣家の兩親に宛てたるものなり。

一寸申殘候妾事此度は冥土と申す處へ參らればならぬ次第と相成りこれまで重太郎さまへも色々と申候へども少しも御聞き下されず母樣にも御苦勞な掛け妾も母樣へ實に〳〵御氣の毒に御座候餘りお氣に入らぬやうにも思はれ始終御心配許り相かけ誠に〳〵妾も恐入り候これまでの事と思ひ下され草葉の陰にて死して居ります故どうぞ〳〵お許下され又姉上樣の御留守中に此樣な事を致し申譯なく恐入り候どふぞ〳〵此樣に此處で拜んで居りますゆゑ惡しからず思召被下候妾が生きて居られればいつそ宜しいかも知れず重太郎さんも何やら心に思ふて居る事がある樣にも思はれいつそ妾が死んだならおわかりに成ると存じます故左樣御承知下度候妾も姉上樣に一度お目に掛りましたが此世の別れ姉上まで御心配相掛け誠に〳〵不孝者と御許しなされまし此處で拜んで居りまするお梅ちやんにも先月來られましたのは別れ此樣な事の出來ましたのもみんな妾の不行屆どうぞ〳〵御許被下度候呉れ〴〵も御願上候まだ書き度事は山々御座候へども手が振ひてかけません故父上樣母上樣どうぞ〳〵おゆるし被下此上なき不孝者これまでの因縁とおんあきらめ被下モウ書けません

父上様
母上様

●貞婦　夫みうせて後、貞節を守りて、子女を養育して、夫の家名をたとさしめざるは婦たるもの丶務なり、世には、夫うせぬれど、その跡をもともらはず、我が兒のなげき、世のそしりをもよそにして、身をはずかしむるものあり。賤しくして、夫によらざれば、今日を送りかぬるものならむ知らず。さらぬきはにもをりく見ゆるはうたてし。さるをこ丶に、大河區裁判所判事故田制某が未亡人しき子は、良人みうせし後も、身もちたゞしく近傍の子女を集めて、裁縫の術などを教授しながら、日毎に墓參怠りなきこと、今に四年になれりとは、寡婦たるもの丶鑑なり。○又、同じ地の岩間某が母、これも良人にたくれて、貞節を守り、先婦の子と、わがうめる子とを見ることといさ丶かもへだてなきに、人感せざるはなしといふ。継子といへど、へだつるが習のやうなるに、夫うせて後すらかくの如し。これもよきかゞみなり。

●篤志　今上皇皇陛下の大御言に、進みて、公益をひろめよ」とのたまへり。今こ丶に、福島縣、相馬郡太田町に住める中目松の助といへるは、今年七十五歳になれるが、公道の險しくして、通ふもの丶、いとたしなむをあはれみ、自ら、鍬をとりて、山道を開修せり。人、これを中目新道といへりとぞ。妻の某も亦貞實にして、人をあはれみなぞよき行多しといふ。夫婦ともにこれ、今代忠良の臣民なり。

●風俗矯正　を主として、岡山縣、津高郡、白石村にては、恥勇社といへるをたてこせり。さて毎月、會議を開きて、弊風、陋習をあらたむべしといふ。願くは取捨を正しくせよ。

●下ざま　のものなれども、これも、臣民の一部なれど、よきはほむべく惡しきはきたむべし。○さきに京都、宮川町のうたひ女等は、行御苑内にてもよはせし婦人製品博覽會に、押繪額を出品して、今回、小松

總裁殿下より、一等賞を賜りしもの一人、褒狀を賜はりしもの十六人なりときく。家業は賤しかれども、この擧やめでたし。とく足をあらひて、正業に復れ。○うたひ女といへども、品行だに、正しかれば、何ぞ只に賤まるべき。よく藝をみがき、よく身を修めなば、何かあしからん。長崎の丸山妓會にては、紋付は夏は布、冬は金巾、座敷着は冬は銘仙、夏は竺仙、成るべくは手織木綿、金の指輪は眞鍮、傘は番傘、下駄の鼻緒は棕梠の皮、を用ゐるべきよしの約を結びしといふ。儉素を尙ぶはいとよし、○いはんも、いまはしき事ながら、いはでは、腹ふくるゝわざなれどいふなり。野州日光のうたひ女等、外國人の爲に、裸踊をせしといふ。如何に事をわきまへぬものなればとて、我が國風をけがせるも甚しといふべし。通辨の某、之を敎唆せりとは、これも、利慾の爲に我を忘れたるものなり。賤しきゝのなりといへども、きゝずてにすべきにあらず。いましむべし。

●婦德會　と名をのみ聞けど、誰か、あしゝといふものあらん。しかれども、其の實を見れど、醜いふに忍びず。はじめ、越中、富山の人、雪野秀雄とし廿九歲といへる男、人を欺きて、金子を借り、新聞紙などに廣告して、淺草のわたりに、根城をかまへ、小ざかしき女學生などの落ぶれもの數人を集め、こゝに婦德會といふをおこし、まづ、武州、浦和の演劇場法增座といふにて、婦人演說會をもよほし、金百圓ばかりを得てけれど、雪野ははやく、會員の一人なる三浦とりとて、今年廿六歲になれるしれものと奸けて、ともに、行方もしれずにげうせたり。この餘黨ども、去し二日三日の兩日　またも、東京神田なる、川上座にて、女子演說會といふをもよほせり。まづ、京都同志社女子部（キリスト敎主義の學校）の卒業生、金鵬女史、これも、名ばかりは、いとめでたし。次に太田くに子とて、これは、かの女子大學校設立のうわさを流せる成瀨仁藏が校長たりし、梅花女學校（キリスト敎主義の學校）

これも名どかりは、いとよし。その助教なりといへり。頭取ともいふべきは、大石花子とて、これは、家庭の友といへる雜誌の記者なりとけど、雜誌の價値もまづ推しはからるゝなり。翠香女史、これも名はゆかしけれども、實は如何あらん。これ、欠席したるに、人もあらんに、かの壯士俳優とたわけて、身を持くづせる淺尾燕孃をして、加勢の演說せしめたり。これは當時、落語家の群に加はりて夜每〳〵に、東京市中の寄席をはせめぐりて、今日なれくるものなれど、人皆知れり。まづこれらの一類、よくも集れど集るものなりこの日の演題といふは、

開會の趣旨　大石花子
血淚を飲で男子に訴ふ　金鵬女史
條約實施後の日本女子　太田國子
國力と女子教育　翠香女史
骨髓に徹したる遺恨　大石花子

にて、何れも皆、聞くに堪へず。一口にいへど、出すぎものゝ素行をさまらぬが、わが實力を養はんとせでみだりに口舌を弄びて、わが小才をてらひ虛名を得んとするものゝ如し。たゞ〳〵女權といふことを口にすれど、かゝる奴原は、かへりて、女權をきずつくるものなり。「人のこといはんよりひぢあかおとせ」とは、三歲の兒童も知ることよ。身も心も、賤しければにや、とかくに眼を下ざまにつけて、わが身を進め養ふをしらず。女子は、男子の玩弄物なりとて悔めども、いふその口より人にわらはれて、わざと玩弄視せらるゝにあらずや。女子は女子の本分を守りて、いよ〳〵進まんには、誰か女子を賤しむべき。良家の母たり、妻たり、娘たるものを誰かは、玩弄視するものある。何れも相應の禮を以て、接するにあらずや。まづ、退いて、汝は、爾の德を養へ。汝がいはゆる婦德は、不德なり。本邦古來、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友、各、整然たる秩序ありて存す。かく道は近きにあるを、却りて、之を遠きにもとめて、かの夫婦の愛を

以て先とする西洋の鄙俗を慕ふ。抑、何の心ぞや。更に大にかへりみて、類なき國有の美風、即、祖先の遺風を顯彰して、大君の大御心に協へ、以て西洋各國を風靡せしむるをつとめよ。

●女權黨の檄文　これも亦、お笑草なり。このごろ、本郷、濟生學舍の女學生等、何をかおもひけん。左の檄文を校舍内に告示し、催主は、校友會、有志婦人と記せりとぞ。親のめぐみ、否、親のすねをかぢりながら、ねうもなき事に力拳をいれて、徒に時日を費し、婦德會の二の舞を演せんよりは、まづわが本領たる醫學を專攻して、開業試驗に落第せぬ用意專一なり。やめよ〳〵。

藩閥政府既に轉覆し政黨内閣は樹立せられ憲政の美果期して待つべし然りと雖猶男閥とも云ふべき弱い者イヂメの閥族の存するあり女性を物品視し即ち一個の玩弄物とし醜猥厭ふべく黄金只是崇拝する無情の卑劣漢に贈與して顧るに玲瓏玉の如き淑女も終生愁眉を開くの時なし殷鑑遠からず「れのぶ源次郎」事件の如き其一なり世の輕薄男子の筆に成れる新紙の記事に就て一見せよ一の面白き事實として冷笑的に報道するに過ざるに非ずや玆に於てか我等同志のもの堅く相團結し女性のため二千萬人の姉妹のため犠牲となりて大々的公開演説會を開き天下有識の士に訴へんと欲す同意同感の女性諸君來て我等の壯擧を賛成せよ追て有志の女性諸君は記名捺印の上本郷湯島四の三湯島館渡邊艶子へ宛て一報ありたし發起人を諾せられし女醫諸君には丸茂先生夫人、伴治子、間宮八重子、高橋瑞子、鷲山彌生、天田鶴子外數君

かく記したれども、丸茂夫人、天田鶴子等は、さる承諾をせしことなしとぞ。

●老勇　信州、木曾の山中に、年六十になりながら、二十三歳になれる女子をめとりて、一子を擧げたり。なは、いよ〳〵子を設けんとすといふ。勇しき翁かな。

●女生徒の日射病　にかゝりて倒れたるがありといふは、靜岡縣下の一小學校なり。しかも体操中なりとは、教師の不注意も甚しといふべし。体操は、儀式にもあるまじきに、

●發育の最盛期　米國の人類學者、ボアス氏は、説をなしていはく、およそ、小兒の成長、最、盛なるは、男子は、十一歳より十五歳までの間、女子は、九歳より十三歳までの間なり。さてこの間は、精神上の發達も、共に迅速なれど兩者の活動も盛なるべし。故に、肉体的榮養物と、精神的滋養と、ともに、充分に、供給せざるべからず。さるを世人は、この時、肉体榮養の必要を知れども、未、精神的滋養を要すべき知らず。この成長期に、學校にて、學科の負擔を輕減せんとするものさへあるは、大なる誤謬なりといへり。講究すべき事實なり。

●癩病患者新治療法　醫學士木村乙吉氏は、醫科大學校卒業の後海外に遊びて、古來、不治の症として、さじを投げたりし癩病患者の治療法を研究し、歸朝後も、その治療法に、苦辛慘澹せしが遂に、癩病には、バチルスのあることを發見し、其療法を試みしに、啻に、遺傳病のみにあらずして、激烈なる傳染病なる事を確め得たり。これより傳染病研究所、及び、内務省衛生局の問題となり、今其研究中なるが、木村學士は、本所區横網町一丁目に、癩病專門の病院を開設して、專ら該病の治療に從事し、傳染病研究所、大學醫院等にありて、久しく治療の効なかりし患者をも、細菌滅殺の注入法を施し、其實効を奏せしと云ふ。斯道の一進歩と云ふべし。

●牛肉のたくはへ方　夏の最中に、牛肉を永く貯へんには、まづよく煮て肉の表面に、蛋白質を凝結せしむべし。これ他物の浸入を防がんが爲なり。さて後、瓶に容れて、豚の脂の溶したるを注ぐべし。かくして、貯へおき、上方より漸、とり出でゝ喫するを得べく、その豚脂は、幾度となく用ゐるを得べしといふ。この方

法は、殺菌の効あるが故に、また防腐に効あること大なりと、英字雑誌に見ゑたり。

●輕便携帶食料　といふを、このごろ、加奈太バンクバーにて盛に販賣すといふ。こは、カナダ領クロンダイクといふ地に金鑛を見出せしより、こゝに遠征を試むるもの多く、隨ひて、食料を携帶するに、輕便を要するよりなりとぞ。同地領事、これが中の勝れたるもの三しなを撰り、說明書をも添へて、おこせり。その說明書なりといへるは、

一ラモント氏結晶雞卵　一斤鑵入一弗十五仙
黄色にして粗粉狀を呈せり用法は茶匙一杯に冷水又は微溫湯(熱湯を用ふべからず)二杯を加へ攪亂溶解せしむべし能く溶解したる後ち暫時放置すれば更に佳なり然る後ち生卵を料理すると同樣に如何なる目的にも使用するを得べし結晶雞卵茶匙一杯冷水二杯は其分量效能生卵一個に均しき割合なり一斤は生卵四打即ち四十八個に同じ

右はラモント氏が父の代より苦心して發明せる所にしてセントルイ市に設立せる器械は一日二萬打の雞卵を精製せり結晶雞卵を生卵に比し其便利なる點を擧ぐれば英一斤にて生卵四十八個の實用ありて運搬上非常の相違あること一なり腐損又は破壞の虞なきこと二なり而して其價格も生卵四十八個相當のものにして一弗十五仙とすれば當市にては生卵より廉價なり

二ホルリツクス氏粉固牛乳　一瓶五十仙
指頭大の扁平丸にして其用方は空腹を感ずるとき一丸又は二三丸を口中に投じ唾液に溶解して喫了すべきものなり此食品は牛乳及び穀類に含有する諸般の滋養分を極めて縮小極めて便利なる形狀に製造したるものにして人體の神經纖維及び筋骨等の養成に缺くべからざる諸要素を殘らず供給すべし其一瓶は壯者三食に充分なり

三ニーヴス粉製食品　一鑵四十仙

淡鼠色の粉製にして是亦骨肉養成の諸要素を含有し燥濕の害を受けず且運搬に便なるを以て濠洲及び南亞非利加の金鑛地方にて手廣く需用せらるゝものなり用方は食卓匙二杯を冷水にて煉り交せ熱湯三合を加へ之を攪交ぜながら五六分間徐々に煮沸すべし熱湯の代りに牛乳及び熱湯の混合物を用ひ更に砂糖を加ふるも可なり右の如くするときは小兒若くは病人の滋養として尤も適當なりと云ふ

●食用米の不足　一人一日の食料米平均三合とすれど、一年一石一斗弱を要する割合なり。假に、全國の人口を四千萬として、一ヶ年の食米、四千四百萬石を要すべし。尚は、酒其他副食物に使用する高も頗る夥多し。今、我國既往十年間の收獲高を見れど、最も豐年たりし廿三年すら、四千三百萬石、最も少なき昨年は、三千三百萬石にして、平均三千八百萬石に過ぎず、去れど昨年の不作を受けて、本年米價の騰貴せるも決して偶然にあらずといへる人あり。

●新民法の誤解　これは、京都高等女學校の卒業生、何のさとといへるが、新民法を誤解して、所夫は妻を養ふの義務あり、妻も、所夫を養ふ義務あり、されど男女同權なりなど途方も無きことを言ひ張り、遂に、夫婦爭をはじめたりといふ。とかく爭なからしめん爲の法令なるを、かくては、ちらうへなり。可笑。

●外人養子入夫法　去し十一日左の公布あり。これも、強ひて、外國人を養子、又は、入夫せしめよといふにはあらず。いふも更ながら、前項の如く誤解するものなきにしもあらざるべけれぞゆふなり。

法律第二十一號

明治六年第百三號布告左の通改正す

第一條　日本人が外國人を養子又は入夫と爲すには內務大臣の許可を得ることを要す

第二條　內務大臣は外國人が左の條件を具備するに非ざれば前條の許可を與ふることを得ず。

一　引續き一年以上日本に住所又は居所を有すること

二　品行端正なること

●新戸籍法の實施　民法の實施と共に新戸籍法も亦

去る十六日より實施せらる。

●看護婦講習生募集　東京帝國大學醫科大學醫院に於ては、從來看病法講習規則の設ありて、看病婦を養成し來りしが、こたび、更に高等看病法講習規則を設けて、左の如く講習生を募集せり。

本院に於て高等看病法講習生左の通募集す志願に者して東京府下に居住の者は願書に學業履歴書を添へ來る八月二十五日までに本院に願出べく其他の地方に住居のものは該地方廳に就き出願方承合すべし、但規則書を閲覽せんとするものは本院事務室に申出交付を受くべし

明治三十一年七月　東京本郷區元富士町

東京帝國大學醫科大學附屬醫院

人員二十人　年齡二十三年以上三十年以下

試驗科目

一讀書　漢字交り文講讀　二作文　往復文、記事文

三地理　日本地理の大要　四歷史　日本歷史の大要

五理科　動物、植物、物理、化學の大要　六筆算　加減乘除、分數小數、比例、

七體格

講習生たるを得べきものは讀書作文地理歷史理科等の各學科に付高等女學校第四學年の課程を卒りたるものと概ね同等以上の學力あるを要する事講習生は在學中醫院内に寄宿せしめ食料衣服及若干の日給を給する事修業年限は二ヶ年にして卒業後四ヶ年間は金十五圓乃至三十五圓の月給を以て同院の看護婦長に勤務するの義務あること

●新刊しなさだめ

○彰善會誌　彰善會本部發行　かの彰善會の機關なり、去し六月すでに、第四號を發行せり。通篇善行美事を滿載して、實に得難き叢誌なり。なほいよ〳〵その隆盛ならんことを祈る。

○神器考證　完　栗田先生著　國學院發行

世界萬邦に比類なき、わが大御國の天つ日つぎの御璽とまします三種の神器の由來を考證詳說し、この御正体は、伊勢熱田の兩神宮にましませども、かの崇神天皇の御代に鑄かへ奉られし、鏡劒、一は、天德の災にかゝらせ給ひ、一は、壽永の亂に、海底に沈みおはしまして、大御許には、大御神の授けたまひし曲玉のみのこらせ給ひ、二つ

はかけてたはしませぬ、今の大御世に、むかしの崇神天皇にならはせ給ひて、鏡劔を摸造せさせ給ふべしといふを一篇の主旨とせられたり。篇中いとめづらしき例證もあり、且附録として、神器の諸説をあつめて、一々之を辨せられたり。實に、當代に得がたき著述なり。（價金二十錢）

○抱甕文庫　第一篇　菊之舍女史譯　哲學書院發賣

こは、呉中抱甕が編輯せしを、今、菊の屋女史が翻譯せしものなり。もと短篇支那小説にして、この編には、李謫仙と蘇小妹とを載せたり。趣向等は、翻譯ものなれど、いはず。文は、まづよけれども、練らで、なほよきものとならん。自序まで小説めきたるは、くせなるべし。猶序文中、われはがほの見ゆるは、かへりて、けだかゝらず。不折氏がさしゑ、なかなかによし。（價金二十五錢）

○文章　第一號　益友社發行（定價七錢）

一小雜誌なり。欄を、文話、文疵、史傳、譯文、文材の五に分ちて、まづ、名の文章を論じたるものともいふべし。和文よりは、寧、漢文にかたむけり。文材にも、多くは、日本の漢文家のものを取れり。見るべきものすくなからず。

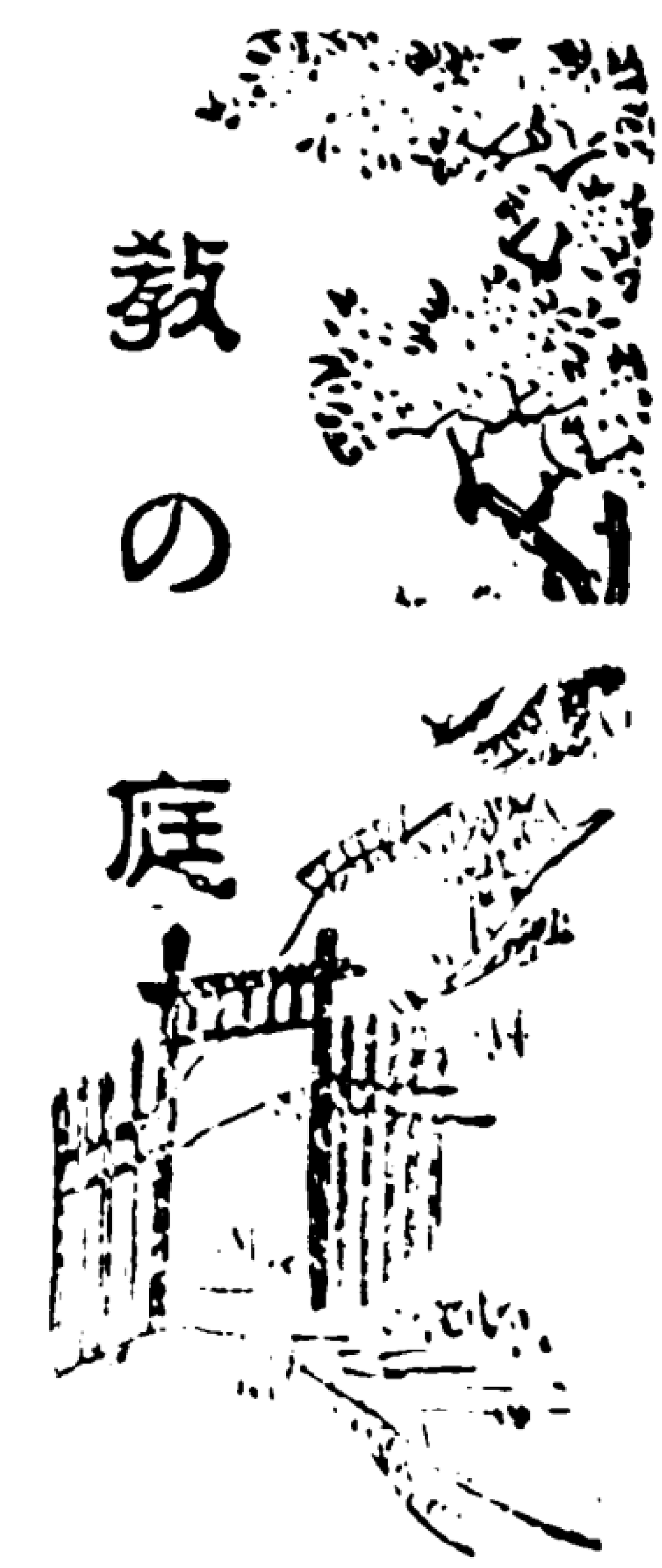
●女鑑歌文月並兼題

| | | | |
|---|---|---|---|
| 八月　五日 | 歌……百合花 | 文……瀧の畵を見て | 七月廿五日〆切 |
| 八月　廿日 | 歌……朋友 | 文……山遊び | 八月　十日〆切 |
| 九月　五日 | 歌……海邊月 | 文……琴を聞く | 八月廿五日〆切 |
| 九月　廿日 | 歌……茸狩 | 文……快樂 | 九月　十日〆切 |

歌文原稿は必ず〆切期日迄に本社に到着する樣送らるべし。遲れたるはすべて沒書とす。

◎宛名は國光社女鑑編輯部とせらるべし。

◎投稿歌文中より天地人の三才を撰り。天に該號の女鑑三部。地に仝二部。人に仝一部を贈呈す。又他に秀逸を撰む。



# 教の庭

## 七月廿日兼題　新田義貞公

天

君しはし越路のゆきと消えさらは
　よし野の春も見るへかりしを　伊豫國宇和島　竹村竹里子

地

なけ入れしこかねの太刀の光より
　御代もむかしにたち歸りけむ　千葉縣安房郡野田村沓見　三幣　みさを子

人

越路なる雪ときえすはみよし野も
　はなのみやこと君はなさまし　肥後國飽託郡櫻手村　仁保しま子

秀逸（十五首）

あたら身は露ときえてもわすは山
　香はしき名は千代もくちせじ　肥後　堤　彬子

和田津みのうけひく潮に君を思ふ
　深きまことをあらはれにけり　三河　永井さい子

藤島のつゆときえてもきみかため
　たてしいさをのしるくもある哉　出雲　山根　久子

わたつみの神のみたまも動くまで
　つるきにこめし君か眞こころ　肥後　徳永萬壽子

もののふのたけき心は相摸のうみ
　沈めしたちの名にそかゝやく　肥後　小森田輝子

はく太刀を神にさゝけて祈りつる
　まことはなみの上に見えけり　常陸　萩原　章子

君さはし露ときえすはみよしのゝ
　吉野の花も咲かましものを　東京　遠藤良久子

渡津海の神もうけゝんはく太刀を
　さゝけていのる君かこゝろを　韓國　三好梨花子

みよし野の花のにしきも色あせぬ
　こしちに雪ときみちりしより　伊豫　宇高まつ子

みよし野の春をもまたてみ越路の
　ゆきときえにし君そかなしき　伊豫　美濃　君子

たまはりし大御言の葉みにそへて
　國のみたてとなりしきみかな　豐後　鶉濃喜代子

み吉野の春も見すしてはる〴〵と
　こし路にきえし君そかなしき　東京　中桐　杏子

神つ代の潮ひるくにに御はかせを
　かへていさをを立てし君かも　東京　諸井くら子

つるきたち和田つ御神に捧けつる
　君かこゝろの深くもあるかな　東京　池谷とみ子

み吉野の花さくはるにあひもせて
こしちにきえし君そはかなき　大阪　高橋かね子

（以下原稿到着順）

君がためつくすまことのつらぬきて
しほひにけりないなむらがさき　石井豐子

君がためこゝろつくしをそらだきの
香にとゞめたるみこし路のそら　濱口氏子

滿つ潮に太刀をしづめし眞こゝろを
かみもめでけんいなむらがさき　野口信子

おほ君のためにしづめしみつるきの
ひかりはよゝにかゝやきにけり　佐山茂子

背むきをかりけんつみをたゞさゞる
ひろきこゝろぞ世にたぐひなき　佐々有隣子

藤島のかみのいがきのいやたかき
勳功たたへぬひとはあらしな　佐々小琴子

つるき太刀しつめしうみの底よりも
ふかきはきみがいさをなりけり　田代艷子

わたつみの神にいのりてつるき太刀
しつめしいさをいまもくちせし　田代綾子

海神に太刀をさゝけしこゝろこそ
くもゐにたかくあらはれにけれ　浦井豐子

藤しまにはてゝしくきみかさをしは
千代のかゝみとかゝやきにけり　中山さみ子

かくはしき名こそたかけれ君が身は
ふちしまの野のつゆときゆれと　山内蕗子

わたつ海のさかまく波はをさめても
やまのあらしはすへなかりけん　横山柳子

いのりつる君かまことをわたつみの
かみもあはれとみそなはしけん　長松かれ子

立はなにたちもおくれぬものゝふの
こゝろのにほひたかくもあるか　德永廣子

國のためよりくろしほをひかせてし
いさをは世々にたかくもあるかな　富士村幾子

あきかけてたのみしものも新かりの
小田のわかなへかれにけるかな　島山千代子

海神にさゝけし太刀のひかりこそ
なかれての世にてりまさるなれ　中澤千野子

君のためくにのためとてみこしちの
ゆきと消えつるきみそかなしき　寺内うめ子

みよしのゝみやこの花をよそに見て
きえしこしちのつゆそはかなき　遠藤雪子

みたれたる世はいかにせむ埋木の
いまそはなさくふちしまのかみ　荇栖屋てる子

藤しまにきえにしきみはいまもなほ
よし野のやまをゆめに見るらん　森志げ子

みこしちのあすはの城に身はきえて
のこしゝものはほまれなりけり　橋本さよ子

よしあしにさためもあへす放つ矢に
あたりてをしきふちしまのかみ　小杉みや子

藤しまのつゆときえにしこのきみの
いさをもいまにかゝやきにけり　前田たけ子

みつるきをうみにさゝけしこの君の
いさをは今もかくれさりけり　佐々木はつ子

君かため消えにしたまはふちしまの
やしろのうちに世をまもるらん　所佐以子

月さゆるいなむらさきのいさをこそ
いくよ朽ちせぬほまれなるらん　内本道子

越路なるつゆと消ゆれとこのきみの
いさをは千代にかくはしきかな
牛込の　よき子

さゝけもつ太刀より君かまこゝろを
かみやうけゝむいなむらかさき
林　環子

身をすてゝのころほまれは我か國の
史ににほへるはなとなりけり
岡里富子

あたのためこしちの雪ときゆれとも
かほるはきみか名にこそありけれ
山田瑋子

しきしまのやまとこゝろの花なれや
あすはのさとにちりしさくらは
秋葉せい子

おほきみを思ふこゝろのひとすちに
ふちしまの野にきゑしきみかな
秋葉榮子

ますらをもわたしかねたるみつ潮を
ふかきこゝろにきみいのりけん
西　艶子

君かためをしむいのちもしらつゆの
消ゑゆくこゝろいかにあるらん
野村わか子

みよしのゝおくやまふかくおほ君を
まもりしきみかいさをゆかしも
北島功子

いまもなほふかくそ慕ふおほきみの
みためにたてしきみのいさをゝ
北島操子

みをつくし盡すまことのあらはれて
しほもひにけんいなむらかさき
大坪修子

よしのやま花にわかれてみこし路に
ゆきとちる身そあはれなりける
由井浪子

おほみこと深くかふとにいたゝきて
いのちを捨てしきみそたふとき
齋藤千子

おほきみの御爲となりて身をすてし
きみそみくにのかゝみなりける
林　瑟子

敵なりしこゝろかへりてすめらきに
綿野りき子

つくしまつれるきみそたふとき

みやしろをおろかみてこそいさゝ猶
きみかいさをのたかきをはしれ
田中廣子

君の爲め散りしむかしのしのはれて
につたのさとの名そかくはしき
高橋保子

みはこしの雪ときゑてもきよきその
あさしたはろきゝみそたふとき
近藤よし子

分けわひしあさをなさゝめてゆきふかき
こしちにきゑしきみそかなしき
白石梅子

きみをおもふゝかきこゝろに汐の干て
あさせとなりぬいなむらかさき
長谷川まつゑ子

みよし野の花のにしきを身におひて
こし路のゆきとちりしきみかな
由井すみ子

散りぬれとそのむらさきのうへなしと
よにあふかるゝふちしまのかみ
仲田榮子

君かためつくすこゝろのにしきより
よしのゝはなをしたひたりけむ
仲田まけ子

君を思ふこゝろのいろもうへそなき
こきむらさきのふちしまのかみ
濱　さみ子

みゝつからかゝしたひましおほみ齋
たれかはねたるきみならすして
野中あさ子

あはれ身は越路のゆきときゆれとも
いさをは千代にうもれさりけり
二宮春枝子

はかなくも身はちりぬれと君の名は
いまなほにほふゝちしまのみや
日野政代子

君を思ふそのまことをわたつみの
かみやうけゝむいなむらかさき
眞島千鶴子

藤しまのつゆと消ゑてもまもるらん
むらさきにほふこゝの重のそら
笹子茂子

むらさきのゆかたはよしや薄くさも
みさをは千代ににほふふちしま
新藤貞子

こしちなる月にはなきてみよしのゝ
はなみぬかりのこゝろかなしも
佐々敏子

緒をしめしかふさにのこるたき物の
かくはしき名のゝこるきみかな
吾妻ちか子

海にますかみのこゝろをいさめつゝ
なみざへおきにひかしつるきみ
箱脇ます子

藤しまのふちのかつらのなかき世に
くちせぬきみのいさをかしこし
松原りう子

きみのためいのるを神もあはれみて
よるあたなみをたちへたてけん
湊谷恭子

いのりつるこゝろの底はゆふしほの
ひきけるうへにあらはれにけり
湊谷いく子

よしの山みやしきませさかしこみて
こしちのつゆさきゆるはかなる
大谷友子

はかなくも夢をたのみてあすはかは
なみたのふちに身をしつめけん
廣田さめ子

おほきみのかためさなりし新田やま
たかきいさをは千代もくちせし
澤田やゑを子

さきならて潮もひきけりつるき太刀
身をもすてたるきみかこゝろに
林あさ子

君かためつくすまこゝろみねすきて
千ひろのうみもしほをひきけん
福田直榮子

君かためつくすこゝろのわたつみの
かみにさゝきてしほのひにけん
井上梶子

君かためいのるまことをわたつみの
かみもうけひくいなむらかさき
羽田三緒子

君がためみはふちしまのしらつゆさ
種田歌子

きねてものころかくはしきなは

わたつみに沈めし太刀は朽ちぬさも
さゝめしきみか名は朽ちめやは
目黒さき子

わたつ海に御太刀しつめて國のため
いのるまことのこゝろふかしも
福原菫子

大きみをおもひこしちのゆきさしも
きゆれさきねじかくはしき名は
神野ひさ子

君かためよのさかなみをしつめむさ
こめしこゝろはしほもひにけん
加藤さく子

國のためきみかいのけにしうしほゝさ
ほまれはのこゝるいなむらのさき
佐久間八重子

いなむらのはまへによする白なみに
しらぬむかしもしのはるゝかな
會田あさ子

君をおもふそのまこゝろは稲むらか
さきのしほひにあらはれにけり
金森俊子

和田つみの神やふかくもうけつらん
太刀をしつめていのるまことを
四元照子

和田津海の神にさゝけし太刀にこそ
きみかまことはこもりたりけれ
日高かず子

御よしのゝ花ちらさじさこしちなる
ゆきのきたかせふせきぬるかな
濱口ひろ子

わたつみに祈るまことはかくまてに
うけひきにけんいなむらかさき
安孫子かづ子

よしや君こしちのゆきさきいぬれさ
つもりてたかきいさをなりけり
吉川鶴子

みやこ出てこしちの雪さきねし身の
名は八千代ていちしろきかな
田中みつ子

すへらきの御言かしこみたまの緒に
かけてそみかくゝにのひかりを
成廣あさ子

君のためたてしいさを〻あふくかな　いくすゑかけてひとのかゞみと　湯淺うの子

きみがためこしぢの雪ときはてし　いさをたふときふちしまのみや　名取正代子

あれまさる海につるぎをしつめてそ　たかきその名をよになかしける　服部かつみ子

君のためすてしいのちのくちやらて　なさへゆかしきふちしまのかみ　坂井みつぎ子

はかなくも越路のゆききえしかと　のこるその名は千代につきせし　高石さ代子

おほ君の御たてとなりてしほひかた　いのるこゝろをかみやうけゝむ　藤澤萩子

くすのきとならひたちたる松の木も　つひにこしちにかれにけるかな　逸名

つくしけん新田のおみのまごゝろは　そのすゑながくあらはれにけり　林稚枝子

大きみにつくすまことはうなしほの　ひかたとなりて世にしられけり　友永章子

君がためいのるこゝろはいなむらの　ひかたのうへにのこりけるかな　村崎包子

いのりては汐のひかたにあらはれし　ひかりはきみがほまれなりけり　黑田明子

かりそめの君がなさけのことのはに　もとめつかにそはなはさきける　山田介子

君がためいのれはかみもうけひきて　みちたるしほもひかたとそなる　虎口資子

ひと筋にいのるこゝろをわたつみの　かみもあはれときこしめしけん　下田龜子

## 七月廿日兼題

### 天　友人の病氣をその近親に報する文

千葉縣安房郡豐田村晉見　三幣みさを子

このほどは、あつさいやましに、嚴しうなりもてゆき、そのらうかはしさ、いはむかたなきを、いかに御座しますにか、妾も變りなう、學の業に、いそしみゐ侍れど、心安うおぼし給へや。さては、文子の君とは、親しきが中にも、いと親しくて、一日もあはでは、え過すまじう思ひわたりしを、この一日二日は、學校をも休み給へれど、いかなる障にかと、案じ煩ひゐたりしに、心地そこなひ給ひて、門の外にも出て給はず、ときくよりいと胸つぶれて、取るものもとりあへず、訪ひまゐらせしに、心地よげなる常々の心にも似給はず、いとものうげに、少し風のけなりしが、はやよきかたに向ひたれど、今一日も過ぎなど、學校にもいでらるべしなど、の給へど、つく〴〵、その息つかひ、さては面もちなど、見まゐらするに、常の風のけとはやう變りて、いと心もとなう覺ゆれど、四方山の面白き話などきこえわげ、心を慰めたれど、目のあたり見まゐらせては、心も心ならず、このまゝに見すぐさむもはいなし、さりとて、御身みづからの、さぞかりおぼしめさぬを、さし出がましく申上げむも、いかゞなれど、後の悔ありてはとて、かくはおとづれまゐらするにな

む。あなかしこ。

地

東京四谷區左門町廿八番地　河野まさ子

梅雨の頃とはいへ、とかく雨がちにて、不順の氣候に候へども、御さはりもましまさず候や、さて花子様御事、いつも〳〵御すこやかに、まなびせられしに、さきのほどより、風邪のきみにて、常々、御ねつしんの御事なれは、さまで御心にも掛けられず、日夜御勉強遊ばされしに、さる日曜日よりたへたまはでや、遂にやまひの床につかせられ候、くすしの君のねんごろなる治療と、附添ひたまへる方〳〵の、まめやかなる御みとりとにて、やがては御こゝろようならせらるべき事と存じ候へども、熱も三十九度くらゐにて、打ちつゞき、かろき御いたつきとも見うけまつりがたく存ぜられ候へば、右御知らせ申上げ候、御委しうはあひまつらん折と、かきのこし申し候、かしこ。

人

芝區三田豊岡町六十三番地　山中菊野子

前畧、兼て何々女學校に御寄宿の何子様御事、此ほどより少々脚氣の御氣味なりしが、さしたる御事ならずとて、打すて置かれし處、昨日より御病勢俄にすゝみ、動悸はげしく、御手足強くしびれ、一歩も歩行かなはず、何事も人手をわつらはし候ほどにならせられ、御本人はすぐ病院へは入院遊ばされたきやう仰せられ候へど、校主の君いと御志ふかく、遠く他郷に御遊學の御身にて、病にふし給ひては、たゞふるさとの御父母の御上のみ戀しう思召され候ものなるを、知る人なき病院にひとり居たまはゞ、いとゞ御心細からむとて、看護婦をやとひ、校主の君爲夢御ねむころに御さしづ相成り、御手當には遺憾これなく、私も及ぶかぎり御みとりいたし居り候、只今の御容体にては、決して御危篤など申すにはあらずと、醫師は申され候へど、輕からぬ御病狀に候まゝ、何時いかなる御變あり候かも計りがたく、申上げなど、日頃何子様を特に御愛し遊ばされ候祖母様、いかばかりか御心配遊ばし候はんとは存じ候へど、申上げずにやむべきにあらねば取りあへず御知らせ申上候、校主の君よりも、さだめて御申しこしあるべしとは存じ候へど、まづわたくしよりあら〳〵申し上げ候、かしこ。

(以下原稿到着順)

輕部露子

先日岩間の婦人會にて、君を初め神坂の親友と久々の拜顔を得たれど、積り居る御咄もつくし得ず、とかくする內、歸の時間とは相成り惜しき袖を別ち、夢の如くに今日迄打過ぎ、明日は茶湯の復習せんとて、案內がてら神坂の君の許へ參り見れば、驚くべき大病にてありければ長く咄しては如何と存じ、只挨拶のみにて矢の如くに立歸りたりよりて、このよし御許へ拙なき筆にて御知らせ申候、あら〳〵。

中山富子

昨日今日の暑さ一しほいみしう候を、皆々様御さはりもなうしのがせ給ふ御事と、遙に推しまつるになん。扨そつじに申上げ御氣遣ひ嘸かし

とは存しながら、御報致さぬもいかゞかと、一言申上げ置き候、さてもお姪子、民子の君、此程よりいたづきの床になやまされ給ひしに、昨日くすしの御診さつによれば、急性肋膜炎とのたまひしに、いと心元なく、熱度も三十八九度に達し、おそろしき樣子に見えいとゞ御心細うおほすらんとは思ひながらいかにせん御國元も程遠く侍べれば、御出もむつかしくおはすならめど御伯母君樣にても一寸御出で下され給はゞ、さぞかし御心強く悦ばせ給ふらんと存じ候まゝ、取急ぎ御知らせまでに、一ふでかくなん、あなかしこ。

山内蔦子

一筆申上候、梅雨の候に御座候所兎角不順にて、何となう空いぶかしくやゝともすれば軒うつゝ玉水の音たゆまなく、いとうつたうしき此の頃を、如何すごさせ給ふらん、御前樣には、過日當地の別莊へ御こしあそばされ候由は、洩れてより承り居候へ共、彼是用事に取紛れ、誠に御ぶさた致し居候程、御ゆるし給はり度候、さて姪子樣敏子君には二三日前より少し風邪の氣味にて、御通學を御見合せ居られ候處、昨日より頭痛一しほはげしく、余程御難儀と見受られ候まゝ、早速醫師村上に診察をうけ候處、同人の言には、左程大病とも申されず候へ共、兎角御留學中の事とて、御本人が御心配あそさるろゆゑ、昨日國元へも私より御通知は致し置き候へ共、何分遠國の事故、御道中にも二三日は要せらるゝ事と存候間、其内御病人の御氣なぐさめに、折々御尋ね下さらば御本人のよろこびもさこそと察し入り候故、一寸御近きにまかせ御通知申上候かしこ。

森しげ子

おひ〳〵、熱さいやまし候折柄、御叔母上樣には、いつもながら、御壯健におはしまし候由、實に喜ばしき限りにこそ。妾義も、唯だ勉學致居候のみにて、何事も變りし事は、御座なく候まゝ、御安心被下度候、さて御叔母上樣には、御存知被遊候へ共、妾がならびなき友なるみき子樣事七日程以前より、御熱さあたりの御模樣にて、ふと、病の床に、臥し給ひ候ひしが、其が原因にて、只今以て、床をはなれさせ給はず、最早醫師は、申すまでも無之、これぞと云ふ、よき事は、さま〴〵になし及はずながら妾も、御看病致し、一日もとく、御快方に、赴かせらるる樣祈り居り候ひしかど、何れも其の甲斐のなきのみか、病は益々、重りゆく御樣子ゆゑ實にいたはしく存じあげ、ひとり心配致居り候折柄ふと心に浮び候ひしは、若しも、御叔母上樣に、此事御相談仕り、候はゞ又よき、こともあらんか、其上にて、何事も、なさんこそ、よけれと、心附き候まゝ、御叔母上樣には、御氣の毒樣には侍れども、友だちのため又は、妾のため、何とぞ、御力を、御添へ下され候樣に、願上候なほ委しきことは、御目もじの上にて、申上ぐべく、先は拙なき筆もて、御知らせ旁々、御ねがひまで、斯くの如くに御座候あら〳〵かしこ。

浦井豊子

時分ながら、此頃はあつさ殊に烈しく御座候處、御一同樣御揃ひ被遊、御障りも無之御暮しの由承り、陰ながらうれしう存じ上候、次に、妾事事なく勉學致居候まゝ、乍他事御心やすく思召被下度候、扨て雪子樣御事、常々は誠に御すこやかにお在しまし、一日とて學びの庭に手をたづさへぬ事も無之候ひしに、當月始つ方より、少々御中分出來致し、いさ御案じ申居候處、日頃の御性何事も輕やかなる御方に候へば、只だ打笑ひ給ひて、何程の事にもあらず、今一兩日もすぎなば、癒えなんと、事ともなし給はぬものから、ひたすら御本復を祈りつゝ、心ならずも日を送り申居候處、二三日以前より、御けしき殊にあしく、動氣高ぶりて、御息つかひさへ苦しげに見え給ふに、痛く打驚きて、直ちに醫師を招き診察を乞ひ申候處、こは輕症の心臟病なれば、今の内に、靜かに保養なし給はゞ、御平癒も遠かるまじと申候、依て此まゝ斯の地に御保養なされ候ては、學の海の波風の音、朝な夕なに聞えて、御心のみさゞろき給はゞ、御病も徒に重りゆく斗りなればとく御國に歸り給ひてしづかに御養生なし給はずやと、さま〴〵に慰めつ勸めつ致し候へ共、更に御きゝ入れなされ候御樣子も見えず、幾十里へだゝりたる知り人なき遠地の事に候へば、誰とて力と頼む人も無之、只だ〳〵日夜心のみ痛め居候、依て御兩親樣に直接に御知らせ申上げんかとも存じ候ひしかど、餘り

だしぬけにかゝる事申上け候ては、如何斗りか御驚きなされ候事ならんと、御察し申され候て、いと胸苦しく、さりとて打すて置くべき事にも無之候へば、色々相考へ候末、あなた樣へ御報知申上候次第に有之候、依て御兩親樣へは、深く御案じなされぬ樣、あなた樣より能く〳〵御話し有之候て、一日も早く御歸國御養生なされ候樣、御取斗らひ被下度、あまり困じ候まゝ、つたなき筆にて如斯に御座候、かしこ。

本田鶴子

なめげながら文してきこえ上げまゐらせ候、先々御地皆々樣御揃あそばし、御機嫌よくゐさせられ候由、ほのかに承り、まことに〳〵御よろこび申上候、さて當地なる何子の君には、其後御いそしみなのめならず、ひれもすもの學びのわざに御心つくされその御いさをかくれやらずこたびの試驗には、六十人のかず多き中に第一の席をしめられ、君の御喜びはたとへがたく、御供いたして都へものぼりしより、かた時も御そばはなれし事なき妾なれば、さりわきうれしさ限りなく思ひ居り候折から、御つかれや出でけん、この兩三日御心地なやましう、熱さへあらせられ候やうおぼえ候まゝ、某醫師の來診をこひしに、さしたる事にはあられども、腦を御いためあそばしたるとの御事にて、及ばずながら御伽申上居り候、しかしかならず〳〵御あんじ遊ばさるまじく候、醫師も、くれ〳〵さしたる事にてはなく、只御心のつかひ過しよりとの事故、今しばし御保養あそばされ候はゞ、ほどなく御快復あそばされ候はん、返す〳〵も御心なやまし給はぬ樣、願上候、先は右御知らせ申上度早々。

仁瓶邦子

拙なき筆以てしめし參らせ候、其後は久々御無音に打過き候處、御許樣始め御一同樣、御機嫌よく、居らせられ候哉伺上げ候次に私方にても、無事に罷在り候まゝ、憚りながら御安神下されたく候、さて、何子樣にして久しく御音信御座なく候ひしにより昨日御樣子御伺ひ申上げ候處、先頃より御病氣にて打臥し遊ばされ、專一に御療生相加へさせられ候へ共、未だ御快方に赴き遊ばされず候由、誠に御案じ申上げ候、依て遅々ながら此事、亂筆を以て一寸御報知申上候、時節柄御身御大切に御祈り申上候、あら〳〵かしこ。

渡井もと子

降りつゞきたる、五月雨の空も、名殘りなう晴れ渡りて、さみに加はる御暑さ、いと堪へかね申候、昨日今日、親しき君には如何、渡らせ給ふにか、みけしき、御伺ひ申したくなん。さて妾事、昨日知人の御物語りにより、梅子の君、先ツ頃より、御いたつきに、なやみ給ふ由承りぬれは、大に驚き、取りあへず、御枕邊、近う侍り、御容体、御伺ひ申しに、日頃御すこやかなりし彼の君も、御氣色おとろへ給ひ御兩親樣にも、いさう、みこゝろをいたませ給ひ、隨分御大病のやうに、御見受け申し侍りぬ、されば日頃御共に親はらからも、只ならぬ、水魚の御交りの姉君へも、はやう、御知らせ、まつらばやと、直に伏屋に歸り、みじかき筆をも、かへりみづ、かくなん、あなかしこ。

吉見靜野子

未だ御目にかゝり候ふしも御座なく、失禮ながら一寸申上候、扨御めい子あや子樣、去にし年當校へ御入學以來、誠に御厚情を蒙り、水魚も及ばぬ交りを結び、日頃姉君とも賴み居り候ひしを、先ツ頃より風の心地とのたまひ、御欠席相成候まゝ、程へ候ゆゑ、雨のあしたも、雪の夜も、學びの業にいそしみ給ひし君なれはいかなるいたつきならんと、さぞやもどかしう思ひ給ふらんと思ひ、いさゝか御心なぐさめにもと伺ひ候處、大に喜ばれ、きのふまでは、さしたる事もなかりしを、醫師のくすりもきゝめなきか、けふはいと苦しく、たゞふるさとの空なつかしけれど、如何せん八への海山隔つる處なれば、知らせたりとて徒らに御心わつらはすのみ、されど幸に近き里に我が叔母あれば、何卒知らせくれとのたまはれ候、妾のごとき常の身ながら、ふるさとそこひしきを、ましてと思ひ、一寸御知らせ申上げ候、御病氣はいたくおん心づかひには、及ばず候へ共、何分御兩親遠く、はなれ居給ふ身の何かと、御心細く、御不自由と御察し申上げ候、若しあなた樣にても

一度お見舞下さる樣之事あらば、そがため長き日數の、おなやみもわすれ給ふ事あらんかと存ぜられ候、先はお知らせまで、かしこ。

田中廣子

年毎の例とは云ひ、都は殊に暑氣烈しく、いづれも堪へなねばかり身にしみて覺ゆれば、校內十中八九の人々は暑中休日をのみ待ち渡り妾等も、とく其期を得て家に歸らんと、いづれも樂みあひ、誰樣には、殊に學業怠りなかりしに、ふと兩三日前より御熱氣發し、御氣分すぐれさせ給はねと、のたまひて、學校も一日欠席し給ひし故、妾も打おどろき、さらば一刻も早う、醫師に、しんさつを乞ひて、治療し給ひてはと、進め參らせしかど、露御用ひなきにさては、常に、いみじう御健康に渡らせ給へばまた格別の御容體にもおはせざるならんと、妾の心も、やうやう、しづまりて、一日二日と過ぎ來しに、又も昨日は御熱度の高まりしに、再度打おどろき、今はしばしも、ゆうよ、ならずと、思ひ立ち、早速醫師を招きて、しんさつを乞ひしに、全く暑氣あたりと、はんぜん、せしかば、直に其の治療法を施し、お養生專一に務めさせ給ひしかば、今日はよほどお快氣に趣き、食事も少しは進ませ給ふ樣ならせられたれど一時中々のお容體におはせしかば、まだ書物のお覽などは思ひもよらぬ程なれど、日ならずお全快し給ふらんと存じ侍れば、お心配せさせ給はぬ樣、吳々も願ひ上け奉るになん、實は今少し早うお報知申上ぐべきなれど、誰樣には、さきたるお病氣とのみ信じ居させ給ふに、父母君へお知らせ申さんと聞きなば、いかに、み心弱うおぼすらん、さればとて、妾ひとり、かしづき參らせむも、心もとなう覺ゆれば、いかがはせんと、千々に心を思ひめぐらし、はらからも及ばね、なからひの君に、若しも此の上重らせ給ふ樣の事ありては、他鄕にありて如何ならむと、深う思へば、何となう心細く、覺ゆれば、何卒都合にて、お兩親樣いづれかおこし下さらば、いと、うれしこそ。先は拙き筆もてお報知申上候あなかしこ。

長谷川はる子

歲月は、人をまたずとかや、私共いぬる年やよひの末つ方、お地を離れまゐらせしより、數ふればはや一とせあまり五月、と相成り申候、其後おちよ樣始め、私事も、おかげにて何の障もなく、日々學の庭に通ひ居候處、おちよ樣には、去にし月の中頃より、とき〴〵いささか胸のいたみを覺ゆとのお話これあり候ひき、されども、差したる事もなからんとて、日々出席せられ居候、さるに、去にし三日の夜十一時頃、俄に痛み強く、其上熱さへ、いとどはげしければ、いそぎ醫師を迎へ、診察を乞ひ申候處、こはまたく時候さはりなれば、別に氣づかふべき事はあらずとて、直に藥など、調ぜられ申候、其あくる日、少々熱は減じ候へども、何分胸の痛み少しもやまず候間其由醫師の許へ申通じ、重ねて來診を、こひしに、なほ、曰ひけらく、こは氣候さはりにいささか胸膜の炎の加はりたるやうなれど、いと輕きたちにて、かつは其病の初期なれば、十分に加護せられなば、日ならず、全快せむとの事にてお座候、ひき、それよりは、ひたすら、醫の言葉に從ひ十分養生せられ居り候ところ、今日に至りては、餘程こころよく、なられ申候、此樣子にては、今一二週間の後は、全く快くなるべし、との、醫師の話に御座候されば、御本人も大に御喜びなされ居り候、ついては、最早暑中やすみも相近づき候まま、其節は、是非御歸鄕なされ、久しぶりに、御兩親さまはじめ、皆々樣に、御目にかかるべければ、此度の病は、許へは、知らせまゐらせぬやうとの御言の葉にて御座候きされども、愚なる我考にては、如何にかるくとも、重かるべき病にかかり給へる事なれば、こは一應御知らせ申上げん方、よろしからむと存じ候間、取りこして、かくはお知らせ申上げ候、されど、何分にも右申すゝ如きお樣子なれば、ゆめ〳〵お心配下さるまじく、且又幸に學校も、先日試驗終りたれば、此頃は欠席すとも、いささか、さはりなきときに候まゝ、おちよ樣は、もとより、私とても、お同樣休校致居り候、尙程近きあたりの、いと〳〵やさしき老婆をも、たのみ、兩人にて及ぶかぎり、お介抱いたし居り候間、決してお心配下さるまじく、吳れ〴〵も、申しのべおき候あら〳〵かしこ。

佐々敏子

たへかぬるさにはあられど、日にましあつさのいやまりて、苦しう思ひはべり、さて朝な夕な起きふしな共にし、學びの道をたどりつゝある花子の君には、季候のうつり變りのためにや、さいつころよりみ顔色の變り給ひぬさ思ひしまもなく、お病のおこりてなやみ居たまひぬれば、いそきてくすしに見せまゐらせしに、心臟のやめるにて、重きにも至らぬべしさ仰せらるれば近きほどに、全く癒ゑ給ふべし、雲井のよそに物學びする身には、學びの業の忙がはしきまゝに、よろづ互に打忘れはべりしが、病み給へるに當りてあなた樣の事など思ひ出で語らひ申候されどけふ此頃は藥のしるしにや、余程心よく見ゑはべれば、必ずすく＼お心にかけさせられぬやう、願ひまゐらするになん、かしこ。

廣田さめ子

此の頃の暑さは、山里さ事かはり、家居立並ひ、往來の人さへしげゝれは、む地よき風など絶ねて吹きこすいさ＼堪へがたらなん。されば、何子樣できし頃より食事すませ給はず、今日昨日お手足などすこしふさやかに見うけられこれはすゝめ參らせて醫師の診察を受けられしに、脚氣病ゆゑ、早く轉地せられよさの事なり、就てはたゞ歸郷なすゝめ參らせれさ、お妹君には、學びの道人におくるゝが口をし、はた學中休も程なきまゝ、其師妾さゝもにさて、いなませ給へり、されど、此のゝいたづらに打すておかれなば、日に＼重らせ給はんさ、氣づかはしければ、こささらかくはしらせ參らするになん、かしこ。

牧野もせ子

差し急ぎ候へば、失禮ながら要用のみ申上げ候、藤瀬氏お息女、お心地例ならずさはかねてより承り居り候ひしも、妾事過ぎつる初夏中旬の頃より、不圖かりそめの病氣に犯され居り候ひしまゝ、心ならずもお疎遠に打過ぎ居り候、さるに、今朝たまさかにて同氏を音信候ひし處、思ひもかけず、此三四日以前よりは、ひたさ床に臥し給ひ、み枕もいさ重げに見ね申候、醫療も兎角しるしなく、お食事もはかばかしうは召しあがらず、お當人も此度は兎ても助かるまじなど申居られ候て、お兩親のいたく嘆き悲み給ふお有樣、見るに胸さへ塞がれ申候、此事同じ街に住

む私も、今日の今まで知るよしなく過し候ひしも、其許樣はお近親さ承り居り候へば、お承知さは存じ候へども、しさもなくば、後にて殘り惜しく思し召さんかさ、念の爲め人走らせ、お告げ申上候、かしこ。

佐久間八重子

かぐはしき、お名は屢々耳にし侍りしが、よき折もなうて、未だ、お目にかからぬこそ、最口惜しけれ。志かはあれど、此さきは、おねもごろのまじらひを、ねがはしうなむ。扨、我はかたみに教の庭に撫子を培ひ、夜は互に學びの窓に雪を積み、螢を集め。又袖ふりはへて出づる時は、姉よ妹よさ呼びかはし、同胞ならねど、苦樂を與にし手を引きあひ、歸るさきは、それにも彌增して、常々敬ひ愛む、某娘には、此頃勝ぐれ給はねさて、一間に、打ち臥し給ひぬ。想ふに、そは餘りに、學びの道にいそしまれ、給ひし疲れのこらせ給ひし故ならむ。されば、暫くは書をば打ちすてゝ、身さ心さを養ひ給へさ、よりよりは、嗚呼がましう、すゝめはべれど、生まれ得て好き給ひしは、ねもうべなひ給はず、さればにや、醫師も首を傾け、藥石も兎角、きゝめすくなく、日に重さの募り往く、昨日今日は、さりわけて、勞れも見ねけるこそ、此身のやめるよりも、尙、心苦うなん。なりて直にお生家へ、告げ參らせんさ、推しはべりしかど、お母君の、餘りに驚かれ給ひて、身をも心をも、そこなはれんさ、思ひはべれば、たもさの、いさ近き族さ、聞き侍れば、拙き一筆を參らするなむ、いさなめげには侍れど、何さぞ、お生家へ、よしなに、田鶴の一聲を、聞ね給はんことを、希ふになむ、あなかしこ。

名取正代子

取りいそぐまゝに、拙き一筆も、さる手おそしさはしりがき侍りぬ。さて何がしの君、さいつ頃より少しく風邪の氣味にてつねならずおはし給ひしかば、直にくすしがり伴ひまゐらせて、これかれさ、およばずながら看まゐらせしかど、何分すぐれさせ給はず、いさ心もさなう侍れば、なほこゝかしこのくすしをもまねきて、もはら看護におこたりなう侍り。されど、親ぎみはらからの君なさの、お枕邊近うおはし給ひなば、

いかに君も御心強うおぼすらんと、なりなりまなしすゝめまゐらせしかど、君がつれづれ御孝心の深さに、親はらからの君につげまゐらせて、御心ななやまし奉らん事、ながながに心ぐるしければ、かならずはしらせくるなとのみおほせ給ひて、うけひき給はれば、わらは獨り、とやかくやとあんしわづらひ侍りぬ。さりとて、このまゝにつげまゐらせではとおもまゝに、一言しらせまゐらするになん。されど、さしてみ心いため給ふほどにはあらざるべしと、くすしもまなし侍れば、みこゝろ易うおぼし給ひてよ、なほこゝにはくすしもろとも、力のかぎり看まゐらせて、一日も早う御いたつきのおこたらせられん事ないのりまつるになん。あまりは、後のたよりにとこそ。

佐々有鄰子

五月雨もはれそめて、やうやう空の氣色もすみわたり、梢には蟬のこゑうちしぐれ、朝夕はあつさもいやましゝに、其御元さまへは、かれて御目もじもいたさず、御名のみ承り侍りしが、此度御妹の梅子のきみ、昨夕より心あしくあらせらるれば、醫師なまねきて、御病氣の御樣子な問侍りしところ、さほど御氣ななやまし給ふには及び侍られど、學校内にては、御心なもおかれ玉ふべければ、鄕里にかへらせたまひて、御心ゆるやかに養ひたまふ方よろしからんとのことに侍れど、かくなんきこね上げまゐらする。あなかしこ幽麥の花さきにほふ學校の寄宿舍より、竹子敬白、

松男君の御もとへ

れりにふれて

舟葉女史

あすかの川にあられさも
ふちせさだめぬ世の中に
むかしも今もかはらぬは
君がまことの心なり

つゆのたもとなうるほして
しげるくさむらわけくれば
たにの小川の水の上に
とぶやほたるの二つ三つ

思ある身は思はずも
たゝずみながらたづねけり
なれもまた身なこがすかや
人にしられぬむれの火に

さめざらましと思へども
さむるならひのうつし世に
何なよすがゝつゆの身の
わすれかれたる君がかげ

## 茶ばなし

碓井信子

ある日、親しきおうな、我が家に來て、茶ばなしのついでに、龜てふものは、物やさしげに首なたれゐるものなれば、昔は女子は龜の如く柔和なるやうにと、龜の甲なさまざまの形につくり、女子の髮のかざりとなし戒しめたるものなれど、此頃は、皆馬爪とやら、角とやら、なかしきものゝみ、美事に作りたてゝ、人の目なくらまし、あきなへば、かう、皆わかき女子は、是等の面うつくしきに眼うばゝれ、あがなへばこう、馬の如くかけりあるき、或は牛の如く心に角な出す等のふるまひななしたまふならめとはあながちに言ひがたけれと、我ききにと數多の男子の中なもおそれずわけ入りてはまじらひつゝ、是とや非とや物まわ

がしく論ひ、或はましらの如き口つきして、道なかをも耻となさず、蟹がはふ横文字とかを言ひちらし、終には女尊男卑などゝいふ事をいふさへきくさへ片腹いたきかぎりなれば、我國ぶりは新しきをまなばんより、古き道をたがへず、奥深くわけいりて學びたらんには、皆禮儀たゞしく柔和なるものをと、ひたすらなげき語りたりき、實に此のおうなのいふ如く、一時はさもありけれど、此頃は如何にあたらしきを學びする人も、師の深きめぐみにて、斯の如きふるまひなすものを見る事たえてなくなりぬ。茶ばなしとは云へ實に一理ある事なれば、またのいましめにもやならんとて、まはらぬ筆にてものしつるを、幸に余白をかしたまひなば、此のおうなのあつき心もしられて、うれしき事になん。

## 夏山

森田增穂子

片岡のこのむかつをに椎まかむといひけん古事を思ふにも、げに夏は木陰こそうれしけれ。まして、かけ離れたる山住の心のどけさ、言はんかたなし。さらでだに、物ふりたる木立の、この頃しげりあひて、まつ照る日のかげつくを知らず、若柴にうけたる朝露が、入がたのかげさす頃まで殘れる、なかなかに見ばえあり。心の憂ひ、身の罪障は、きよらかなる筧の流に洗ふべし。瀧の聲は、涼しさ招く玉にまがひ、溪水の響は、自ら流泉の曲をやかなづらん。しばらく有て、月むかひの峰に徘徊す、殊更に待つとしにもあらねど、杜宇の啼聲を聞きても、かたらふごとに死出の山路を契るといひけむ、日野山の昔をしのび、折にしたがひ時にふれて、いづれかあはれならざらん。されどすぐれてめで度は、此度のころほひ、山邊のけしきにこそあんめれとて、

峯の松風谷の水、心涼しき山里は、軒端に月の影清く、夜なく〳〵來なく杜鵑。

---

# ●女鑑月並兼題歌文投稿書式

## 歌書式

題　住所　姓名

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、若しくは悉く假名、其他は一音の漢字にて認むべし。

## 文書式

題　住所　姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は詳明に記し、句讀點を施すべし。

文字は總て分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて、個々に離て認むべし。

書式に違ひたるはすべて沒書とす。

○婦人は何人にても投稿隨意たるべし。

生田目經德編

# 標注雅文消息集 全

菊版美本
全一冊
定價金廿五錢
郵税四錢

日用消息文の摸範は中古文にとらざれば雅馴なる言詞艶麗なる文章を綴りがたし慶長以來文學の大家古文の學を興してより契仲、眞淵、宣長、千蔭、翁麿、濱臣、春海など名家相繼ぎて斯の學を盛ならしめ國文の書世に出づるもの甚多く消息文の如きもその躰大にとゝのひ雅馴にして艶麗なる好摸範も多くあらはれたりしが其の後また多く世に行はれずなりぬ近來國文の再盛なるに方りて之を學ひ日用の消息に適用するはまことに必要のことゝなりこの篇專心を用ゐて古人の消息中より高尙にして雅馴なるものを採り四季雜の各部に分ち參考者の便よからんことをはかれり國文を修むるもの一本を坐側におきて摸範となさは益を得ること必大なるべし。

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 國光社

西村茂樹翁序
三輪田眞佐子女史著

第四版

# 女子處世論　全

定價二十錢　郵稅四錢

菊判美本

本書は女子教育に有名なる三輪田女史が日常實踐躬行に徵し女子たるもの丶世に處するの道を詳述せしものにして字々皆着實に句々悉く誠意に出で一も虛構の文字なし世の令嬢達此に依りて益々女德を養ひ以て神州國民の慈母たらんことに資せられんことを

東京京橋區築地二丁目廿一番地（電話番號本局八八）
發行所　國光社

杉谷正隆編

# 修身百首

全一冊

定價金貳拾錢
郵稅金四錢
郵券代用一割增

この書は我が國古來の和歌の中につきて修身の訓誡となすべきものの一百首を擇びこれに深切なる義解を附して一讀人をしてその本義を了得し而して大に發明する所あらしむるものあり我が國道德の標準は之を古人の言行にとりて是非善惡の跡を明にするを學者の要務とす淑女諸子乞ふこの篇を讀みて其の德器を養ひ給へかし

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　國光社

# 皇朝婦女鑑

皇后陛下御製和歌

東久世伯爵題字
磯野德文撰

挿畫筆者〔松本楓湖 富岡永洗〕〔永峯秀湖 其他數氏〕

第一編

用紙舶來上等品
菊判美本密書數十入
口畫松本楓湖畫彩色摺

定價一冊代金三拾錢
郵稅金四錢

本邦婦德の美其の淵源遠し之を繼承し之を發揮するは今日婦女子たる者の任務なり本書は斯主旨に依りて太古より現今に至るまで貞淑賢良の婦女數百人の傳を撰み以て百代の明鑑と爲さんことを期す大日本帝國の女子たるもの此に依りて益々其女德を養ひ以て神州國民の慈母たらんにて資せよ

本書の特色とする所は・事實正確なるにあり・本書の特色とする所は・文章流麗なるにあり・

本書の特色とする所は・挿畫精美なるにあり・本書の特色とする所は・氣品秀麗なるにあり

以て婦德の經典と爲すべく以て文章の摸範と爲すべし

第一篇 目次〔●木花開耶姫命●豐玉姫命●倭迹々姫命●狹穗姫命●倭姫命●弟媛命●神夏磯媛●速津媛●弟橘媛命●宮簀姫命●神功皇后●阿曇の連子媛●髮長媛●吉備兄媛●玖賀媛●國依姫●田道將軍の妻●忍坂大中姫命●衣通姫●少々等●草香幡梭媛●栲幡の皇女●引田部の赤猪子●棚津姫●三重采女●置目●振媛●物部麁鹿火妻●山田皇女●松浦佐用姫●馬飼[illegible]依の妻●大葉子●豐御食炊屋媛命●上毛野形名の妻●寶皇女●陸奥前采女●櫻兒●蘰兒●眞間手兒名●菟名日處女●鵜野讚良皇女

第二篇〔奈良朝より平安朝まで〕目次 四十餘人の傳をはさむ 挿畫筆者松本楓湖以下斯道名家數氏

第三編以下 毎月十五日發行凡七編乃至八編にて完結の豫定

發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 靜思館

# こゝろの華

六

●本誌は歌文專門唯一の雜誌にして畏くも天覽の榮を辱うす
●七月十一日發兌●

●論說●歌に用うる譬喩 文學士 武島羽衣…●もちゐるの假字(承前) 下田義天類
●讀書家の弊…或人に答ふ…無名氏
●文學史料●伴信友傳 山岸惟和稿…●

文苑○歌 東久世通禧●高崎正風●鍋島直大●同榮子●前田利嗣●久我建通●松浦詮●長岡護美●福羽美靜●本居豐穎●木村正辭●鈴木重嶺●税所敦子●下田歌子●三田葆光●小出粲●中村秋香●小杉榲邨●植松有經●橘道守●大口旅師●千葉胤明●遠山英一●加藤義淸●樸村宣雄●鶴久子●佐々木信綱●全昌綱●杉下豐●宮地巖夫●茅田眞狹臣●井上通泰●荻原巖雄●有馬留子●平田三枝子●西西子●

病中贈答歌 久保猪之吉…●氷を喫ひて思へらく 小杉榲邨
若菜 鈴木小舟
●漫錄●文話(其三) 小杉榲邨…●熊谷直好大人
旅日記(其二) 林陸夫寄…
淨瑠璃百首(其四) 小野務●貧者行●長者行 作者不詳●
詞海 短歌長歌新体詩數百首
●雜報 杉下氏歌會●歌會の寂寞●夏季講習會●小學教員と歌●唱歌●講義錄●俳諧者と國語●孝子と歌●三號雜誌に付て●月の桂●さゝなみ
●學園 課題歌貳百二十三首●文二十篇
●附錄 久米幹文翁筆扇面

●定價 一冊金十錢●六冊前金五十五錢●十二冊金一圓●郵稅一錢●郵券代用一割增●爲替は東京青山郵便局振込の事●

●發行元 東京市赤坂區青山北町 こゝろの華發行所●

●發賣所 東京神田表神保町 東京堂●東京市麻布箪笥町 文遊堂●

# 女子の友

令嬢貴媛必讀雜誌

**定價** 一冊金拾錢●六冊金五拾七錢●十二冊金壹圓拾錢●廿四冊金貳圓拾錢●郵便切手代用一割增●全國無遞送料

## 發刊一周年祝賀 七月五日發行 第貳拾五號目次

**口繪大石版** 世界女くらべ 帝國大學教授坪井正五郎撰●大野雲外筆

**女子の友** 今後の女子 東京高等女學校教諭小島政吉

**家庭** 救急談 醫學士古川榮●食物のこと 敲玉女史●點茶 東京女學館講師田邊わけ子●紐結び 東洋子●摺み紙 東洋子

**史談** 傍註は、その落葉 學習院教授關根正直●阿佛の尼御前 宮內省御歌所參候小杉榲邨●

**學藝** 地錢の話 理科大學 自然子●幼兒保育法 女子高等師範學校附屬幼稚園保姆清水鶴子●伊勢地方の鞠歌 前川三郎●同地方女子教育家庭の教育の狀態 前川三郎

**小說** 阿春ひとつだ●黃袱紗 小栗風葉●

**漫錄** 百人一首講議 笠原政億●夏野のひこゞへ 山本藪鶯●手鞠歌 醉月閑人

**文園** 歌一首 小出粲●同 鈴木重嶺●同 黑川眞道●同 塙忠雄●同 鶴久子●同 鶴光美●同 三輪義方●女子の友發行一周年を祝ひて二首 長谷たき子●夜雨 勝家貞文●浦つたひ 華族女學校學監下田歌子

**本誌一周年祝賀懸賞歌文** 數百首●

**雜報** 口繪石版世界女くらべ說明 帝國大學教授坪井正五郎●大神宮遷御の次第●北白川宮女王の御詠●伊勢齋宮の御墓につきて●高等女學校及各種學校一覽表●女子夏期講習會●酒田高等女學校開校式●和歌山高等女學校●太田裁縫學校●貞婦いし女●女學生の儀容●言語●本居宣長翁の奧槨の修理●塙保己一の墓●金色堂れよび古英雄の木乃伊●くさ／＼●沖繩師範學校敎諭安藤喜一郎●臺灣の女子風俗一斑 臺灣總督府國語學校敎諭鈴木光愛●新刊紹介●月並兼題●女子の友寄書募集

**附錄講義** 同文講義 池邊義象

**發行一周年の祝意を表するため特に割引切符を附す**

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず會員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

# 女鑑

毎月五日廿日發行

| 定價 | | 廣告料 |
|---|---|---|
| 一冊 | 十錢 | 五號活字廿三字詰一行金二十錢 |
| 六冊前金(三ヶ月分) | 五十五錢 | |
| 十二冊前金(半年分) | 壹圓 | |
| 全國無遞送料 | | |


明治三十一年七月廿四日印刷
同年七月廿五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　川崎直衞

東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人　竝木良雄

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　(電話番號本局八八)　國光社

副島蒼海老伯講話

# 精神教育

紙數 二百五十頁
洋裝 金六拾錢 郵税八錢
和製 金五拾五錢 郵税六錢

近時教育倫理の著書世に出つること日に愈多しと雖も**國民**の**特性**を發揮し人心の本然を闡明し**傳神感化**の妙用を說示せるものは實に絶無に屬せり是識者の夙に慨歎せる所たり此の書收むる所**教導**、**感化**、**日本**の**教育**、**日本**の**歴史**より以て老伯獨得の**哲理**に及び簡明平易すべて講話のまゝを記すされば此書は當今**唯一**なる**倫理**教育書なるのみならず亦た**心學**の**明鑑**なり附錄**詩文**は大に世道人心に關し**適淸概畧**は、伯が昔日使命を淸國に奉して**滿廷**を**懾服**し**英**、**露**、**獨**、**佛**、**米**、**蘭**の公使をして**下風**に**拜**せしめたる快事蹟より**征韓論**、**臺灣征討**等の實話に及び一讀人をして**奮起踊躍**せしむるものあり今や**東邦**の**危機**日に切迫し我が國民の**士氣**は愈屏息に歸せんとす此の時に當りて此の書の出つる豈偶然ならむや

國光社發兌

**專賣所** 東京京橋區築地二丁目廿一番地 **靜思館**

（明治二十四年八月四日內務省許可
明治二十五年十月十二日遞信省認可）

[illegible]國光社印刷部印刷